

旧龍江村の小字

【鷺ノ巢】

サギノス。

この小字は、舟渡自治公館の北、30mほど北側にある。天竜川左岸の岸辺にある。

目立つほどの鷺だったと思われるので、鷺のコロニーがあったのであろう。鷺は大きな川の水辺をすみかとしており、松林や雑木林にコロニーをつくとされている。現在でも、青鷺が八王子神社の桧木林に群れていて、地元では鳴き声や糞に頭を抱えている。

サギノスとは、素直に、「川の近くの樹林に鷺がコロニーをつくっているところ」であろう。この地名が発生した頃には、この付近にも松林や雑木林があったと思われる。

サギノス地名は、25,000分の1の全国地図には、中・大字として3件の記載がある。

【上ノ坪・下坪・下坪下】

ウエノツボ・シモツボ・シモツボシタ。

舟渡自治公館や龍江一区公民館のある小字で、主要地方道飯田・富山・佐久間線が間を貫いている。

南の方に、シモツボ小字があり、相互に関連しているものと思われる。

ツボ（坪）には、二通りの解釈が可能である。①動詞ツボム（窄）の語幹で、「窪地」をいう。②古代条里制における小区画で、方一町の区画。（以上は語源辞典）

ここでは後者を採りたい。一町は、ほぼ109mほど。ウエノツボもシモツボも、だいたい方一町に近い形をしていると思われる。古代の区画がそのまま残っているとは考えられないので、

その名残とみておきたい。

ウエノツボとは、天竜川上流側にある「上の方にある方一町の区画」、シモツボは「下流側にある方一町の区画」であり、シモツボシタは「シモツボより低いところにある土地」ということになる。

【ヒツヘキ】

この小字は、天竜橋の下流100mほどの所にある。ウエノツボの北側にあり、飯田・富山・佐久間線が通っている。

ヒツヘキとは何か。国土地理院の全国地図には一件の記載もない。珍しい地名というべきか。

ヒツはヒズ（漬）の古語で、「濡れること」を意味する。ヘキはヘキ（壁）で、「崖」のこと。ヒツヘキとは、「水気のある崖」を意味するものと思われる。天竜峡右岸に、「ヒツ岩」という小字があるが、これを「湿り気のある岩」と解釈している。天竜川沿岸の岸壁には地下水のしみ出すところが多く、こうした小字名となっているものと思われる。

【シコブ】

ジコブともいうらしいが、はっきりはしない。

この小字は、天竜川左岸の岩場にある。主要地方道より天竜川側に限られている。

シコブあるいはジコブも、25,000分の1地図には載っていない。

シコはシコ（醜）で、「荒々しく嶮しい地」をいう（語源辞典）。フはフ（生）で、「～になっている所」をいう。シコブとは、「岩が荒々しくゴツゴツしている所」と解する。子どものころ、ここで硫化水素の臭いを経験している。隙間が多いということである

うか。

【日カゲ】

ヒカゲ。

この小字は、シコブ小字の上流側にあり、鷲流峡の出口に当たる。真上に新しい天竜橋が架けられている。

ヒカゲとは、文字通り、「日当たりのよくない所」を意味するものと思われる。天竜川に洗われるところは、岩が重なり、水流が届かないところには樹木が茂っていたと思われるので、この付近は日陰になることが多かったのではないだろうか。

【櫓下】

ヤグラシタ。

この小字は、新しい天竜橋の左岸橋脚付近にある。

静岡県榛原郡では、方言で断崖絶壁など、山に寄りつけないような難所をヤクラといっている（方言大辞典）。このヤクラがヤグラに転じたものであろう。龍江は遠州に近い。

なお、遠い青森県では、ヤクラとは、雨乞いの祭事などをする川縁の険しい崖をいうらしい。龍江のヤクラとの関係は薄いと思われるが。

ヤグラシタとは、「断崖絶壁の下」を意味する。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字としてヤグラシタ地名は一件の記載もない。

【中平】

ナカダイラ。

この小字は、ヒツヘキ小字の一つ上の段丘にある。

ナカ（中）は、中心地を意味する場合が多いが、ここでは採らない。ダイラは「中腹の平らな場所」（語源辞典）をいう。

ナカダイラとは、「いくつかの段丘

が重なる、その間にある段丘で平らの所」をいう。

ナカダイラはどこにでもある地名で、国土地理院の全国地図にも 44 カ所で、中・大字として記載されている。

【石原】

イシハラ。

この小字は、ナカダイラ小字のすぐ南側で、同じ段丘上にある。桑園だったところである。

イシハラ地名も、どこにでもある地名で、全国地図には 78 カ所に載っている。

ハラ（原）とは、三つの解釈がある。①開墾地をいう場合。②未墾の入会草刈地をいう場合③神聖な地をいう。がある。

ここのハラはどれとも決めかねるが、イシハラとは、「石の多い開墾地」をいうのが正しいかもしれない。もし入会草刈地であれば、石が多いことをアピールする必要が無いように思われるがどうであろうか。

さらに、「石の多い、神聖なところ」というのも捨てがたい。近くにドウカイト小字があるからである。

それにしても、イシハラ地名が多いのは、年貢対策であろうか。

【堂垣外・堂ノ上・東照寺】

ドウカイト・ドウノウエ・トウショウジ。

これらの小字も、イシハラ小字の南側にあって、中の段丘上にある。

ドウ（堂）は、川音による音響地名ではなくて、「仏堂のあったところ」としたい。すぐ南には、東照寺がある。さらにドウノウエ小字もある。ここの一帯には、東照寺関係の僧坊や仏堂が薈を並べていたのではないだろうか。ドウカイトは、「仏堂のあった跡地」。

【塩田】

シオダ。

この小字は、中の段丘上にあつて、北は塩田沢川との間にサワ小字を挟んでおり、南はドウカイト小字に接する広い小字となっている。

シオダは何を意味しているのか。

シオ（塩）は動詞シホル（霑）の語幹で、濡れ湿った状態をいう。タ（田）は、田んぼのことか、あるいは場所を表す接尾語タ（処）のどちらかであろう。

シオダとは、「水気の多い所」となる。段丘の麓には自然の湧水が多い。このことをいっているのであろう。

シオ（塩）は塩分を含んだ湧泉のことであるという解釈も可能であるが、近くにある丸山の湯のご主人は、この湧泉は塩分をほとんど含んでいないという。「塩類泉の湧出する所」では無い、ということになる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、12カ所にシオダ地名が出ている。

【沢】

サワ。

この小字は、塩田沢川に沿って左岸に細長く伸びている。

サワは、「山間の比較的小さな溪谷」（広辞苑）であろう。東日本にはサワが多く、西日本にはタニが目立つという調査結果もある（鏡完二）。

25,000分の1の全国地図に、中・大字として挙げられているサワ地名は、61件もある。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は、塩田沢川右岸の高みにある。

マルヤマとは、「形の丸く見える山」

（国語大辞典）である。

丸く見える山は全国にいくらでもありそうだ。国土地理院の全国地図にも、その通りで、352カ所に、中・大字として記載されている。

【対座・たいざ・對座】

いずれもタイザである。

タイザ小字は、龍江には3カ所にある。

一つは今田の兎城の西側にある広い小字で、その飛び地である東の方の鼬ヶ沢左岸にも小さなタイザ小字がある。なぜ、ここのあるのか分からないタイザである。地図のミスプリントかもしれない。

二つ目は、中の段丘の南の方で、樋ヶ沢右岸にある。すぐ北隣には、カミノボウ小字があり、寺院の存在をうかがわせる場所である。

もう一つは、天竜峡の姑射橋より下流側の天竜川左岸にあつて小高い丘がある。かつて竜峡園のあったところ。

竜丘にも駄科と時又にタイザ小字があつて、次のような二つの仮説をたてておいた。

①芸能集団が田を作りながら居住していた場所。

②段丘などの平坦な場所で、貴人か神仏を祀る場であったところ。

龍江のタイザ小字をみると、②に有利と思われる。

しかし、三つ目の天竜峡のタイザ小字の近くに、貴人の屋敷跡や神社仏閣が現在のところ、見当たらないのが、気になる。あるいは、強気にタイザ小字があるから、有力者の居住地あるいは寺社関係の跡が出てくるのではないか、という期待もある。

【ヒラ】

ヒラ小字は、タイザ小字の北隣にあ

り、西隣にはニシホッキ小字がある。

ヒラとは、「台地。山の一部が平らになっているところ」（語源辞典）であるという。これだけでは、少し物足りないように感じるが、今のところ、さらには付け加えられそうにもない。

国土地理院の全国地図には、ヒラ地名は、中・大字として、44カ所挙げられている。「平」地名になると、172カ所にもなる。

【ホッキ・西ホッキ・入ホッキ】

ホッキ・ニシホッキ・イリホッキ。

ホッキ小字は、鼬ヶ沢が天竜川に合流する、その左岸にある。龍江の最北端の小字である。

ニシホッキ小字は、ホッキ小字の天竜川に沿った南側にある。

イリホッキは、天竜川から離れて鼬ヶ沢にそって遡行した鼬ヶ沢左岸の溪谷にある。「奥へ入ったところにあるホッキ」の意であろう。

ホッキ←ホキ（歩危）と、この地域で転化したもので、長野県下伊那郡では、「溪谷沿いの急傾斜面に通路の開かれた所」をいう、と語源辞典にはある。

国土地理院の25,000分の1地図にも、ホッキ地名は載っていないが、ホキ地名は13カ所ある。ホッキは伊那谷南部特有の地名といえよう。

なお、龍江のこのホッキは天竜川右岸のホッキ小字に対応しているものと思われる。

【鼬ヶ沢】

イタチガサワ。

この小字には、一般廃棄物最終処分場と兎城公園がある。鼬ヶ沢川に沿っているのは、当然であるが、ホッキ小字の東隣に当たる。

イタチガサワとは、何か。二説を挙

げておきたい。

①「ネコ目のイタチが住んでいる谷」をいう。果たして、ここだけがイタチの目立つところだったのか、という疑問がないでもない。

②イは接頭語で、語調を調べ意味を強めるはたらきをする。タチは動詞タツ（断）の連用形が名詞化したもので、断崖を表す。イタチガサワとは、「険しい断崖のある谷」ということになる（語源辞典）。

②を支持したい。

国土地理院の全国地図にはイタチガサワ地名は、載っていない。

【東城】

ヒガシジョウとある。しかし、これは、後で述べるように、トウジョウの可能性が高い。

この小字は、本丸があったといわれる兎城公園の南西側にあり、南南東方向に小さな飛び地がある。

ヒガシ（東）といえば、日の出る方向しか考えようがないのであるが、この小字は、本丸から見て東の方向には無い。

そこで、以下のように考えたがどうであろうか。

トジョウ（兎城）→トウジョウ（東城）と転化したと考える。それが、さらにトウジョウ→ヒガシジョウに変わった。東は瑞祥名だったためと思われる。

トジョウのトは、形容詞トシ（利）の語幹で、「険しい地形」をいう。

トウジョウとは、「険しい崖の上にある城」ということになる。兎がたくさんいたわけではない。

【城ノ腰】

シロノコシ。

この小字は、イタチガサワ小字を挟

んで、北と南の二カ所にある。

方言大辞典によれば、コシには「そば。周辺」の意味がある。使われている地方は、岩手・新潟・岐阜・三重と広い範囲にわたっている。長野は入っていないが、これを採りあげたい。

シロノコシとは、「城の周辺」を意味する。

全国地図には、中・大字としてシロノコシ地名は1件のみ挙げられている。

【二百目・五十目・八百目・五百目・壹貫目・六百目・百目・三百目・七目・猫俣四百目】

〇〇メという、数字の後にメの付く小字が龍江には特に多い。一つ一つについて考えるのは、重複が多くなるので、二百目について考えることにする。

ニヒヤクメ小字は、今田に2カ所、尾林に1カ所ある。今田は、「東城」小字の南隣と樋ヶ入沢川の右岸。尾林は紅葉川に沿った左岸にある。

ニヒヤクメとは何を表しているのか。龍江村誌は三説を挙げているが、そのうちの一つは理解不能なので、二つを紹介する。

①下條氏は知行を与えるとき、一坪を一文、千坪を一貫文といい、一坪を一匁としたらしい。とするとニヒヤクメとは、二百坪の面積の土地ということになる。今でいえば、ほぼ660㎡である。ここで気になるのは、下條氏が今田を支配したことがあったのかどうか、もしあったとすれば、それはいつ頃のことであったのか。地名発生の時期を割り出すこともできる。

②粃の収穫時に5石を永楽錢1貫文に換算したらしい。これによれば、ニヒヤクメとは、ほぼ1石の粃を生産できる田んぼということになる。

ニヒヤクメとは、土地の面積を意味

するのか、それとも土地の生産高をいうのか、そのどちらかということになりそうだ。

国土地理院の全国地図には、ニヒヤクメ地名も「二百目」地名も記載されていない。

【大稲葉・稲葉尻・イナバ・稲葉】

オオイナバ・イナバジリ・イナバ。

龍江には、このイナバ関係小字も多い。イナバ小字は今田に2カ所と宮沢に1カ所、イナバジリ小字は今田と宮沢に1カ所ずつ、オオイナバ小字は今田に1カ所ある。

いずれも、南～西向きの傾斜地にある。オオイナバ小字をみると、塩田沢川右岸にあって、南～西向きの斜面になっている。すぐ西隣には、ヒナタ小字があって、日当たりがいい所と考えられる。オオは美称の接頭語。イナバは「稲干場」を意味する。現在の田んぼまでの距離は30mほどか。近年、刈り取った稲を稲架にかけて乾燥させてきたが、それ以前は、日当たりのいい斜面に稲を並べて乾燥させたのだという。

イナバは鑄穴場とする見解もあるが、ここではどうであろうか。小鍛冶滓などが出てくれば、鑄穴場の可能性は高くなる。

イナバジリのジリはシリの濁音化したもので、「裾」を意味する。イナバジリとは、「稲干場の麓」ということになる。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、オオイナバ地名は4カ所に挙げられている。

【日向・南入日向】

ヒナタ・ミナミイリヒナタ。

ヒナタ小字は、塩田沢川右岸のマルヤマ小字の上流側でオオイナバ小字

の下流側にあり、大部分が水田になっている。

ミナミイリヒナタ小字は、塩田沢川のヒナタ小字よりも奥の方にある。

ヒナタとは、文字通りで、「日当たりのいい所」をいう。

ミナミイリヒナタのミナミイリとは、キタイリ小字に対して南の方にあるイリ、という意味であろう。「南の方にある谷の奥まったところで、日当たりのいい場所」ということになる。

ヒナタ地名は全国的にも多く、中・大字で141カ所もある。これに対して、当然であるが、ヒカゲ地名は78件とヒナタ地名よりは、少なめになっている。

【洞】

ホラ。

この小字は、塩田沢川に白ナギ沢が合流するところにある。

少なくとも伊那谷南部では、洞というのは沢よりも幅の狭い谷だといわれている。

ちょうど比較でもするかのように、塩田沢川の下流の広い谷間にサワ小字があって、その上流の狭くなった谷にホラ小字が配置されているのが面白い。

ホラとは、「沢よりも幅が少し狭い谷間」を意味する。

国土地理院の25,000分の1地図には、ホラ地名が26カ所、中・大字として挙げられている。

【境無】

サカイナシ。

この小字は、塩田沢川にまたがっており、オオイナバ小字の南側にある。

サカイナシとは何を意味しているのか。むずかしい地名である。境界が無いという理解では意味不明となっ

てしまう。語源辞典によって、仮説を二つ立てておきたい。

①サカ(坂)・キ(井)で、「傾斜地で、水を汲み取るところ」。ナシは動詞ナス(成)の連用形が名詞化したもので、「～という所」をいう。合わせて、サカイナシとは、「傾斜地で水を汲み取るようにしている所」とする。

②サカイ(境)はサ(語調を調える接頭語)・カヒ(峡)で、「谷の狭まっている所」のこと。ナシ(無)はナラシ(平)の転で、「緩傾斜地」を意味する。サカイナシとは、「谷が狭まったところの緩傾斜地」となる。

国土地理院の全国地図には、サカイナシ地名の中・大字は1件だけある。「境ナシ」の字を宛てている。

【南入・北入】

ミナミイリ・キタイリ。

これらの小字は、兎城の奥に当たり、東側から西側に広がっている、イリ小字群の一つ。他には、イリホッキやイリトウゲがある。

イリ小字群は、兎城など中心地域の奥にある、ということで名付けられているものと思われる。

ミナミイリとは、「城より奥の方にあるイリ地籍の南側の土地」をいい、キタイリとは、同様に「城より奥の方にあるイリ地籍の北側の土地」ということになる。

国土地理院の全国地図の中・大字の中に、ミナミイリ地名とキタイリ地名はそれぞれ1カ所ずつあるが、いずれも伊那谷である。

【中曾祢】

ナカソネ。

この小字は、2カ所にある。一つは塩田沢川の上流部右岸にあって、イリホッキ・ミナミイリヒナタ・ホンダ・

マタギダ・テンジンなどの小字に囲まれている。もう一つは御庵沢川中流部の右岸にあって、マキノツボ・フクジン・クラタ・チャドウなどの小字に囲まれている。

いずれも、上下には、段丘があって、中の段丘に相当する場所に位置している。

ナカソネとは、「中段にあり、一丘となっている所」といえようか。語源辞典には面白い解説がある。ソネム(嫉)から転化したものとしているが、地名の場合は、「浸食作用をうけつつ残した部分(高み)をいうものであろう」としている。

龍江のソネは、それほどあからさまではなく、もっと平されて一般化している感じがする。

国土地理院の全国地図の中・大字には、ナカソネ小字は12カ所に挙げられている。

【本田】

ホンダ。

この小字は、塩田沢川上流部にあり、周囲には、キツネボラ・ミナミイリヒナタ・ナカオ・ナカソネなどの小字がある。

ホンダとは何か。意外と難しい。とりあえず、語源辞典によって二通りの解釈を示しておきたい。

①ホンダ←ホンデン(本田)と転じたもので、ホンデンとは「近世、その土地の最初の検定帳から記載されていた田」であるとう。ホンダとは、「新田に対して古くから耕作されていた田んぼ」ということになる。灌漑が行われるようになる以前の水田で、湧水や自然流水を利用していたころからの田ということであろうか。

②ホンダ←ホムチ(誉治)と転化した

もので、ホホム(含)・チ(地)の略。「含まれたような地形の場所」であるという。この場合は、ホンダとは、「急傾斜地に囲まれた場所」ということになる。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、ホンダ地名は12カ所に、ホンデン地名は48カ所も記載されている。

【天神】

テンジン。

この小字は、塩田沢川の支流の最上流部にあり、イリホッキ・イリノトウゲ・マタギダなどの小字に囲まれていて、兎城東方に位置する。

テンジン小字には、天満天神が祀られている。

天神は、本来は地神に対する天つ神を意味するが、ここでは、菅原道真を祀っている。崇りを怖れるという御霊信仰の影は薄く、学問の神様である菅原道真をまつるという天神講が行われていたのではないだろうか。

天神講は特に関東地方から長野県・山梨県・静岡県東部・伊豆地方に濃厚に分布しているという。概ね15歳を上限とする子どもたちが天神社や集会所などに集まり、食事をして遊ぶ、という子どもたちの講である。天竜川対岸の飯田市嶋地区では、3月下旬に子供会主催で天神講が、昭和30年代まで行われていた。

全国地図には、中・大字として、テンジン地名は123カ所も記載がある。

【大平】

オオダイラ。

この小字は2カ所にある。一つは、龍角峰を含む天竜峡公園の広い地域で、もう一つはテンジン小字北側の小さな小字である。

ダイラには「山頂または中腹の平らな場所」（語源辞典）という意味がある。

天竜峡公園のオオダイラは、文字通り、「丘陵の頂の平坦部を含む広い土地」をいう。

兎城東方の小さなオオダイラの場合、オオは美称の接頭語で、「中腹の平らな所」をいうものと思われる。

この小字名は各地にあつて、全国地図にも、中・大字として、オオダイラ地名は 103 ヲ所が挙げられている。「大平」地名となると、294 ヲ所と増えるが、これはオオヒラの呼び方も入ってくるからである。

【井ノ上】

イノウエ。

この小字は、3 ヲ所ある。二つは兎城東方の鮠ヶ沢川の左岸にある長い小字とその飛び地のような小さい小字。もう一つは東照寺の東方にあつて、ヨコヤマ・ミョウトイワ・エノキダなどの小字に囲まれている小さな小字。

イ（井）は、「泉や流水から、水を汲み取る所」（国語大辞典）であるが、水路や川と同様な使われ方をしていう（語源辞典）というのは、正しいと思われる。

東照寺東方のイノウエ小字は近くにイシタ（井下）小字があり、対になっている。イノウエとは、「ここを流れている流水の上側の所」をいう。

鮠ヶ沢川にある、イノウエのイ（井）は鮠ヶ沢川をさしている。ここのイノウエは、「鮠ヶ沢川の左岸溪谷」をいう。

25,000 分の 1 の全国地図には、中・大字として、56 ヲ所に記録されており、この数は当然のことながら少なくはない。

【入ノ峠】

イリノトウゲ。

この小字は、兎城東方のイリ小字群の一つで、イノウエ・テンジン・ハッピーヤクメなどの小字に囲まれている。

イリノトウゲとは、「兎城より奥の方にある峠」をいう。地図をみると、この小字内には、峠らしい峠は見当たらないが、隣のテンジン小字とハッピーヤクメ小字には峠があるので、このどちらかを指しているものと思われる。

なお、全国地図には、イリノトウゲ地名は載っていない。

【柳洞】

ヤナギホラ。

この小字はイリ小字群の近くにあり、イリノトウゲ・テンジン・ゴジュウメ・ハッピーヤクメなどの小字に囲まれている。

ヤナギホラとは何か。考えられる解釈は二つ。

①文字通りに解釈して、「植物のヤナギが生えている洞」とする。わが国のヤナギは約 90 種、この山地でもヤナギがないとはいえない。

②ヤナ（斜面）・ギ（場所を示す接尾語）とする。ヤナは関東地方の方言で、「畑の縁の斜面」を表すという。ギはカ、ユ、クと同じ。ヤナギホラとは「畑の近くの傾斜地」ということになろうか。この小字境が異様に果樹園を避けていることは、この説の傍証になるかどうか。

【又木田】

マタギダ。

この小字も兎城東方にあり、周囲には、テンジン・ナガタ・ハッピーヤクメ・ゴジュウメ・ヤナギホラなどの小字がある。現在は、尾根の末端は、森林であるが、これを除けば、ほとんどが棚

田になっている。

マタギダとは何を意味するのか。

マタ（又）は、谷の分岐点を表す。現地で見ると、柳洞の谷と八百目の谷が、ここで合流している。

ギダ（木田）は、キダハシ（階）で、階段状になっている地形をいう。マタギダとは、「二つの谷の分岐点で、階段状になっているところ」を意味する。

全国地図には、なぜかマタギダ地名もマタキダ地名も、一件も記載されていない。

【桃ヶ平】

モモガダイラ。

この小字は、塩田沢川最上流部にあって、小さな洞になっている。現在は、下流側の一部に水田や桑園があるが、果樹園はない。

モモガダイラとは何か。すぐに、桃が植えられていなければ、と思いたいが、先に述べたように、果樹園そのものがない。

モモガダイラとは何か。

モモはママが転化したもので、マブ、アブ、マミ、ハバ、ババなど同系の崖を表す用語であるという（語源辞典）。モモガダイラとは、「周辺には崖もあるが、下の方には平坦地もある所」であろうか。

モモを単なる美称とする解釈もできないことはない。とすると、モモガダイラとは「山の中で平坦地もある所」となるが、成立する可能性は薄い。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、モモガダイラ地名は一カ所にだけ取り上げられている。

【つがの尾】

ツガノオ。

この小字は、イノウエ小字や「八百目」小字のさらに奥にあって、クズレ

イワ・ナギシタ・ジャハミなどの崩壊地名に囲まれている。

ツガノオとは何を意味するのか。仮説を二つ挙げておきたい。

①ツガは動詞ツガウ（番）の語幹で、「二つのものが対応した状態」（語源辞典）をいう。オ（尾）はヲ（峰）で、「高み。峰」のこと。合わせて、ツガノオとは、「二つ並んだ峰」を意味する。

②ツガはツギ（継）と関係し、「段差のある地形」（語源辞典）をいう。こちらの場合、ツガノオとは、「段丘状になっている峰」の意か。

前者の肩をもつべきか。

国土地理院の全国地図には、ツガノオ地名が一カ所、中・大字として、記載がある。

【崩岩】

クズレイワ。

この小字は、ツガノオ小字の廻りに二カ所、いずれも鼬ヶ沢川溪谷の急傾斜地にある。

クズレは、動詞クズレル（崩）の連用形が名詞化したもので、当然のことながら、崩壊地形を表す。

クズレイワとは、「崩れやすい岩のある所」としておきたい。

国土地理院の 25,000 分の 1 の全国地図には、クズレイワ地名は、なぜか一件の記載も無い。面積が小さいことや瑞祥地名とは言えないためか。

【崩下】

ナギシタ。

この小字は、鼬ヶ沢川溪谷の左岸の急傾斜地にあり、クズレイワ小字の下側になる。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化したもので、ナグには、「切る」とか「落とす」という意味があり、ナ

グの連用形や語幹の多くが、崩壊地形を表す用語になっているという(語源辞典)。つまり、ナギ(薙)は崩壊地をいう。ナギシタとは、「崩壊地の下の方」となる。

国土地理院の全国地図には、ナギシタ地名は一件もない。

【蛇ハミ】

ジャバミ。

この小字は、鼬ヶ沢川支流の溪谷の急傾斜地にある。

ジャバミとは、「崖崩れ地」(語源辞典)をいう。これも語源辞典であるが、ジャは、ザレ・ゾレ・ジャク・ジャクズレ・ジャヌケなどに通じ、「崖地」を示すものが多い。サクル(抉)の語幹が濁音化したもので、ハミはハム(食)の連用形から「物を損なう」の意で、崩壊地形を示すようになったという。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてジャバミ地名は8件の記載がある。

【萩ノ平】

ハギノタイラ。

この小字は、鼬ヶ沢川上流部の山地の標高の最も高い地域にわたる広い小字である。周辺には、「八百目」・ジャバミ・シロナギ・カワジリなどの小字がある。

ハギノタイラは何を意味するのか。萩の花が咲き乱れている平坦地ではあるまい。語源辞典によって、二説を挙げておきたい。

①ハギ(萩)は、動詞ハグ(剥)の連用形が名詞化したもので、「崩崖」をいう。タイラ(平)は、「山頂部分の平坦地」のこと。合わせて、ハギノタイラとは、「周辺に崩崖のある山頂付近の平坦な場所」となる。

②ハギ(萩)は、焼畑をいう。ハギノタイラとは、「焼畑が行われた山頂付近の平坦な所」となる。ハギにはハリ(墾)の転で、開墾地の意味もあるが、現在、果樹畑もあるが、多くは山林や荒地が多いことから、焼畑と判断した。

国土地理院の25,000分の1地図には、ハギノタイラ小字が2カ所で、中・大字として記載されている。

【笹山】

ササヤマ。

この小字は、鼬ヶ沢川溪谷の急傾斜地にあり、ハギノタイラ・フカボラ・クズレイワなどの小字に囲まれている。

ササヤマについては、いろいろな解釈がなされてきているという。手っ取り早い、「植物の笹の多い山」ではないだろう。ここでの解釈は二通り。これも語源辞典に添って見ていきたい。

①ササ(笹)は、擬音語のササで、「水が勢いよくサラサラと流れるさま」をいう。ササヤマとは、「鼬ヶ沢川がサラサラと流れる音が聞こえる山」か。

②ササはササフ(支.障)の語幹で、「さえぎる。か妨げる」の意。ササヤマとは、「深くて通行が困難な山」を意味する。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ササヤマ地名が24カ所に挙げられている。

【深洞】

フカボラ。

この小字は二カ所にある。一つは、鼬ヶ沢川中流の溪谷の急傾斜地にあって、ササヤマ小字とイクチ小字の間の小さな小字である。もう一つは、新しく開通した道路が通っていて、山頂部にある大きな小字である。

フカボラとは何か。二通りの解釈が

ある。

① 鮠ヶ沢川沿いの小さな小字については、「鮠ヶ沢川の水深が深くなっている洞」とする解釈もある。それが上方の大きな小字にまで適応できるかどうかは、たとえば、かつては一体の小字であったにしても、判断が難しい。さらに、近くの住民にとっては、川が深いということが、それほど重要で目立つような事柄なのであろうか、という疑問も残る。

② フカ（深）←フケで、フケル（更）の連用形の名詞化したもの。静岡や和歌山の方言で「湿地」を意味する（国語大辞典）。フカボラとは、「湧水のある洞」ということになる。

全国地図には、中・大字として、フカボラ地名は一カ所ある。

【井口】

イクチ。

この小字も鮠ヶ沢川に沿っており、フカボラ小字の上流側にある。

イクチ（井口）といえば、普通は井水の取り入れ口のことをいうのであるが、この場合には、地形からみて当てはまりそうにもない。

下流にイノウエ小字があり、このイ（井）は鮠ヶ沢川のことであったから、イクチのイも同様に考えていいたろう。

では、イクチとは何を意味するのか、二通りの考え方を示しておきたい。

① イクチ←キ（井）・フチ（縁）の転で、「鮠ヶ沢川のほとり」（語源辞典）を意味する。現地にはぴったりの解釈で、イグチではなくイクチになっていることも傍証くらいにはなりそう。② イクはイク（活）で、「水気のある所」を示す（語源辞典）。チは場所を表す接尾語。合わせると、イクチとは、

「水気のある場所」となるが、説得力はやや弱い。

イクチ地名は、全国地図に中・大字として一カ所記載されている。

【黒岩】

クロイワ。

この小字は、鮠ヶ沢川が北側に突き出ている場所の左岸南側にある。

領家帯の花崗岩でできているこの一帯には「黒い岩」は無いはずである。では、クロイワとは何か。

イワには「斜面」の意味もあるので、これを採ることにして、クロは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。① クロ←クリ（剝）の転で、「えぐり取られた残りの部分」（語源辞典）であるという。クロイワとは、「周囲をえぐり取られて飛び出たようになっている斜面」である。

② クロは形容詞クライの語幹から転化したもので、「日陰地」を意味することもあるという（語源辞典）。となると、クロイワとは、「日陰地となっている斜面」と考えられることもできるが、どうであろうか。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字のクロイワ地名は 66 カ所と多い。すべてのクロイワ地名で「黒岩」の字を宛てている。

【樋平】

トヨダイラ。

この小字は、鮠ヶ沢川溪谷の左岸にあり、市道の農免道路竜東南部線のイタチガサワ橋の橋脚付近の急傾斜地となっている。

トヨ＝トイで、解釈は二通りある。語源辞典に依りながらみていきたい。① トヒ（樋）で、水の流れる所をいう。ここでは、鮠ヶ沢川のこと。トヨダイラとは、「鮠ヶ沢川が流れている傾斜

地」をいう。

②トヨはトヨム（響動）の語幹で、水音の響く所をいう。トヨダイラとは、「鼬ヶ沢川の川音が響く所」を意味する。正常な流でも確かに川音は聞こえてくるので、水流の激しい時には、この溪谷に激流が響き渡るのであろう。

全国地図には、トヨダイラ地名は一つも記載されていない。

【川尻】

カワジリ。

この小字は、鼬ヶ沢川中流の左岸にある広い小字である。

カワジリといえば、普通は、川の下流のことをいうが、ここでは当てはまらない。

シリは裾という意味もあるので、カワジリとは、「麓が川になっている傾斜地」のことをいうのだろうか。語順が逆になってしまうので、ひっかかりはあるが、他には考えようがないので、このままにしておきたい。

全国地図には、カワジリ地名の中・大字は、17カ所ある。

【萩畑】

ハギバタ。

この小字も鼬ヶ沢川に接した急傾斜地にあり、カワジリ小字とワゴウザカ小字に挟まれている。

ハギバタも周辺に萩が咲いている畑ではないであろう。この急傾斜地に現在、畑はないが、かつて焼畑が行われていたかどうか、否定はできない。

ハギ（萩）は、動詞ハグ（剥）の連用形が名詞化したもので、崖や崩崖のことをいう（語源辞典）。バタ（畑）はハタ（端）で、縁を表す。ハギバタとは、「崖になっている丘陵地の縁」を意味するものと思われる。このハギノタイラの丘陵地は、今でも果樹園が

多く、その縁は鼬ヶ沢川の深い溪谷となっている。

全国地図には、なぜか、ハギバタ地名は一つも記載されていない。

【和合坂】

ワゴウザカ。

この小字は、「萩ノ平」丘陵地から尾科の集落に入る坂道にあり、広い面積を有する。

ワゴウ（和合）は伊那谷の方言である動詞ワゴムの語幹であるワゴが変化したもので、道路や水路が曲がっている所をいう（長野県方言辞典）。

サカは、傾斜地か峠か。この場合はどちらでも通用する。

ワゴウザカとは、「屈曲の多い道路や河川がある傾斜地」としておく。

ここでの河川は鼬ヶ沢川で、この川が北東に突き出ている所も、ワゴウザカ小字にはあり、語源辞典のいう「水流の曲がっている所で、それに囲まれているところ」によく合致している。

伊那谷方言のワゴムは長野県方言辞典は「歪む」の字を宛てているが、国語大辞典は平仮名のままになっている。

国土地理院の全国地図には、ワゴウザカ地名の記載は無い。

【尾科】

オシナ。

この小字は、高森山東側の斜面で、ワゴウザカ小字の南東隣にある。上の方は急傾斜地になっているが、下の方は住宅や棚田がある。

オシナのオ（尾）については、語源辞典によれば、解釈は二つ。①接頭語で「語調をやわらげる」はたらきがある。②ヲカのヲで、「山の背。山稜」の意である。

シナ（科）は、信濃や駄科のシナと

重なるが、シナ（階）で「段丘」をいう。

オシナとは、①「段丘のある所」で、この段丘とは棚田のことと思われる。②「尾根がいくつか張り出して段丘を形成している所」となる。オシナ小字には、高森山の支脈が三本ほど出てきている。

国土地理院の全国地図にはオシナ地名は一カ所、「ときまた」に地図に載っているだけ。

【高森】

タカモリ。

タカモリ小字は三カ所にある。一つは高森山の周辺、二つ目は高森山の北の方にある細長い洞に、三つ目は鮎ヶ沢川溪谷の傾斜地にある。もともとは、高森山を中心にして周辺の一帯をタカモリと呼んでいたのではないだろうか。

タカモリとは何か。標高 683.7m の高森山の周辺にあるタカモリについて考えたい。

タカは文字通り、高い所をいう。鷹の生息地と考えられないことはないが、ここでは前者を採りたい。

モリは「円錐形の山で神を祀る森」（語源辞典）か。

タカモリとは、「頂上に神を祀るこんもりとした小高い森」としたい。

国土地理院の全国地図には、タカモリの中・大字が 49 カ所も記載されている。一般的な地名といえよう。

【トドメキ・とどめき】

この小字は、平仮名と片仮名で表示された二つがある。ヤマギシズム実蹟地のあるイケノダイラ小字の北東隣に二つが並んでいる。

トドメキは動詞トドメク（轟）の連用形が名詞化したもの。水の音がとど

ろくことをいう。

トドメキとは、「川の音がとどろく所」を意味する。ここでは、白ナギ沢川の支流が合流しており、大きな川ではないが、一緒になるときに川音をとどろかせているのであろう。

国土地理院の全国地図には、一カ所が、中・大字として載っている。

【萩田】

ハギタ。

この小字は、白ナギ沢川の支流が形成した、細長い洞である。この付近には、ハギノタイラやハギバタなど、ハギの付く小字があるが、この付近に萩が多いといっているわけではない。

ハギについては、二通りの解釈が可能である。ハギの解釈によって、ハギタも二通りの意味にある。

①ハギは動詞ハグ（剥）の連用形が名詞化したもので、崖を意味する。タはタ（処）で、場所を表す接尾語。合わせると、ハギタは「崖のある所」となる。

②ハギは焼畑を意味しており（語源辞典）、ハギタとは「焼畑が行われていた所」の意となる。

全国地図には、ハギタ地名は 3 カ所。

【ナメラ岩】

ナメライワ。

この小字は、トドメキ小字の北隣にある小さな小字で、中を白ナギ沢川の支流が流れている。

ナメライワとは何か。ここでも仮説を二つ挙げておきたい。

①ナメラは形容動詞ナメラカのカ（接尾語）が落ちたもの。岩の上を川が流れており、滑らかですべりやすくなっている。ナメライワとは、「滑りやすい岩のある所」の意。基盤岩が顔を出しているところだから、可能性は高い。

②ナメは動詞ナメル(舐)の連用形で、ラはあいまいな接尾語で、「切り落とす」意もあり、崩壊地形を示す。イワには「岩」の他に「斜面」の意味もある。ナメライワとは、「崩れやすい傾斜地」となる。

国土地理院の全国地図には、ナメライワ地名は無い。

【白崩】

シロナギ。

この小字は二カ所にある。一つはハギタ(萩田)の洞の一つ北にある洞で、塩田沢川の支流が開析したもの。もう一つはナメライワ小字のすぐ上流側にある小さな小字である。

ここも領家帯の花崗岩地帯だから、表土が流されると白っぽい岩が顕れる。

シロナギとは、「白っぽい色をした崩崖のある所」でいいのではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、シロナギ地名は無いが、「白崩」地名は中・大字として一カ所に挙げられている。読みはシロナギとなっている。

【ワル洞】

ワルボラ。

この小字はシロナギの洞の一つ北にある洞で、シロナギの洞と同じように、ほとんどが荒地になっていて、現在でも田んぼは無い。

ワルボラとは、良くない洞のことで、「耕作に適さない洞」ということになるか。

全国地図には、ワルボラ地名は載ってはいない。

【免田】

メンダ。

この小字は、「萩ノ平」丘陵の西側斜面になる。今はヒノキが植えられて

いる。

一般には、メンダ＝メンデンで、「領主に対する年貢・課役を免除されている田」ということになるが、ここでは水田は作れないこと、それに現在でも植林によってしか利用できない傾斜地で、年貢を免除されてどんなメリットがあるのだろうか。等々を考えたときに、この説を採り上げることはできないだろう。

では、メンダとは何を意味するのか。語源辞典等を参照にしながら考えてみたい。二説を挙げる。

①メンダ←メノタと転化したもので、メ＝ベ(辺)であるという(語源辞典)。タは接尾語タ(処)である。メノタとは「辺ノ処」である。辺は「萩ノ平」丘陵の縁辺のことをいう。メンダとは、「丘陵地帯の縁辺に当たる傾斜地」ということになる。やや引っ張りすぎか。

②メンダ←メグタと転化したもので、古語の動詞メグの連体形で、「壊す」の意。日葡辞書にもある。メンダとは、「崩壊地のある所」を意味する。

全国地図にはメンダ地名が、中・大字として一カ所記載されている。

【永田】

ナガタ。

この小字も「萩ノ平」丘陵の西側の傾斜地にあり、上流部は現在は荒地になっているが、下流部では水田が作られている。ワルボラ小字の下流側になる。

ナガタとは何か文字通りに解釈すれば、「長い田んぼ」ということになるが、「田んぼがつながっている長い洞」(①)となる。しかし、現在は水田があるのは下流部の一部だから、「長い谷となっている所」(②)とした方がいいのかもしれない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ナガタ地名は108カ所にも記載されている。その中で「永田」の字が宛てられているのは49カ所である。

【中尾】

ナカオ。

この小字はナガタ小字の下流側にある小さな小字で、塩田沢川の左岸になる。

ナカ(中)は、「谷と谷の間」のことで、オ(尾)は「山裾の末端」をいう。合わせると、ナカオとは「谷と谷との間の高みで、尾根の末端部になる所」を意味するものと思われる。

全国地図には148件ものナカオ地名が、中・大字として挙げられている。

【狐塚】

キツネヅカ。

この小字は、ナカオ小字の南側にあり、二本の沢に挟まれた細長い尾根となっている。

キツネヅカも各地にあるが由来ははっきりしていない。キツネヅカとは何を意味しているのか。大別して二説ある。

①普通に考えれば、狐が住んでいたことがある小さな丘であったのか、あるいは近くにお稲荷様を祀っているのか。ということになるが、納得はしにくい。

②以下は、語源辞典による。キツネ←キツレ←クヅレ(崩)と転化したもので、崩壊地形をいう。ツカはツク(漬)に関して「水がしみ出している所」をいう。現地のナカオ小字に近いところでは、細長い丘陵地の裾の部分に崩れた痕跡があり、水がしみ出しているところがある。地籍番号を補正して面積が大きくなっているが、間違いなくキ

ツネヅカと思われる部分は、このナカオ小字に近いところである。

国土地理院の全国地図には、キツネヅカ地名は14カ所、キツネヅカ地名は1カ所が、中・大字として記載されている。

【堤入・ツツミイリ】

ツツミイリ。

「堤入」小字と「ツツミ入」小字とは繋がっており、「萩ノ平」丘陵の北東側斜面の洞である。

もう少し上流部の尾根には、ツツミ小字があるが、ツツミイリとは関係がないと思われる。

ツツミ(堤)は、溜め池のこと。この付近は階段状のヒノキ植林地になっており、かては棚田になっていたと思われる。水田耕作には溜め池が必要で、何か所かに湧水を暖めるための堤が作られていたのではないだろうか。

イリは「山と山との間の沢」(国語辞典)のこと。

ツツミイリとは、「山と山との間の沢筋に設けられた溜め池」を意味するものと思われる。

【梅ノ木】

ウメノキ。

この小字の北側は、塩田沢川が削った断崖になっており、南は定継寺等のある中段の段丘になっている。

ウメノキとは何か。二説を挙げておきたい。

①地名発生当時、ここには近隣に名の通った梅の木があったかもしれない。それで、ウメノキ小字となった、というのは安易にすぎるか。しかし、可能性はある。

②かつて激しい雨が降った時に、ウメノキ小字の南東側にある小さな谷が崩れて土砂が流れたことがあったか

もしれない。ウメは動詞ウム（埋）で連用形が名詞化したもので、「土砂が堆積した所」をいう。ノキは伊那谷や水窪の方言で、「家の裏手の土地」のこと。ウメノキとは、「家の裏手で土砂の堆積した所」とする。

全国地図には、ウメノキ地名は中・大字として 41 ヲ所に記載されている。これだけ多いとなると、①の一般の解釈が正しいのかもしれない。

【穴平】

アナダイラ。

この小字は白ナギ沢川と塩田沢川間の丘陵地にある。

アナダイラとは何を意味しているのか。意外と難しい地名である。

アナ←ハナ（端）の転で、「畑の周囲の斜面」を表すという（語源辞典）。となると、アナダイラとは、「山の中腹から麓のあたりで畑の周辺が斜面になっている所」か。

白ナギ沢川が削り取った谷は深く、アナダイラ小字の南西側は急傾斜地になっていて、中心部の丘陵地は緩傾斜地で大部分が果樹園になっている。

国土地理院の 25,000 分の 1 の全国地図には、中・大字として 2 ヲ所が載っている。

【女夫岩】

メオトイワ。ニヨトイワあるいはニヨトイワと読ませるデータもある。

この小字は福岡・保寿寺丘陵の北端の傾斜地にある。一部の墓地と果樹園がある。

メオトといえば、石とか岩や樹木などが並んでいる状態を想像する。しかし、そうしたものは、この付近にはないようだ。

では、メオトイワあるいは範囲を広げて、ニュトイワとかニヨトイワとか

は何を意味しているのでしょうか。怪しげではあるが、語源辞典に添って、仮説を二つ。

①ニュ←ニュウ←ニブ（鈍）と転化したもので、「湿地」を表す。トは場所を示す接尾語、イワは「斜面。崖」の意味もある。ニュトイワとは、「水がしみ出る傾斜地」を表している。

②ニヨ←ニホ←ミホと転じたもので、ミホはミ（接頭語）・ホ（秀）で、「山が突き出たところ」をいう。イワはここでも「傾斜地」の意としたい。ニヨトイワとは、「尾根が突き出ているような傾斜地」となるか。メオトイワ小字は、福岡・保寿寺丘陵が北に突き出た所にある。

難しい地名であるが、まだこの小字名が残っているとすれば、地元では何と呼んでいるのか確かめる必要がある。

国土地理院の全国地図には、ニヨトイワ地名は無いが、メオトイワ地名は 17 件あり、いずれも「夫婦岩」の字を宛てている。

【北ノ沢】

キタノサワ。

この小字は白ナギ沢川を挟んで、アナダイラ小字の反対側で、福岡・保寿寺丘陵の北東側斜面にある。

キタには、「谷に沿った高い台地」という意味もあるが、ここでは採らない。

キタノサワとは、「北の方にある沢」を意味する。白ナギ沢川が削った谷である。どこから見て北なのか。それは福岡・保寿寺丘陵の中心部から見て、北の方にある、ということであろう。

全国地図には、キタノサワ地名が 21 ヲ所と比較的多い。

【ひん田】

ビンダ。ヒンダともいう。

中段の段丘上で、ドウノウエ小字の北隣になる。

これも二通りの解釈ができる。以下は、主に国語大辞典による。

①ピンは静岡の方言で「傷の跡などが滑らかになったもの」の意がある。とすれば、ビンダとは、「かつて崩壊したことのある水田」となる。

②ヒン←ヒビ（肥美）と撥音便化したもので「土地のよく肥えたところ」をいう。ヒンダとは、「土地のよく肥えた水田」を意味する。

国土地理院の全国地図には、ヒンダ地名は一カ所も記載がない。

メオトといえば、石とか岩や樹木などが並んでいる状態を想像する。しかし、そうしたものは、この付近にはないようだ。

では、メオトイワあるいは範囲を広げて、ニウトイワとかニヨトイワとかは何を意味しているのであろうか。怪しげではあるが、語源辞典に添って、仮説を二つ。

①ニュ←ニュー←ニブ（鈍）と転化したもので、「湿地」を表す。トは場所を示す接尾語、イワは「斜面。崖」の意味もある。ニウトイワとは、「水がしみ出る傾斜地」を表している。

②ニヨ←ニホ←ミホと転じたもので、ミホはミ（接頭語）・ホ（秀）で、「山が突き出たところ」をいう。イワはここでも「傾斜地」の意としたい。ニヨトイワとは、「尾根が突き出ているような傾斜地」となるか。メオトイワ小字は、福岡・保寿寺丘陵が北に突き出た所にある。

難しい地名であるが、まだこの小字名が残っているとすれば、地元では何と呼んでいるのか確かめる必要があ

る。

国土地理院の全国地図には、ニヨトイワ地名は無いが、メオトイワ地名は17件あり、いずれも「夫婦岩」の字を宛てている。

【横山・横山下】

ヨコヤマ・ヨコヤマシタ。

これらの小字は、中段の定継寺段丘上の北の方に位置する。ヨコヤマシタ小字はヨコヤマ小字の下の方になる北西側にある。

この場所でヤマとは何を意味するのか迷ったが、ヤマには、長野・静岡の方言で、「田畑」の意がある（方言大辞典）ことを知った。地元にいながら、この方言を知らなかった。残念ながら、こういうことが増えている。ヨコヤマとは、「横に長い田畑」を意味する。ヨコヤマシタとは、ヨコヤマより下側の地をいう。

国土地理院の全国地図には、ヨコヤマ地名は、中・大字として96カ所も記載がある。

【榎田】

エノキダ。

エノキダ小字は、中段の定継寺段丘に二カ所あり、ドウノウエ小字に分断されている。

エノキダは「榎田」とい漢字に添えば、「ニレ科の榎が植えられていた所」ということになるが、ここでは採らない。榎は一里塚とか道祖神の傍に植えられることが多かったとうが、この付近の道路が今田の主要道路となつてはいないので、榎が植えられていた可能性は薄い。

では、エノキダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①エはエ（江）で、井水のこと。ここには、塩田沢川から引いたよこやま井

水が流れている。ノキはヌキ（抜）の転で、「崩れた所」を意味する（語源辞典）。タ（田）は水田よりも場所を示す接尾語と考えたい。つまりエノキダとは、「井水が流れている所で、崩れたことのある土地」とうことになる。②ノキには、長野県南部や静岡の方言で、「家の裏手の土地」とう意味があるという（方言大辞典）。確かに「家のノキ」といえば、「家の近く」のことであった。だったらエノキならば、「江（井水）の近くの土地」のことを表していたこともあったのではないかと推量できるが、どうであろうか。

全国地図には、エノキダ地名が 13 ヲ所、中・大字として採りあげられている。

【平・平ノ上】

ヒラ・ヒラノウエ。

ヒラ小字は二カ所にある。一つはドウノウエ小字の南東側に接しており、もう一つは市立龍江保育園と龍江小学校の中間点にある。ヒラノウエ小字は、一つ目のヒラ小字の南東隣で保寿寺のすぐ下にあり、第一部落集会所の所在地でもある。

ヒラとは、長野・静岡・岐阜などの方言で、「傾斜地。山の斜面」を意味する（方言大辞典）。古事記の黄泉比良坂のヒラである。現地を見ると、ヒラ小字もヒラノウエ小字も、緩い傾斜地になっている。

ヒラノウエとは、「ヒラの上にある傾斜地」ということになる。保寿寺の参道に接している。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてヒラ地名は 44 ヲ所に記載されているが、「平」地名は 172 ヲ所にも及ぶ。タイラ、ダイラなどの呼び名が入るので増えている。

【森下】

モリシタ。

この小字は龍江小学校の敷地の半分ほどと南側の傾斜地にある。しかし小字の面積等は補正してあるので、やや曖昧である。

モリは神社がある所とか神の祀ってある所を示す場合が多い。北の方には、モリノウエ小字があり、これと対応しているように見える。しかし、モリシタ小字はモリノウエ小字よりも標高の高い所にあるのが、気がかりである。天竜川に沿うように考えればモリシタ小字はモリノウエ小字より天竜川の下流側にはあるのだが、この理屈が通るかどうかわからない。

モリシタとは何か。ここでは、「大宮八幡宮の下流側にある土地」としておきたい。念のために別の解釈も。

モリは、「小高い所」で、モリシタは「小高い所の下の方」を意味する。

全国地図には 35 ヲ所にある。

【平畑】

ヒラハタ。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線と県道米川・飯田線の間にある。周辺には、モリノウエ・イッポンギ・ハンバなどの小字がある。

ヒラハタとは何か。解釈を二つ示す。①ヒラは前にも触れたが、長野・静岡・岐阜・愛知の方言で、山の斜面をいう。ハタは畑だから、ヒラハタとは、「傾斜地にある畑」ということになる。②ハタをハ（端）・タ（処）と考えると、「傾斜地の縁」を意味する。段丘と段丘の間の傾斜地がある場合だろうか。

【林ノ越・林腰】

いずれもハヤシノコシ。

二つの小字はくっついており、福岡

丘陵とその下の定継寺丘陵の間にまたがっており、よこやま井水より上の方にある。「林ノ越」小字は二カ所で「林腰」小字を挟んでいる。

緩い傾斜地になっており、現在は果樹園が多い。

ハヤシには傾斜地の意味もあるが、傾きが急である場合が多いようなので、ここでは採らないことにした。

ハヤシは文字通り、「樹木が生えている所」であろう。コシは山麓を意味する。合わせると、ハヤシノコシとは、「樹木が生えているところの麓の部分」としたい。

なお、国土地理院の全国地図には、ハヤシノコシ地名の記載はない。

【新ヤ】

アラヤ。

この小字はドウノウエ小字の南側に接している小さな小字である。

アラヤは狭い小字だから、住居跡に相応しく、「新しい家のある所」と思われる。荒れる湿地などの意味もあるが、ここでは採らない。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字として 127 件ものアラヤ地名が記載されている。

【とおすの木】

トオスノキ。

この小字は定継寺の北東隣の大きな小字とその上の傾斜地の小さな小字の二カ所がある。大きい方のトオスノキには、成田部落集会所がある。

理解の困難な地名。仮説をいくつか挙げる。

①トオスノキを素直に解釈すれば、「茎がウロになっている木の生えている所」となる。額卯木などのウツギ類のことか。しかし額卯木が生えている場所が地名になりうるのであろう

か。疑問である。

②トオ＝タオは動詞タフス（倒）の連用形で、「傾斜地」のこと。ス（砂）は「押し流されて堆積した土砂」をいう（以上は語源辞典）。ノ（助詞）・キ（処）と続く。トオスノキとは、「傾斜地に土石流で堆積した土砂のある土地」となる。結果は納得できるが、そこへ行くまでにやや無理があるか。

③前半は②と同じであるが、ノキを「家の近く」と解釈する。つなげると、トオスノキとは、「住居の近くにある土石流が堆積した傾斜地」となる。これは、ややちぐはぐか。

トオスノキ小字の地形を見ると、浅い谷になっており、下流部で勾配が緩んでいることから、土砂が堆積したこと推量できる。

当然のことながら、この難しい地名は、国土地理院の全国地図には一件の記載もない。

【井下・井ノ上】

イシタ・イノウエ。

これらの小字は、塩田沢川から引くよこやま井水に添って位置している。

鮠ヶ沢川に添ったイノウエ小字については既に触れている。

これらの小字は文字通りで、イシタは「よこやま井水の下側にある土地」をいい、イノウエは「ヨコヤマ井水の上の方にある土地」をいう。

国土地理院の全国地図では、イシタ地名は 2 カ所で「石田」の漢字を宛てているが、イノウエ地名は 56 カ所と多いのはなぜなのか。ウエが瑞祥名だからかどうか。

【門前】

モンゼン。

この小字はヒラノウエ小字とホジュジ小字の間にある。

モンゼンとは、「保寿寺の門の前」を意味する。一般には門前町のことをいうらしいが、ここに商業地区があったのかどうかは、はっきりしていない。

25,000分の1の全国地図には、中・大字として、105カ所も記載がある。「門前」地名は114カ所と多くなっているが、モンゼなどの呼び名が入っているためである。

【泥ヶ洞】

ドロガホラ。

この小字はトオスノキ小字の上流側にある。モンゼン小字の南隣となる。

ドロガホラという地名であれば、全国には何カ所もありそうだが、国土地理院の全国地図には、一カ所も挙げられていない。非瑞祥名なのか、理由はよくわからない。

ドロガホラとは、「湿地となっている洞」であろう。現在は水田もあり、近くには龍江第一減圧槽がある。

もう一つ、別の解釈もある。ドロ←トロと濁音化したもので、形容詞トロシ（鈍）の語幹。緩傾斜地をいう（語源辞典）。ドロガホラとは、「緩傾斜地となっている洞」となる。納得できる解釈であるが、これだったらゴマンとありそうな気がする。

【福岡・福岡山】

フクオカ・フクオカヤマ。

この二つの小字は南北に並んでおり、ホジュジ小字の北側になる。小さなフクオカ小字の飛び地があり、こちらは、よこやま井水を跨いでいる。

フクオカとは何を意味しているのか。フクにもオカも瑞祥地名となっている。フクは動詞フクル（脹）の語幹で「山裾などの脹らんだ所」をいう（語源辞典）。オカは丘陵である。

フクオカとは、「山裾がふくらんだ

丘陵」を意味する。

フクオカヤマとは、「山裾がふくらんだ丘陵の森林部分」ということか。

全国地図には、中・大字としてフクオカ地名は49カ所も挙げられている。美称地名である故か。

【南畑】

ミナミハタ。

この小字は保寿寺の奥で、フクオカヤマ小字の南隣になる。

ミナミは「南の方」で、これは、保寿寺の南を指していると思われる。ハタが問題であるが、畑ではない。むしろ水田の方が多いからである。大部分は森林。ハタは動詞ハタク（叩）の語幹で崩壊地形をいう（語源辞典）。ミナミハタとは、「保寿寺の南にある崩壊地を抱えた土地」としておく。

国土地理院の全国地図には、ミナミハタ地名は9カ所が記載されている。

【御門畑】

ゴモンハタ。

この小字は、フクオカヤマ小字とミナミハタ小字に挟まれている。保寿寺との間にもミナミハタ小字がある。「池ノ平」丘陵の一つの尾根の上であり、現在はほとんどが森林で一部が桑畑になっている。

ここは、桃井（今田）氏の原ノ城があった城山が近い。

ゴモン（御門）は原ノ城の出入口があった所。

ハタ（畑）は、現在の状況から判断すると、耕作地ではなかったと思われるが、地名発生時には耕作がなされていたかもしれない。ハタについての解釈は二通り。

①動詞ハタク（叩）の語幹で、「叩き落とす」から崩れたところをいう（語源辞典）。

②ハタ（端）は、縁とか周辺をいう。ハシと同一語源である。

従って、ゴモンハタとは、「原ノ城の御門の縁にある土地」を意味するものとする。

なお、全国地図にはゴモンハタ地名は、載っていない。

【保寿寺】

ホジュジ。

保寿寺の現地にある。

元禄三年（1690）の記録によれば、保寿寺は、蒼龍山保寿寺といい、臨済宗妙心寺の末寺となっている。

保寿寺は今田村守護の今田民部太夫定寿が建立したものだが、彼は正応元年（1288）に没している。現在本尊になっている馬頭観音は彼が迎えたという。今田氏が没落して二世紀の後に、竹隠禅師が諸国遍歴の後、この馬頭観音が安置されていた観音堂に草庵を結び、保寿寺の創建開山になったという（以上は村誌から）。

国土地理院の全国地図には、ホジュジ地名が二カ所、中・大字として挙げられている。二カ所とも「保寿寺」の字を宛てている。

【日カゲ林】

ヒカゲバヤシ。

この小字は、ゴモンハタ小字のある尾根の北東側傾斜地にあり、白ナギ沢川に接している。原ノ城のあった城山からのびる尾根の日陰になる部分に位置する。

ヒカゲバヤシとは、文字通りで「日の当たらない林地」であろう。

どこにでもありそうな地名であるが、国土地理院の全国地図には、一カ所の記載があるだけ。非瑞祥地名であるためであろうか。

【御殿田】

ゴテンダ。

この小字は、「池ノ平」丘陵縁辺にあり、ゴモンバタ小字の上流側の北東向き傾斜地にある。斜面はほとんどが林地で、一部に棚田の痕跡を見ることができる。

ゴテンは、原ノ城に関係する建造物のことと思われる。

語源辞典によれば、ゴテンには、台地の意味がある。ゴテンダ小字は大部分が傾斜地であるが、一部、台地の上の平坦部も含んでいる。

タは水田の可能性もないわけではないが、ここでは、接尾語のタ（処）としておきたい。

ゴテンダとは、「城関係の建物があつた、台地の平坦地のある所」を意味するものと思われる。

全国地図には一件の記載もない。

【鳥ノ巣】

トリノス。

この小字はヤマギシズム実頭地の東方にあり、小さな峰を持つ。

トリノスとは、素直に解釈すれば、「鳥の巣があるところ」となるが、これがどうして小字地名になっているのか、わかりにくい。そこで語源辞典によって仮説を二つ挙げる。

①トリ←トロの転で、形容詞トロシ（鈍）の語幹。緩傾斜地を意味する。ス（砂）は砂地のことをいう。合わせると、トリノスとは「緩い傾斜地になっている砂地の土地」となる。

②トリ←タオリの転で、たわんだ地形を意味する。ス←セ（背）で小高い所をいう。以上から、トリノスとは、「小高い峰や埜のある所」となる。

あるいは、①②の組み合わせを代える解釈も可能性はある。

国土地理院の全国地図には、意外に

も、トリノス地名は記載されていない。「鳥の巣」説に荷担しない理由でもある。

【フクベタ】

この小字はタカモリ小字のある洞の南側にある大きな地籍で、小さな洞が二つある。

フクベは瓢箪のことだから、フクベタとは、形が瓢箪に似ておれば、解釈も簡単であるが、この小字では瓢箪にはなりそうにもない。

では、フクベタは何を意味しているのだろうか。

フク←フケと転じたもので、フケには湿地や沼地の意味がある(岩波古語辞典)。ベタは山梨や長野の方言で泥土をいう。この地域でいうベト(泥)はもともとベタが転化したものと思われる。

フクベタとは、「湿地帯で泥土のある所」を意味する。フクベタにある洞の上流側は棚状の荒地になっており下流側は水田になっている。もともと湧水を利用した水田で、地名発生時にもこの田んぼは存在していたのではないだろうか。

なお、全国地図にはフクベタ地名は載っていない。

【鳳ノ木】

ハウノキ。

この小字はタカモリ小字の南北隣に三カ所ある。「萩ノ平」丘陵から鼬ヶ沢川の深い溪谷に下る付近である。

ハウノキも植物の朴木ではあるまい。地名にはなりにくいと思われるからである。

では、ハウノキとは何を表しているのか。語源辞典に依りながら見ていきたい。二通りの解釈が考えられる。

①ハウ←ホ(秀)で、突き出たものを

いう。ノ(助詞)・キ(処)と続く。ハウノキとは、「峰のある所」となる。ハウノキ小字三カ所とも峰をもっている。ハウノキ小字はタカモリ小字と混じり合っている。

②ハウ←ハフで、川岸の崖や急傾斜地を意味する。ノキ←ヌキ(抜)で、崩壊地をいう。ハウノキとは、「崩壊地のある急傾斜地」である。この付近は、鼬ヶ沢川溪谷となっているので、どこをとっても急傾斜地の無い所はない。ということは、この解釈では一般的にすぎるか。

国土地理院の25,000分の1地図には、ハウノキ小字が7カ所に中・大字として記載されている。意外に多い数字で、これだと朴木説もあり得るかもしれない。

【のりくら・乗鞍田】

ノリクラ・ノリクラダ。

この小字は「萩ノ平」丘陵から尾科に向かう付近にある。周辺には、フクベタ、トリノス、シラカバなどの小字があり、二つの小字は東西に長く重なっている。

ノリクラとは何か。これも語源辞典によりながら見ていく。

①ノリクラといえば、素直に解釈すれば、「馬の鞍のような形の土地」である。ノリクラ小字には、こうした地形は複数あるが、ノリクラダ小字には見当たらない。ノリクラダとは、「ノリクラ小字に近い所(または田んぼ)」ということになる。

②ノリ←ネリはネル(練)の連用形で湿地のこと。クラ←クル(割)の連用形で、崩れた崖をいう。ノリクラとは、「崩れた崖のある湿地」となる。ノリクラの洞には水田もあり、ノリクラダ小字には溜め池もある。

不思議なことに、全国地図には、ノリクラダ地名はもちろん、ノリクラ地名も記載されていない。

【桜ノ木】

サクラノキ。

この小字はヤマギシズム実蹟地の東隣にあり、トリノス・ノリクラダ・イケノダイラ小字に囲まれている。

サクラノキとは何を意味するのか。いくつか解釈を挙げる。

①文字通り、有名な桜があつて、この小字が生まれたということも考えられないではないが、どうであろうか。この小字が小さいことは、この説には有利か。

②サクはサク（削）の連用形で、崩壊地をいう。ラは「事物をおおよそに示す接尾語」（国語大辞典）。ノ（格助詞）・キ（処を示す接尾語）。合わせてサクラノキとは、「崩壊地のある所」を意味する。

国土地理院の全国地図には、中・大字として3カ所が載っている。

【池ノ平】

イケノダイラ。

この小字は「萩ノ平」丘陵の一つ下の丘陵で、土地の人達は二つのタイラ丘陵を対にして意識しているようだ、他の小字名は忘れられても、この二つの小字は、人々の意識の中に今でも残っている。

広大な小字で、現在は水田地帯になっている、御庵沢川が開析した谷も含んでいる。

イケ（池）は、「自然の土地のくぼみに水のたまった所」（広辞苑）をいう。イケノダイラには、こうした池がいくつもあつたのではないだろうか。現在は一つだけ、池が残っているが、地名発生当時は、複数の池があつたと

思われる。

イケノダイラとは、「複数の池のある山地の平らな所」を意味する。

国土地理院の全国地図には、イケノダイラ地名は、中・大字として6カ所が挙げられている。

【城山・城ノコシ】

ジョウヤマ・ジョウノコシ。

これらの小字は、「池ノ平」丘陵の北西側に伸びた尾根の先端にある。

ジョウヤマは桃井（今田）氏の城があつた所で、この城は知久神之峰城の出城であつた。

コシ（腰）は山麓のことで、ジョウノコシとは、「城山の麓」をいう。これらは、伊那谷南部は普通に存在する小字である。

【中ノ洞】

ナカノホラ。

この小字は龍江配水池があるところで、ミナミハタ小字の南隣にあつて、南隣のホリジリ小字との間に挟まれている。

ナカ（中）は何を意味しているのか、漠然としていて分かりにくい。保寿寺と「小金ノ佛」の中間地ともとれるが、少し離れすぎているので、難しいかもしれない。二本の尾根の間にはあるが、地名化するには、一般的にすぎる。

ナカには、語源辞典によれば、神社の境内を意味することもあるので、これに従って次のように解釈するのはどうだろうか。

ナカノホラの100m余の下流域に、春日神社の境内がある。その中をナカノホラに続く谷が通っている。ナカノホラとは、「春日神社の境内を通る洞」をいう。やや離れているのが気になるが、どうであろうか。かつての春日神社はもっと広い境内であつたかもし

れない、という期待がある。

国土地理院の全国地図には、ナカノホラ地名は記載されていない。

【又木田】

マタキダ。

この小字は、ナカノホラ小字と春日神社のあるダイミョウジン小字の間にある。ナカノホラ小字の下流に当たる。

マタ（又）は、二つの沢が合流している所をいう。ここでは、ミナミハタ小字の沢と南の方のホリジリ小字の沢が合流している。

キダはキダハシ（階）のことで、棚状になっていることをいう。

以上から、マタキダとは、「沢が合流していて、階段状になっている土地」を意味する。

全国地図には、マタキダ地名は一つも載っていない。

【春日・大明神】

カスガ・ダイミョウジン。

これらの小字は、春日神社の周辺にある。いずれも、春日神社のことをいう。大明神も春日大明神のこと。

村誌によれば、祭神は鹿島神社の主祭神である建御賀豆智命、天之子八根命、伊波比主命、比売命の4柱。知久神之峰城の出城であった原ノ城の城主、桃井（今田）氏の氏神である。

奈良の春日神社から勧請したと思われるが、奈良春日神社の祭神は、武甕槌命、経津主命、天児屋根命の4柱で春日四所明神といわれている。今田の春日神社には、この四所明神がそのまま勧請されている。名前が違っているようにみえるが、同じ神々である。

国土地理院の全国地図には、カスガ地名は57カ所、ダイミョウジン地名は16カ所が、中・大字として記載さ

れている。

【カニ沢】

カニザワ。

この小字はカスガ小字とダイミョウジン小字の間から出て、ジョウケイジ・テラノウエ小字に達する沢筋にある。

カニの解釈に二通りある。語源辞典によってみていきたい。

①カニ←カナ（掻き難ぐ）で崩壊浸食地形をいう。カニサワとは、「崩壊浸食崖のある沢」となる。

②カニ←カミ（神）と、イ音便転化。カニサワとは「神社の境内を通る沢」を意味する。

全国地図にはカニサワが25カ所。

【カゾ田】

カゾダ。

この小字はカニザワ小字の下流側で、かに沢川左岸にある。中を県道米川・飯田線が通っている。

カゾタとは何か。

カゾ←カハ（川）・ス（州）の転で、「川砂のある所」、あるいは、カゾ←カズ（被）と転化したもので、「川砂などに覆われた所」。いずれも同じ状態を表しているものと思われる。ダ（田）はタ（処）で、場所を示す接尾語であろう。

カゾタとは、「川砂に覆われた土地」を意味する。かつて土石流が押し出した場所ではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、なぜか、カゾダ地名もカソダ地名も記載はない。

【古瀬・小瀬畑】

コセ・コセハタ。

コセ小字は県道米川・飯田線にほぼ沿っている長い小字。コセハタ小字は、県道米川・飯田線の端の傾斜地にある。

現在は墓地と桑園になっている。

コセ（小瀬）は、山陰の道のことであるが、長野県の一部で使われているという「一方が山側になった道のある土地」（国語大辞典）が、ここ伊那谷南部ではぴったりしているのではないだろうか。

ハタ（畑）は畑のほかに縁の意もあり、どちらとも言い切れない。

コセハタとは、「一方が山側になっている道のある畑」あるいは、「一方が山側になっている道の端」であろう。

国土地理院の全国地図には、コセ地名は、中・大字として 17 カ所に載っているが、コセハタ地名は無い。

【新地】

シンチ。

この小字は、カニサワ小字の南隣にあり、南東側はダイミョウジン小字に接している。

シンチとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①シンチ（新地）とは、「新たに居住地として開かれた土地」（国語大辞典）をいう。春日神社の近くにあるから、地名誕生時には、既にこの地域は開墾されていたはずである。だから、居住地としては、新しかったと思われる。
②シンチ（新地）←シンチ（神地）と変わったもので、シンチとは「神の鎮座する土地」とする。春日神社のあるダイミョウジン小字の北西隣にあるから、シンチ小字も神域であった可能性がある。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字として、シンチ地名が 63 件も記載されている。

【丸山】

マルヤマ。

丸山の湯がある所もマルヤマ小字

になっているが、今田には他に二カ所マルヤマ小字があり、尾林にも一カ所ある。

マルヤマ地名は多い。全国地図には中・大字しか記載されていないが、なんと 352 カ所が挙げられている。想像を遙かに超える数字である。

マルヤマとは「形の丸く見える山」（国語大辞典）である。

ダイミョウジン小字の南隣にあるマルヤマ小字はかに沢川が丸く削っており、宮の原集会場の北にあるマルヤマ小字は清水沢川に丸く出ており尾林のマルヤマは、中腹より高い所に丸みがある。

【平岩】

ヒライワ。

この小字は「池ノ平」丘陵の西側斜面でダイミョウジンバラ小字の上流側にある。

ヒライワとは何か。

この小字の中に、「表面が平らで、板のような岩」があれば問題はないが、どうだろうか。

他の解釈は難しい。諏訪、静岡、岐阜の方言で、ヒラ（平）には「山の中腹」を表すことがある（方言大辞典）。イワ（岩）には「斜面」の意味もある（語源辞典）。合わせると、ヒライワとは「山の中腹にある斜面」を意味する。現場には合っているが、少し無理があるかもしれない。

全国地図には、中・大字として、22 件の記載がある。

【堀尻】

ホリジリ。

この小字は、「池ノ平」丘陵の西側斜面にあつて、ジョウヤマ小字やジョウノコシ小字と接している。

ホリジリとは、「原ノ城の堀の末端

部のある場所」を意味する。

【笹ヶ窪】

ササガクボ。

この小字は、北にはヒライワ小字が、南にはコガネノホトケ小字が、西にはフタゴイリ小字が、それぞれ接する。

これも難しい地名であるが、ササガクボとは何を表しているのか。語源辞典によってみていきたい。

①ササはイネ科タケ属の植物をいう。ササガクボとは、「笹が生えている窪地のある場所」となる。明らかな窪地はなくても、谷を窪と表現する場合もある。しかし、ここには茶は多いが笹はわずかしかない。

②ササはササ（細）で、「砂地」をいう。風化した花崗岩のあるところだから、「砂地の窪地がある所」となる。

③可能性は薄いですが、ササは動詞ササフ（障）の語幹で、妨げる意があるので、ササガクボとは、「通行困難な場所」のこと、という解釈もありうる。

全国地図には、ササガクボ地名は記載されていない。

【小金ノ佛】

コガネノホトケ。

この小字は「池ノ平」丘陵の西側斜面にあり、ササガクボ、コガネ、キンジガハラ等の小字に囲まれている。

村誌によれば、ここには仏様が岩に彫られており現在も実在している、という。そして次のような古老の話も紹介している。「むかし小金仏は立派な仏像で大切にまつられていたが、あるとき、大洪水があつて山ぬけとともに仏様は流され、対岸の開善寺に安置されるようになった」と。

ここには磨崖仏があるというが、まだ確認はしていない。コガネというのだから、少なくとも彩色があつたので

はないだろうか。あるいは、南隣にあるコガネ小字と対応してコガネを頭に付けたのかもしれない。この地は修験道の場であつた可能性もある。

【日向】

ヒナタ。

すでに塩田沢川沿岸のヒナタ小字に触れているが、他に三カ所ある。御庵沢川右岸と、大宮八幡宮の西側の天竜川氾濫原には二カ所、シマバタやカワラバタ、シマなどの小字に混じっている。

いずれも日当たりのいい所で、文字通りに解釈しておきたい。

【二子・二子入】

フタゴ・フタゴイリ。

これらの小字は御庵沢川の上～中流にある。フタゴ小字は、現在、住居と水田が中心。フタゴイリ小字は上流にあつて、ほとんどが急傾斜地となっている。

フタゴとは何か。一般には、二つのものが並んで存在している状態をいうが、ここでは当てはまらない。

フタは副詞フタフタから転化したもの。フタフタはポタポタと同じで「血などの続けてしたたり落ちるさまを表す語」（国語大辞典）という。ここでは、湧水があることを示しているものと思われる。ゴ（子）はゴ（処）で接尾語。合わせると、フタゴとは「水がしみでる所」を意味する。

フタゴイリは、「フタゴ小字から上流に入った所」をいう。

国土地理院の全国地図には、フタゴ地名は、中・大字として、27カ所が記録されている。フタゴイリ地名は記録がない。

【沢】

サワ。

この小字は御庵沢川の右岸の緩傾斜地に二カ所ある。

既に塩田沢川のサワ小字で触れているように、サワとは「山間の比較的小さな溪谷」をいう。御庵沢川上流のサワ小字は、この解釈の通りと思われるが、御庵沢川下流の小さなサワ小字には、当てはまりそうにもない。

小さな小字のサワは、①「清水が出ている所」あるいは、②「御庵沢川の川音が聞こえる所」とした方がいいようだ。サワ（騒）で水流を擬音化した語だという（語源辞典）。

【流田（今田）】

ナガレダ。

この小字は、県道米川・飯田線の南東側の傾斜地にある。御庵沢川がすぐ近くを流れる。

ナガレダとは、「土石流の流れた跡」を意味するものと思われる。ダは「処」か「水田」か、判断がつきかねるが、現在でも水田は一部にしかないので「処」に分があるか。

御庵沢川の流路も慣性をもった土石流が真っ直ぐに流れ下る方向に、この小字が位置している。

国土地理院の全国地図にも、10カ所、ナガレダ地名が中・大字として記載されている。

【倉田】

クラタ。

この小字は、県道米川・飯田線の西側にあり、ナガレダ・ナカソネ・フクジンの三つの小字に囲まれている。

クラタとは何か。簡単なようであるが、分かりにくい。クラはクル（剝）の連用形とみて崩壊地や傾斜地を意味することが多いが、ここでは該当しない。そこで、次の二つの解釈を挙げたい。

①クラはクラ（座）で、クラタとは、「社寺があったか、貴人が住んでいた御座所のこと」をいう。タ（処）で場所を表す接尾語。フクジン小字が隣にあることも傍証にはなる。

②この付近は、小字も混み合っていて、今田の中心地の一つと思われるので、年貢米を一時預かったり、救援米などの「米を貯えるクラ（倉）があった所」とみるのはどうであろうか。

なお、国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として14カ所にクラタ地名が載っている。

【福神】

フクジン。

この小字は、県道米川・飯田線に沿った西側の下がり傾斜地にある。御庵沢川の右岸にぴったりと沿っており、ナカソネ・クラタ・ナガレダ等の小字に囲まれている。

フクジンとは七福神のこと。江戸時代になってから、社寺に祀られることが多くなったという。七福神が、えびす・大黒天・毘沙門天・大弁財天・布袋和尚・寿老人・福録寿にかたまったのは江戸時代後期で、前期には狸々・南極老人・吉祥天女なども加わっていたらしい。年頭に初詣を兼ね七福神をまつる社寺を巡拝したという（以上は民俗大辞典）。

このフクジン小字には、かつて福神が祀られていた御堂があったと考えるが、どうであろうか。少し東の方にあるゴアン（御庵）小字にも関係しているのかもしれない。

しかし、全国地図には、フクジン地名は一つも記載されていない。

【中曾祢】

ナカソネ。

県道米川・飯田線と地方道飯田・富

山・佐久間線の中ほどの緩傾斜地にある。

この小字は伊那谷南部では各地にあり、全国的にも中・大字として 12 件が挙げられている。

三穂のナカゾネについては、「伊豆木の中心地にある、石が多く地味のやせた土地」としているが、今田のナカゾネはどうか。

ナカ（中）は、やはり中心地を意味している。今田のソネは「やや高い所」をいう。南東からは低く見えるが、他の三方からは高く見えるから、この解釈は地形に合っている。

ナカソネ（中曾祢）とは、「今田の中心地の一つにある、やや高い所」を意味するものと思われる。

【垣外】

カイト。

この小字は三カ所にある。今田に一カ所、尾林に二カ所。

今田はナカソネ小字の西隣にあり、尾林は尾林中集会所の西と尾林上集会所の西にある。

今田と尾林中のカイトは、現在でも住居があり、「人が住んでいた所」とすることができる。しかし、尾林中のカイトは傾斜地になっており、語源辞典がいうように、「崖地のある所」としておきたい。カイト←カキ（欠）・ト（処）で、「崩壊地」をいう。ここは、現在も耕作されてはいない。

【御庵・五ワン畑】

ゴアン・ゴワンハタ。

ゴアン小字は、御庵沢川右岸にあり、カイト小字の北隣にあり、御庵部落集会所がある。ゴワンハタ小字は三カ所に分散していて、ほぼ天竜川の氾濫原にある。

ゴアンはかつて庵があったところ

で、庵とは「僧の閑居する小家」か「大寺に付属する小僧坊」（いずれも広辞苑）。ここでは、定継寺の僧坊と考えるのが妥当と思われる。ゴアンとは、「小さな僧坊のあった所」となる。

ゴワンハタ←ゴアンハタと転化したもので、免租地であったかどうかは不明であるが、「定継寺の僧坊の経費を支える畑」だったのではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、ゴアン地名は、中・大字の中に二カ所ある。

【牧ノ坪】

マキノツボ。

この小字は、かに沢川の左岸にあって、カゾダ小字の下流側にある緩傾斜地となっている。

マキ（牧）は、動詞マク（巻）の連用形で名詞化したもので、「河流、山脚などの巻いた所」（語源辞典）をいう。この場合は、かに沢川と丘の麓が半円形に取り巻いていることをいうのであろう。

ツボ（坪）は、古代条里制の名残の面積をいうか。一坪は、ほぼ一町歩で 100m 平方とみる。

マキノツボとは、「丘の麓が、かに沢川などによってほぼ半円形になっている土地」と考える。

なお、全国地図には、マキノツボ地名は一つも載っていない。

【茶堂】

チャドウ。

この小字は二カ所にある。一つは、かに沢川右岸の定継寺の隣に、もう一つは御庵沢川下流域の左岸にあり、〇〇カイトという小字に囲まれている。周辺には、細かな小字がたくさんあって、今田の中心地の一つと考えている場所である。

茶堂は、「茶の湯を行う場所」（国語大辞典）であるが、地名発生当時、茶の湯に関係するのは、有力者とか僧侶など、限られた人たちであった。そうした人々の住居も近くにあったと思われる。

全国地図には、中・大字として、チャドウ地名が5件挙げられている。

【定継寺・寺ノ上・寺ノ西】

ジョウケイジ・テラノウエ・テラノニシ。

これらの小字は定継寺小字群としてもいい。いずれも定継寺を中心として、どこに位置するかを示している小字である。ただ、テラノウエ小字は、定継寺より少し高い所にあるが、現在の小字図からは、必ずしもウエとはいがたい場所にある。地名発生時とはこれらの小字の位置がずれているのかもしれない。

全国地図にはジョウケイジは0、テラノニシ地名は1件、テラノウエ地名は5件が、中・大字として記載されている。

【タノヤ】

この小字は、定継寺の下側に接している。

タノヤが何を意味しているのか、タ→テ（手）かと思ったが後が続かない。とにかく分かりにくい。そこで考え方を三つ。

①タノヤ←タモヤ←タマヤと転じたとする。タマ（御霊）・ヤ（屋）で、タノヤとは、「崇る御霊を鎮める場所」とする。

②タノヤ←タヤと格助詞ノを挿入した変化ではなかったか。タヤはタヤ（他屋）で、「婦人が月経または出産の時にこもる小屋」（国語大辞典）があったのかもしれない。

③タヤはタヤ（田家）が転化したもの。語源辞典はタヤ（田家）には政所を意味することもあるという。この政所にも二つの意味がある。一つは「大きな寺院で、所管の事務全般を取り扱う所」で、ここでは定継寺の事務取扱所ということになる。もう一つは「領地内の事務を現地で取り扱った所」の意。

国土地理院の全国地図には、タノヤ地名は一件が記載されている。

【四反田】

シタンダ。

この小字は、かに浜川右岸にある。

「〇〇反田」は地名発生当時のその小字の面積を表しており、開墾に伴う地名に多いという（語源辞典）。

シタンダとは、「四反歩の面積の水田があった所」となる。現在でも田んぼがほとんどで、面積は四反をはるかに越えている。

国土地理院の全国地図には、シタンダ地名が、中・大字として、六カ所にある。シ（四）は忌むべき数字ではなかったのだろうか。

【中田】

ナカク。

この小字は、ジョウノマエ小字とシタンダ小字に挟まれている、細長い小字である。傾斜地で、現在は畑になっている。

今田氏の居館であったといわれているジョウ小字と定継寺の中間点にあるので、ナカタ小字は重要な土地であったと思われる。

ナカタとは、ナカ（中）・タ（処）で、「今田の中心的な場所」を意味するものと思われる。

ナカタ小字は、この地方のどこにもあるが、全国的にも多く、国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、35カ所のナカタ地名が記載されている。

【琵琶田】

ビワダ。

この小字は県道米川・飯田線の西側にあり、テラノシタ小字とシタンダ小字に挟まれている。

ビワダといえば、一般には、琵琶の形をした田んぼ、ということになるが、この小字、形は整ってはいないが、琵琶に見立てることは難しい。

現在、ビワダは住宅地となっているが、地名発生時にはどうであったのか。水田であった可能性は否定できない。

ビワダとは何か。語源辞典を参考にしながら二説挙げる。

①ビ←ヒ（樋。水路）で、ワ←ハ（端）で縁辺の意。ダ（田）←タ（処）と転化。ビワダとは、「縁辺に水路がある所」となる。

②ビワ←ミワ＝ミノワ（水之廻）と転化した結果、川などが曲がっている状態をいう。ビワダとは、「川が弧を描くように曲がっている土地」か。

国土地理院の全国地図には、ビワダ地名は二カ所に、中・大字として挙げられている。

【丸垣外】

マルガイト。

この小字は、県道米川・飯田線に沿っており、東照寺の南隣に位置する。

マルガイトとは、「土地の形が丸みを帯びた住居跡」か。

国土地理院の全国地図にも、一カ所のマルガイト地名が、中・大字として挙げられている。

【東照寺】

トウショウジ。

この小字は、今田の中段丘にある。

東照寺は、永享二年（1430）に陽徳道休の開基で、10年後の永享十二年（1440）に妙心寺四世日峯宗舜大和尚の開山。本尊は薬師如来という。

領主であった井上淡路守と繋がりがあったようであるが、その期間は、元和五年（1619）から明暦三年（1647）までの、わずか38年間であったという（村誌）。

全国地図には3件の記載がおる。

【寺ノ下】

テラノシタ。

この小字は、県道米川・飯田線を挟んで、東照寺の反対側にある。

テラノシタとは、「東照寺の下側にある土地」をいう。テラは定継寺ではあるまい。

全国地図には、テラノシタ地名は、中・大字として、19カ所にある。

【堀田】

ホッタ。

この小字は、テラノシタ小字とジョウウ小字に挟まれている。

ホッタとは、一般的には新開地のことをいう。しかし、この今田のホッタはジョウ（城）小字と接しているので、「かつて館の堀であった水田」の意と思われる。

国土地理院の25,000分の1地図には、ホッタ地名が中・大字として、18カ所に載っている。「堀田」地名だと27カ所にも及ぶ。ホリタ・ホッタなどの呼び方が加わるためである。

【光林】

コウリン。この小字は、シマバタ小字に接し、天竜川にも近い。キタヤマ・ホッタ小字の北側になる。小さな小字である。

本当にコウリンという小字であったのかどうか。コウリンで浮かび上がってくるような地名は見当もつかない。「降臨する場」にはならないし、尾形光琳との関係もないであろう。

コウバヤシであれば、いくつか候補が出てくる。

①コウ（光）←カミ（神）で、コウバヤシとは、「神を祀った林」か。現在は船渡自治公館にある石碑のいくつか、コウバヤシにあったのではないかと、とも考えられる。

②コウ←カハ（川）で、コウバヤシとは、「天竜川に近い所にある林」であったか。

ただ、全国地図に1カ所、コウリン地名があった、「光林」の字を宛てているのが気になる。

【北山】

キタヤマ。

この小字も、シマバタ小字に接しており、コウバヤシ小字とジョウ小字に挟まれている。

この天竜川の河原で、キタヤマとは何を意味しているのだろうか。二説を挙げる。

①キタ（北）は、今田氏の居館であったジョウ小字の北側を意味する。ヤマ（山）には、「森。林」の意味もあるので、「神聖は土地」でもある（方言辞典）。とすると、「居館の北側にある、神などを祀る神聖な土地」ということになる。

②これも方言大辞典によるが、ヤマとは「田畑」のこと。キタヤマとは、「居館の北側にある田畑」となるが、どうもピンとはこない解釈である。

全国地図にはキタヤマ地名は多く、119カ所にもなる。いずれも中・大字である。これだけ多いと、②の可能性も否定できない。

【城・城ノ前・新城】

ジョウ・ジョウノウエ・シンジョウ。

これらの小字もマエバタ小字と接しており、天竜川端にある。いずれも、今田氏の居館といわれている。

今田氏の居館は、初めは船渡地籍にあるジョウ（城）であった。竜西の小笠原氏に対するには、防備上重要な場所であったらしい（村誌）。

シンジョウは「下の方にある城」。

【提灯田】

チョウチンダ。

この小字は、マキノツボ小字とシモツボ小字に挟まれている。

チョウチンダとは何か。これも難しい。チョウ・チン・ダと分解してみても、この地に合うような解釈は生まれてこない。もちろん、見落としもあるかもしれないが、こっちはあきらめることにした。

チョウチンダとは、小字の形を提灯に見立てたものではないか、と思うようになっている。提灯の襟が立って、腰もついているように見えないこともない。

全国地図にはチョウチンダ地名は一つもない。

【島畑】

シマバタ。

この小字は、天竜川に沿って細長く伸びた、最も天竜川に近い小字である。

シマ（島）には、「川に臨んでいる州」（国語大辞典）の意がある。ス（州）は「土や砂が堆積して水面上に現れた所」（国語大辞典）である。現在は盛土されているので、天竜川左岸になっているが、地名発生時には、上記のような状況になっていたと思われる。

シマバタとは、「土砂が堆積して州となっている所にある畑」ということになる。

全国地図には、シマバタ地名は、なぜか一件の記載もない。

【橋爪】

ハシヅメ。

この小字は下流部の御庵沢川左岸にある。

ハシヅメ（橋爪）とは、橋のたもとで、「橋が架かっていた所」を意味する。天竜川に架かる橋ではなくて、御庵沢川に架けられた橋のことである。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、ハシヅメ地名が 33 件もある。

【銭氏】

ゼニウジ。

この小字は 2 ヲ所にある。いずれも天竜川に近いところにある。

これも解釈の難しい小字である。全国的にも珍しい地名らしく、国土地理院の全国地図には、一つも載っていない。

ゼニ（銭）は、小字の形を銭に見立てたもの。二つとも正方形に近い形をしており、地名発生時には円形に近かったのではないだろうか。ウジ（氏）は、オチ（落）の転化したもの（語源辞典）で、支流が天竜川に段差があって、水流が落ちるようになっていたのではないだろうか。一つの小字は、御庵沢川に沿っており、もう一つの小字は、現在は水流がないが、道路が曲がっていることから、かつては水流があったと思われる。

ゼニウジとは、「銭形をした土地で、水流が天竜川に落ち込むようになっている所」となる。

他に解釈もあるかもしれない、と思いつくところまで進んでいない。

【阿高】

アダカ。

地方道飯田・富山・佐久間線の両側に広がる小字である。

駄科にもアダカ小字があり、ア（阿）を接頭語と考え、アダカとは「平地の中の微高地」（語源辞典）とした。今田のアダカも全く同じようにみることができる。

全国地図にアダカ地名は 5 件ある。

【中ヤ】

ナカヤ。

この小字は、飯田・富山・佐久間線の両側に広がるが、西側の天竜川に近い部分の方が広い。

現在は果樹園が多く、一部に水田や桑園がある。

ナカヤとは、「ある時期、今田の中心的な存在であった集落」を意味するか。北には御庵沢川があるが、ハシヅメの橋を渡れば、カイト・ゴアン・ナカソネなどの小字が集まっている。

この地域にもナカヤ小字は旧村に一カ所ぐらひはあって、かつての中心部にある。全国地図には、ナカヤ地名は 64 ヲ所で中・大字として挙げられている。

【シマ・島】

この小字は、五カ所と多い。いずれも天竜川に近い所にあるが、中には、地方道飯田・富山・佐久間線の東側に食い込んでいる所もある。

いずれも、竜川が右岸の久米川に押し出されて反対側の東に寄った時に、島になっていた所ではないかと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シマ地名は 93 ヲ所が挙げられている。当然のことながら、多い。

【土林】

ツチバヤシ。

この小字は地方道飯田・富山・佐久間線の西側、天竜川の側にある。

北側の天竜川の上流側よりも、わずか数十 cm ほど高い微高地になっており、ツチ（土）とはツキ（築）で高い所をいう（語源辞典）。ツチバヤシとは「周辺より少し高い微高地にある、樹木の生えている所」としておきたい。

他に解釈がありそうな感じもするが、気づかないでいる。

国土地理院の全国地図には、ツチバ

ヤシ地名は1カ所だけ、中・大字として記載されているが、「土林」地名は3カ所ある。ツチハヤシと呼んでいる所が2カ所あるからである。

【坂】

サカ。

地方道飯田・富山・佐久間線の東側となる山側にある。

サカは文字通り「傾斜地」を意味している。それはこの小字が斜面にある、ということよりも、道路が少し登りになっていて、そのことを意味しているのかもしれない。とすると、サカは「やや登りの坂道」となる。

国土地理院の25,000分の1の全国地図には、中・大字として20カ所が記載されている。

【酒ヤ垣外】

サカヤカイト。

この小字は主要地方道と県道の間にあって、チャドウ小字の上流側で、御庵沢川の左岸にある、小さな小字である。

サカヤカイトとは何か。仮説を二つ。
①一般的に考えれば、サカヤカイトとは、「酒屋さんがあった所」となる。酒造りをしていたのか、あるいは酒の流通販売に関わっていたのであろう。
②サカはサカ(坂)で「傾斜して勾配のある所」(語源辞典)。ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」のこと。サカヤカイトとは、「傾斜地で湧水もある居住地であった所」と考えることもできる。

全国地図には、サカヤカイト地名は、中・大字として1件記載されている。宛てられている漢字は「酒屋垣外」。

【小ヤ垣外】

コヤカイト。

この小字は、県道に接しており、御庵沢川に沿っている。サカヤカイト小

字の上流側にある。

コヤカイトとは何か。コヤ(小屋)とは「小さくて粗末な家」であるが、これが地名になることはないと思われる。そこで、二つの解釈を示したい。
①コヤはコヤ(木屋)で「建築工事のために仮に設ける建物。材木を保管したり、大工が仕事をしたりする簡素な家」(国語大辞典)であるという。コヤカイトとは、「材木を保管したり、大工が仕事をしたりする簡素な家のあった所」となる。これだったら可能性はある。

②コヤはコ(小。接頭語)・ヤ(ヤツ。菴)で、「小湿地」をいう(語源辞典)。コヤカイトとは、「小湿地で住宅のあった所」となる。ここは棚状の段丘にもなっており、湧水もあったと思われる。

全国地図には、コヤカイト地名もコヤカイト地名も載っていない。

【幸甚・幸甚田】

コウジン・コウジンダ。

コウジン小字は、県道を跨いでおり、その東側にコウジンダ小字がある。コヤカイト・タナカ小字の南側になる。

コウジンとは何か。二説を挙げる。
①コウジン(幸神)のことで、塞ノ神をいう。境界地にあって、疫病や悪霊を防ぐ神である。「塞ノ神を祀っていた所」を意味する。

②コウジン(荒神)をいう。荒神は「家や地域共同でまつられ、崇りやすい荒ぶる性格とともに祭祀者を庇護する強い力を持つ神」(民俗大辞典)という。同族神として祀られることが多い。コウジンとは、「荒神様を祀ってあるところ」であろう。

コウジンダは「コウジンさまの祭祀を維持するため、その収益を充てた土

地」か。ここは傾斜地が大部分で、水田はわずかしかないが、その小さな水田で足りたということだろうか。

国土地理院の全国地図には、コウジン地名は、中・大字として 10 ヲ所に記載がある。

【木治ヤ】

キジヤ。

この小字は県道の西側にあつて、コウジン小字の南隣になる。

キジヤといえはキジヤ(木地屋)で、「木地屋の住んでいた所」となる。木地屋とは「木彫などの材料の木を荒挽きしたり、ろくろを用いたりして、盆や椀など塗り物ではない木地のままの器類を作る職業」(国語大辞典)である。

キジヤ小字のある所は、今田の中心部の一つと考えられるので、果たしてそこに木地師が住んでいたのか、という疑念がないでもない。

そこで、もう一つの解釈を挙げておきたい。

キジキシ(貴師)と転化したもので、「高僧」をいう(国語大辞典)。キジヤとは「高僧が住んでいたことのある屋敷跡」となるが、どうであろうか。チャドウ小字までは 200~300m ほどで、垣外小字群やナカソネ・タナカ小字も近くにはあるが、やや説得力に欠けるか。

国土地理院の 25,000 分の 1 の全国地図には、キジヤ地名が中・大字として記載されているのは 3 件で、全て「木地屋」の字が宛てられている。

【井戸・井ノ上・井戸端】

イド・イノウエ・イドハタ。

これらの小字は県道の西方の傾斜地にある。

イド(井戸)は、キ(井)・ド(処)

で「泉や流水から水を汲み取る所」(語源辞典)である。ここに掘り井戸があつたとは思われない。この付近の傾斜地には湧水があり、さらに井水が何本も流れている。

イドは「井水のあるところ」、イノウエは「井水が流れている、その上の方」という意味であろう。イドハタは広い小字、「井水の近くにある耕作地」を意味するものと思われる。

全国地図には、イド地名が、中・大字として 30 ヲ所も挙げられている。

【田中】

タナカ。

この小字は県道の下の段にあて、コヤカイト・マツバ・オオヨセ・コウジンなどの小字に囲まれている。

タナカは小字であると同時に中字にもなっている。ここでのタナカには、語源辞典によれば、二通りの解釈がある。

①タ(語調を調える接頭語)・ナカ(中心地)。タナカとは、「今田の中心地の一つ」となる。垣外小字群やナカソネ・チャドウ小字が近くにある。

②タナ(棚)・カ(場所を表す接尾語)で、タナカとは「階段状の土地」を意味する。

タナカ地名は一般的な地名で、全国地図にも、339 ヲ所に挙げられている。すべて、中・大字である。

【松葉】

マツバ。

この小字は県道と主要地方道の間、の斜面上にある小さな小字である。

松の葉は地名にはなりにくいので、次のように考えたい。

マツは動詞マツハル(纏)から転化したもので、「巻いたような地形」を示す(語源辞典)。バは場所のこと。

マツバとは、「巻いたような地形になっている所」となる。現場によく合っている。

国土地理院の全国地図には、マツバ地名が、中・大字として40カ所に記載されている。

【大寄】

オオヨセ。

この小字は、マツバ小字の南側の傾斜地にある。

オオヨセとは何を意味しているのか。可能性がある二説を挙げる。

①オオヨセとは「規模の大きな土地寄せをした所」。住宅を建てるにしても、水田にするにしても、平地に均さなければならぬ。土を寄せる作業が必要になる。

②オオ←アフ＝アブの転で、アバと同じ「崖」を示す（語源辞典）。オオヨセとは、「崖のあるところで、土寄せをした所」を意味する。

全国地図には、オオヨセ地名は記載が無い。

【小割】

コワリ。

この小字はオオヨセ小字の南側、イドハタ小字の西側、斜面の下方にある。

解釈を二つ。

①コワリとは、土地を分轄したときなどで、「平等になるように細かく分けた土地」か。

②コ（子）で、「分家に与えた土地」とも考えられる。

全国地図には①カ所にコワリ地名。

【川狩】

カワカリ。

この小字は、県道と主要地方道の間、緩傾斜地にある。近くにはキジヤ小字もある。

川狩（カワガリ）とは、魚を取ると

ころこと、という意味があるが、この小字のある所に魚はいない。川狩とは、「木材を編束しないで、一本ずつ管流しする作業」（国語大辞典）だという。

カワカリとは、「樽木を管流しする準備作業が行われた所」であろう。

近くにはキジヤ小字もある。樽木にする作業場としては好都合な場所にあったと思われる。天竜川に流れ出るところで樽木を回収した。下流にはキアゲバ小字がある。樽木を痛めないようにするには流す距離は長くない方がいいのだろう。

近くを流れる小川が、北方にある御庵沢川や南にある樋ヶ沢川ほど水量があるわけではないので、そのことが気にかかる。激しく流れない川が選ばれたか。

国土地理院の全国地図には、カワカリ地名も「川狩」地名も記載は無い。

【東・東垣外】

ヒガシ・ヒガシカイト。

県道の東側の傾斜地の上の方に、ヒガシ地名が一カ所、ヒガシカイト小字は三カ所ある。最も離れたヒガシカイト小字は、小学校の東側になる。

このヒガシが何に対する東なのか、はっきりしない。今田の中心部の一つから見ての東であれば、分かり易いが、一つ離れたヒガシカイトには当てはまらない。

県道米川・飯田線であれば、全ての小字にとって、都合はいいが、これらの地名発生時に、この道路があったかどうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヒガシ地名は196カ所に及ぶが、ヒガシカイト地名はゼロとなっている。

【鞍畑】

クラハタ。

この小字は二カ所にある。二カ所とも、県道米川・飯田線に接して、その東側にある。一つはコウジン小字の南側にあり、もう一つは小学校校地に接している。

クラハタとは何か。二説を挙げる。①クラには、崩壊地を意味する場合が多い。ハタ(畑)はハタ(端)で、「その物に近く沿った所」の意(広辞苑)。クラハタとは、「崩壊地のある所」となる。

②クラ(鞍)はクラ(倉)で「倉庫」を意味する。クラハタとは、「倉庫のあった所の近」を意味する。地名発生時、救荒食料を貯えることが重要視されていたのであろうか。

しかし、なぜか全国地図には、クラハタ地名も「鞍畑」地名も載っていない。

【石原・石原畑】

イシハラ・イシハラバタ・

これらの小字は、県道の東の方の緩傾斜地にある。

イシハラは「石の多い開拓地」で、イシハラバタは「イシハラの縁辺部」を意味するか。

イシハラは現在でも果樹園と桑園になっているが、イシハラバタは一部が果樹園になっているが、大部分は山林の傾斜地となっている。

全国地図には、イシハラ地名は78件もあるが、イシハラバタはゼロ。

【モリノ上】

モリノウエ。

この小字は、県道米川・飯田線から西の方へ下がっている。もう少し下の主要地方道飯田・富山・佐久間線には大宮八幡宮がある。

モリはモリ(杜)で、「神社などの

ある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立った所」(国語大辞典)である。

モリノウエとは、「神社より標高の高い所」を意味する。この場合のモリは、大宮八幡宮を指す。

国土地理院の全国地図には、モリノウエ地名が、一件だけ、中・大字として記載されている。

【カジヤ】

この小字は、下の主要地方道に沿って、その東側にある。

カジヤとは、素直に考えれば、鍛冶屋さんで、金属鍛造職人である。「鍛冶屋の住んでいた所」がカジヤである。

しかし、ここで、別の解釈を挙げておきたい。

カジは動詞カジル(嚙。搔)の語幹で、「引っ搔かれたような地形」をいう(語源辞典)。ヤはヤツ(菴)のこと。合わせると、カジヤとは、「崩壊地のある湿地」を意味する。かの解釈も否定はできない。

国土地理院の全国地図には、カジヤ地名は、中・大字として、82カ所に記載されている。

【川原田】

カワラダ。

この小字は天竜川の氾濫原にある。カワラダとは、文字通り、「天竜川沿いの平地に水田のある所」をいう。盛土前には、たびたび冠水していたものと思われる。

【宮ノ前・大宮・宮ノ後】

ミヤノマエ・オオミヤ・ミヤノウシロ。

オオミヤ・ミヤノマエ小字は1カ所ずつ、ミヤノウシロ小字は2カ所にある。

いずれの小字も、大宮八幡宮に関わ

る小字であることはいうまでもない。

しかし、前と後の位置関係がはっきりしない。現在、大宮の本殿は南面だから、ミヤノマエ小字は本殿の前にあるので、問題はない。しかし、ミヤノウシロは横を向いていることになる。

現在のこれらの小字の位置が正しいと仮定すれば、ミヤノマエ小字とミヤノウシロ小字の成立時期が異なることになる。以前、ミヤノウシロ小字が発生したときには、本殿が西に向いていたとすれば、辻榊は合う。そんな時期があったのだろうか。しかし、天満宮以外は、西向きのお宮は少ないといわれている。

【シャウブ沢】

ショウブサワ。

この小字は、二つのミヤノウシロ小字に挟まれている。

ショウブが「勝負」では地名になりにくい。「菖蒲」も難しい。

語源辞典によれば、ショウブ←ショウズだという。さらに、国語辞典も、方言として、ショウズとは「水の湧き出る所。泉」の意味だとしている。

ショウブサワとは、「湧き出た少量の水が小川になっている所」ということになる。

国土地理院の全国地図は、中・大字として、ショウブサワ地名を 16 ヲ所も挙げている。難しい地名にしては多いといえる。

【平畑】

ヒラハタ。

この小字は、大宮八幡宮の上の傾斜地にある、広い小字である。現在は、居住地と桑園が主で、ごく一部に水田がある。

ヒラハタとは、「傾斜地にある畑」であろう。住宅地はかつては畑であつ

たことが考えられるからである。

全国地図には、ヒラタ地名が 69 ヲ所、「平田」地名は 87 ヲ所が、中・大字として挙げられている。

【半場・ハンバ】

ハンバ。

これらの小字は、主要地方道と県道との間の傾斜地にある。ハンバ小字は広い面積になっている。

ハンバは、崖を表すハバと同じで「傾斜地の中にある、ちょっとした平地」を意味する。現在は、住宅であったり、果樹園・桑園・水田や荒地などになっている。

国土地理院の全国地図には、ハンバ地名が 10 ヲ所、中・大字として挙げられている。

【一本木・一本木原】

イッポンギ・イッポンギハラ。

これらの小字は小学校の近くにあつて、イッポンギ小字は北西側にあり、イッポンギハラ小字は南東側にある。

イッポンギ（一本木）とは、周辺に目立つ一本の高木があつたために生まれた地名である。その高木は、村誌によれば、桧だつたという。その桧には藤が巻きついていて、そこに浅間様が祀られていたという。

イッポンギハラ（一本木原）は、「目立つ大きな桧があつた平坦地で神聖な場所」となるか。ハラには、「神聖な場所」という意味が含まれており、イッポンギには浅間様があり、ミヤモト・モリシタの小字もある。やはり神聖な場所であつたに違いない。

【宮本・宮ノ上】

ミヤモト・ミヤノウエ。

ミヤモト小字は小学校の校地にもかかつており、もともとひと繋がり的小字であつたと思われるが、2 ヲ所に

ある。ミヤノウエ小字はミヤモト小字の北側にあるが、傾斜地の下の方になっている。

ミヤモトとは、「神社などの境内とその周辺」をいう（国語大辞典）。この神社とは、村誌のいう浅間様なのか、ほかに神社があったのかどうか、はっきりとはしていない。

問題はミヤノウエ小字。小字図で見ると、確かにミヤモト小字の北隣で、ここにあったお宮の上に当たる。しかし標高で見ると、ミヤノウエ小字の方が低い所にある。こういう関係は、果たして成立するのであろうか。

【日ヤケ田】

ヒヤケダ。

この小字は、小学校の傍にあり、周囲には、イドハタ・ミヤモト・キリダ・ヒエタなどの小字に囲まれている。

ヒヤケダとは何を意味するのか。ほぼ正反対の意味になる、二通りの解釈ができる。

①一般的な解釈で、日焼けし易い水田で、「水が涸れやすい田んぼ」を意味する。小学校のプールある所で、高い所にあり、首肯できる。

②ヒヤケは動詞ヒヤケル（冷）の連体形の名詞化したもの。ヒヤケダは、「冷水につかる田」（語源辞典）という。隣がヒエタで湧水のある所だったので、迷ったが現場を見て①に納得。

【ハカリ袋】

ハカリフクロ。

この小字は小学校の校庭に接しており、ヒエタ・ミヤモト・モリシタ・イッポンギハラ等の小字に囲まれている。

ハカリフクロとは、分かりにくい地名である。秤を入れた袋では話にもならない。

ハカリは自動詞ハガル（剥）の連体形が名詞化したもので、「剥がれた状態になる」ことをいう。フクロは「袋状に囲まれた状態」のこと。

ハカリフクロとは、「土手が崩れて袋状になった土地」ということになる。現在は、校庭との差ないように埋められている。かつては、高低差のある袋状の地形になっていたのではないかと想像している。

全国地図には、ハカリフクロ地名は記載が無い。

【七嶋】

シチシギ。

この小字は2カ所にある。小学校の北側と南側に一つずつある。

これも難しい地名である。語源辞典に依りながら見ていきたい。

シチ（七）←ヒチ（漬）の転で、「湧水のある所」をいう。シギ（嶋）は、シギ（棧）の転訛したもの。シギ（棧）とは、「近世の牛車の乗り降りに用いるはしご」（国語大辞典）である。ということデ、シギとは「階段状の地形」を意味する。

以上から、シチシギとは「清水の湧き出る階段のような地形」と考える。

全国地図には、当然のことと思えるが、シチシギ地名は載っていない。

【洞】

ホラ。

この小字は、樋ヶ沢川右岸の溪谷にある。下流側にはホラガサワ小字がある。

ホラという普通名詞をそのまま小字名にしたものと思われる。

ホラ（洞）とは何か。大平宿のご主人は、尾根と尾根との間の距離によって、広い方から順に、谷→沢→洞→埵となっているのではないかと、という見

方を教えてくれた。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として26ヶ所で採られている。

【清畑】

キヨハタ。

この小字は、樋ヶ沢川溪谷の右岸にあって、モリシタ小字とクラモト小字に挟まれていて、急傾斜地にある。

キヨ（清）は、神聖な場所を意味する（語源辞典）。ハタ（畑）は、畑ではない。急傾斜地にあるので、今でも畑になっていない。ハタはハ（端）・タ（処）で、周辺をいう。

合わせると、キヨハタは「神聖な場所の周辺に当たる所」となる。ミヤモト小字にあったと思われる神社に関わる地名であろう。同じ神聖な場所であるモリシタ地名に接していることがその証となっている。

それにしても、現在の龍江小学校の地に祀られていたと思われる神社がよくわからないので困惑している。ミヤモト小字の小字名となっているお宮である。

全国地図には、中・大字としてキヨハタ地名は2カ所に記載されている。

【クラ本】

クラモト。

この小字は大部分が平坦地になっており、モリシタ・キヨハタ・ホラ・イナバなどの小字に接している。

クラモトとは、室町時代の質屋とか、江戸時代の大名の蔵屋敷を管理した商人のことをいうが、ここでは、いずれも当てはまらない。

クラモトとは何か。クラ＝倉庫説を採りたい。既に今田には、3カ所でクラ＝倉庫説に従った解釈をしてきた。少し多いとは思いながらも、やはりクラモトは、「中心的な倉庫のある所」

としたい。

国土地理院の25,000分の1地図には、クラモト地名は26カ所で、中・大字として記載されている。

【切田】

キリダ。

この小字は県道米川・飯田線の東側傾斜地にある、小さな小字である。小学校のプールのあるヒヤケダ小字の下方に当たる。

キリ（切）は、「切り取られたような崖地」をいう。ダ（田）はタ（処）の濁音化したもの。合わせて、キリダとは「切り取られたような崖地のある所」を意味するものと思われる。

全国地図には、キリダ地名は無いが、「切田」地名は、中・大字として9カ所にある。この場合、キリタとかキッタと呼んでいる。

【洞ヶ沢】

ホラガサワ。

この小字は、樋ヶ沢川右岸のホラ小字の下流側にある。

ホラガサワとは、「ホラという地名の近くにある小さな谷」か。

全国地図にホラガサワ地名は載っていない。

【上ノ坊】

カミノボウ。

この小字は、地方道飯田・富山・佐久間線の東側の傾斜地にある。この小字は、タイザ小字の二方を囲んでいる。

カミノボウとは、「上の方にある僧坊」ということになるが、カミとは、標高の高いことをいうのか、それとも天竜川の上流側をいうのだろうか。

そして、カミというのは、何に対してカミなのだろうか。

考えられることは一つ。県道沿いに南に80mほど進むと、樋ヶ沢川を越

えたところに、ホッケドウ小字がある。この法華堂に対してカミの方にある、ということの意味するものと思われる。

となると、カミとは天竜川の上流方向を指すことになる。

なお、全国地図には、カミノボウ地名が1カ所記載されている。

【タカゴシ】

この小字は、樋ヶ沢川右岸にある。

タカゴシとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、仮説を二つ。

①タカゴシ←タカゴシ(高越)で、「川より高い所で川を越える所」。ここでは、樋ヶ沢川に橋が架かっていたのであろう。

②タカには限度の意味があり、「台地の端」をいう。ゴシ←動詞コス(漉)の転で、「水が湧き出る所」という。合わせて、タカゴシとは、「台地の端にあって、清水の出る所」となる。この主要道の東側には、清水が自慢のお宅もある。

国土地理院の全国地図には、タカゴシ地名は一つも無い。

【オノ神】

サイノカミ。

この小字は主要地方道の東側で、樋ヶ沢川の右岸にある。

サイノカミ=サエノカミで、道祖神・幸神・斎神・塞神・妻ノ神などが宛てられている。「境にあって外部から村落へ襲来する疫神や悪霊などをふせぎ止めたり、追い払ったりする神。また行路の神、旅の神、生殖の神ともされる」(国語大辞典)である。

樋ヶ沢川が境界地になっており、ここで、コトの神送りが行われたこともあったかもしれない。

国土地理院の全国地図には、サイノ

カミ地名は、中・大字として29カ所が挙げられている。この地域にも、小字名として、多く残っている。

【平山】

ヒラヤマ。

この小字は主要地方道に沿って東側の急傾斜地にある。

ヒラは傾斜地を意味する。黄泉平坂のヒラである。ヤマは森林のこと。

ヒラヤマとは、「傾斜地となっている森林」の意となる。

国土地理院の全国地図には、ヒラヤマ地名は、99カ所で、中・大字として挙げられている。一般的な地名といえる。

【日カゲ畑】

ヒカゲバタ。

この小字も主要地方道の東側傾斜地にある。ヒラヤマ小字の北隣になる。

この小字の場所に、午後、立てば、日当たりが悪くないことに気づく。しかし、北西に向いている部分もあり、午前中から日当たりがいい、ということは考えられないので、ヒカゲバタとは、「日当たりのあまり良くない畑」ということになる。

現在は耕作放棄されているが、棚畑か棚田になっていた名残があって、階段状の土地が並んでいる。

【島】

シマ。

この小字は、天竜川の氾濫原に、3カ所ほどみえる。

現在は天竜川治水対策の盛土が終わっているので、それ以前の様子は分からないが、多分、小字発生当時には、シマ小字のところは天竜川の島になっていたものと思われる。

シマ地名は一般的な地名で、対岸の川路など、どこにでもあり、全国地図

にも、中・大字として、93カ所も挙げられている。

【日ヤケ田】

ヒヤケダ。

この小字は、天竜川の氾濫原にある。

ヒヤケダとは、「日焼けし易い土地」である。盛土前は水田であった可能性もあるが、ここでは、夕を夕(処)としておきたい。水の供給が難しい田んぼだったということになる。現在でも、主に果樹園と桑園になっていて、水田はない。もちろん盛土の後では、川の面との差が大きすぎて、川から水をあげることは、経済的に無理であろう。この場所は東側の傾斜地から井水を引くことが難しかったのかもしれない。現在でも、東側の斜面を下る小さな沢がたくさんある今田地区では考えにくいことではあるが。

ヒヤケダには、ヒヤケ(冷)・ダ(田)という意味もあるが、ここでは適応できないだろう。

全国地図には、一件だけヒヤケダ地名が記載されている。

【亀沢】

カメザワ。

この小字は天竜川岸の微高地にある。キアゲバ小字の南隣になる。

カメザワとは何か。亀がいても不思議ではないが、ここでは採らない。仮説を二つ。

①カメ(亀)←カハ(川)・メ(目でべの転)から、「川辺」をいう(語源辞典)。サワ(沢)は「浅く水がたまり、草の生えている湿地」(国語大辞典)である。合わせると、カメザワとは、「天竜川の岸辺で、浅い水たまりがあり草も生えている湿地のある所」となる。

②カメ←カベ(微高地)。サワはサハ

(騒)で「天竜川の水音が響く所」(語源辞典)を意味する。カメザワとは、「天竜川の岸辺の微高地にあって、川音が聞こえる所」か。

これらのカメとサワを交換すれば、四つの解釈が成り立つことになる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カメザワ地名が4カ所に採られている。「亀沢」地名は5カ所。

【木上場】

キアゲバ。

この小字は天竜川の氾濫原にあり、カメザワ小字の北隣になる。

盛土前の多くの支流が天竜川に流れ込んでいた状況はわからないが、東側のカワカリ小字と関連していたはずである。カワカリもキアゲバも現在の小字所在地を固定的に捉える必要はないであろう。

今田の傾斜地の上・中流部で管流した樽木を、天竜川に入る前に拾い集めて筏に組んだのであろう。

山がそれほど深くはない今田で、樽木を流し出していたとは思ってもみなかったのが、驚きである。

全国地図には、なぜか、キアゲバ地名は一件も記載されていない。

【仲】

ナカ。

この小字は、天竜川氾濫原の微高地にある集落の一部になっている。微高地は天竜川の流に沿うように、南西-北東二に細長く連なっている。

ナカとは、「三分割されたところの中央部」(語源辞典)をいう。この細長い微高地上の集落は、三つに分かれている。即ち、カメザワ・ナカ・ホソダである。その中央がナカとなっている。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、ナカ地名が 190 ヲ所も記載されている。

【細田】

ホソダ。

この小字は、ナカ小字に続く、天竜川氾濫原の微高地上にあるが、もう一カ所、この微高地から天竜川の方へ突き出しているホソダ小字もある。

ホソダ（細田）とは、ホソ（細）・ダ（処）で、「細長い土地」を意味する。現在でも、住居と桑園となっており、水田になっていたことはないと思われる。

国土地理院の 25,000 分の 1 の全国地図には、ホソダ地名は 35 件と比較的多い。

【角畑】

カドバタ。

この小字は、氾濫原微高地居住地の天竜川よりにある。

カドバタとは、カハ（川）・ド（処）・ハタ（畑）の転で、「天竜川の近くの畑」を意味する。

【藪下】

ヤブシタ。

この小字は、微高地集落のホソダ小字の西隣にある。天竜川よりである。

どこにでもある地名であるが、わかりにくい地名でもある。

ヤブシタとは何だろうか。

由緒がわからなくなった屋敷神などを藪神というが、ヤブといのは、この藪神のことをいうのではないかと語源辞典は解説している。は面白いが、天竜川に曝されている氾濫原には、こうした藪神もいないのではないだろうか。

ヤブ（藪）とは、「低木・草・竹などが手入れもされず乱雑に生い茂っている所」（国語大辞典）という一般

的な解釈に従いたい。

ヤブシタとは、「藪の下の方にある土地」ということになる。但し、その藪に相当する場所が、今では全く分からなくなっている。

全国地図にはヤブシタ地名は一件も挙がっていない。

【久保田】

クボタ。

この小字は、細新生活改善センターの周辺に広がる大きな小字である。

どこにでもある地名で、「窪地のある土地」を意味している。

【コウジ垣外】

コウジカイト。

この小字は、クボタ小字に囲まれている小さな小字である。

コウジカイトとは何か。二説ある。

①コウジカイトとは、文字通り、「麴屋の居住地であった所」をいう。

②コウジ←コウ（川）・チ（場所を示す接尾語）で、「川のある所」を意味する（語源辞典）。コウジカイトとは、「天竜川に近い住居跡」ということになる。

なお、全国地図には、コウジカイト地名もコウジカイト地名も、載っていない。

【寺ノ上・観音畑・岩山】

テラノウエ。

この小字は、クボタ小字に囲まれて、コウジカイトに隣接する、小さな小字である。カンノンハタ小字とイワヤマ小字の位置は推定によるが、いずれも小さな小字である。

テラノウエとは、「お寺の上の土地」であり、その寺院とは紅雲寺のことと思われる。

紅雲寺は、永禄 10 年(1567)に開基、1657 年に如意輪観音を安置している。

保寿寺の末寺であったが、明治6年廃寺。廃仏毀釈のあおりか。

現在は、テラノウエ小字の小高い丘の上に、如意輪観音・千手観音・聖観音・馬頭観音などの石仏が、所狭しと安置されている。紅雲寺（光雲寺ともいわれた）廃寺の時に、心ある村人たちによって、ここに移されたのであろうか。

南の樋ヶ沢川右岸に、カンノンハタ小字とイワヤマ小字があったらしい。いずれもブルーマップにその地番はないので、その前後の地番から推量して小字図に入れた。

カンノンハタは「観音堂を維持するための費用を捻出する畑」であろう。

イワヤマは「小高い岩か微高地」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、テラノウエ地名は5カ所、イワヤマ地名が19カ所、カンノンハタ地名はゼロとなっている。

【月ノ木】

ツキノキ。

この小字は、樋ヶ沢川が天竜川に流れ込む、その右岸にある。

対岸の川路にも、ツキノキ小字はあるが、少しずれている。果たして関連があるのかどうかは不明。川路のツキノキは「砦」という解釈をしたが、龍江では当てはまりそうにない。

ツキノキ←ツキ（尽）・ヌキ（抜）の転で、崩壊地形をいう語を重ねた、という語源辞典に従いたい。ツキノキとは「天竜川の側が崖になっている所」か。

あるいは、槻木はケヤキの古称だとういので、ケヤキの大木が生えていた可能性もある。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、ツキノキ地名が12カ所に挙げられている。

【砂田】

スナダ。

この小字は、ホソダ微高地集落と地方主要道の間の水田地帯にある。

スナダとは、素直に解釈して、「砂の多い田んぼ」としたい。天竜川の氾濫時に泥を流したのであろうか。

国土地理院の全国地図には、スナダ地名が16件、中・大字として挙げられている。

【前田】

マエダ。

この小字も、ホソダ微高地集落と地方主要道の間の水田地帯にある。

マエダとは、これも文字通りの解釈で、「僧坊の前の方にある水田」ということになる。僧坊とは、カミノボウ小字にあったと思われる坊のこと。

マエダはどこにでもある地名で、全国地図でも、中・大字として139カ所も記載されている。

【中ノ田】

ナカノタ。

この小字も、ホソダ微高地集落と主要地方道の間にある。マエダ小字とカミノボウ小字に挟まれている。

ナカノタとは、「マエダ小字とカミノボウ小字の間にある水田」の意か。

全国地図には、中・大字として、3カ所に記載がある。

【三ツ田】

ミツダ。

この小字も、地方主要道の西側にあり、天竜川の氾濫原になっている。

ミツダとは、「三枚の田んぼ」の意に解せないこともないが、やや安易に過ぎるか。

ミツ（三ツ）は動詞ミツル（満）の

連用形で、「ぎりぎりのところまで迫る」状態を表しているという（語源辞典）。

ミツダとは、「大水の時に、天竜川の水がぎりぎりの所まで迫ってくる田んぼ」を意味するものと思われる。

全国地図にはミツダ地名が 1 ヲ所だけ載っている。

【日カゲ坂】

ヒカゲサカ。

この小字は、主要地方道を跨いで、北向きに緩く傾斜している。

それほど日陰になるとも思えないが、日光に敏感な冬季に南中高度が低くなるために地名として採られたのだろうか。

ヒカゲサカとは、「日当たりのよくない坂道」をいう。

全国地図には、ヒカゲサカ地名は無いが、ヒカゲザカ地名は 1 件だけ記載されている。

【ハネ】

この小字は、主要地方道と樋ヶ沢川との間の急傾斜地にある。

近くにある「羽根」小字とは、状況が少し異なっていると思われるので、別扱いとしたい。

ハネ小字は天竜川の氾濫原に接しており、その境界を樋ヶ沢川が流れている。

ハネは動詞ハヌ（勿）の連用形が名詞化したもの。水刳（みずはね）という語がこの地域では水防上よく使われてきた。水刳とは、「河川の水勢緩和や流路の整正のため河岸から河身に設ける工作物」（広辞苑）をいう。

今田のハネは、「自然の急傾斜地が、大満水の時に天竜川の水勢を緩和している所」ということになりそうだ。

【羽根】

ハネ。

この小字は、主要地方道と新堤防沿いの道との間の三カ所にある。

村誌のいう三段目（390~410m）に相当する段丘面であるが、その上の段丘から赤土が三段目の表面に流れ出ている可能性はある。

ハネ（羽根）←ハニ（埴）と転じたもので、「黄赤色の粘土」（語源辞典）をいう。

ハネとは、「黄赤色の土のあるところ」としたいが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、24 ヲ所にハネ地名があるが、水刳をいうのか土の色をいうのか、区別はできない。

【北向】

キタノムカイ。

この小字は、細新処理場の南側にあり、土手の斜面は、ほぼ北を向いている。北の向かいに何があるのか。それは紅雲寺と思われる。

キタノムカイとは、「北側の紅雲寺に向き合う場所」ということなのだろうか。

全国地図には、キタノムカイ地名は無い。

【漆ヶ坪】

ウルシガツボ。

この小字は、天竜川に接しており、樋ヶ沢川の南側にある小高い、小さな丘になっている。

ウルシガツボとは何か。

ツボ（坪）はツボ（壺）のこと、口がっぼんで胴がふくれた容器のことをいう。この岩体を壺に見立てたものと思われる。

ウルシガツボとは、「漆が生えていた壺状の丘」であろう。栽培したものではなくて、実生の漆と思われる。

別に、ウルシ←ウル（潤）・シ（接尾語）で、「湿地」とする解もある（語源辞典）。しかし、接尾語シが曖昧で躊躇する。

全国地図にはウルシガツボ地名は記載がない。

【穴田】

アナダ。

この小字は、桜街道を挟んで、その両側に細長く延びている、帯状の低地である。

アナダは文字通り、「穴状に凹んだ田んぼ（または所）」となる。現在でも水田はごく一部で、後は桑園と荒地になっている。タを「田」とするのがいいのか、「処」とすべきなのか、わからない。

国土地理院の全国地図には、アナダ地名が8カ所に記載されており、いずれも「穴田」の字を宛てている。

【新垣外】

シンカイト。

この小字は、桜街道の両側に広がり、アナダ小字とオオタ小字に挟まれている、墓地の多い小字である。

シンカイトとは、文字通り、「新しい居住地」か。

他にシン（新）をシン（滲）とし、「清水の湧き出る居住地」とする解釈も不可能ではないが、字音による地名に慣れないせいか、採りあげにくい。

なぜかわからないが、全国地図には、シンカイト地名は無い。

【京田】

キョウデン。

この小字は、桜街道と主要地方道の間にあり、紅雲寺から南へほぼ200mのところにある。

キョウデンとは何か。語源辞典に従いながら、二説を挙げる。

①一般には、「給田のことで、中世、領主から荘官や地頭に給与された土地」とする。この地域の荘園関係の主従関係がはっきりしていない、ということもあるが、伊那谷南部では、もう一つの解釈の方が実状に合っているように思える。

②キョウデン（京田）とはキョウデン（経田）のことで、「寺院の所領で、年貢が減免されている土地」をいう。200mほど北の紅雲寺では、1677年の検地時に、「寺跡は除いてほしい。他に、田畑高4石7斗8升4合の年貢地について見合わせるように」と要望書を出している。この中にキョウデン小字の収穫量も入っていたのかもしれない。

国土地理院の全国地図には、14カ所に、中・大字として記載されている。

【アラ井畑】

アライバタ。

この小字は、清水沢川右岸にあって、桜街道と主要地方道の間にある。

アライバタとは何か。解釈を二つ。

①アライバタは、アラ（荒）・イ（井）・バタ（端）で、「荒れやすい川の岸边」をいう。現在のように整備される前は、荒れることが多かったと思われる。清水沢川も勾配がきつくて、流れる距離が短いので、洪水時の流水は一気に流れ下ったと思われる。

②アラ（荒）・イ（井）・バタ（畑）で、「荒れやすい川辺にある畑」を意味する。現在は、住宅と桑園と果樹園になっている。

全国地図には、アライバタ地名は一つも載っていない。

【番匠免】

バンジョウメン。

この小字も、桜街道と主要地方道の

間にあり、キョウデン小字の南隣になっている。

この小字も、由来を三説挙げる。語源辞典などを参考にしながら考えていきたい。

①バジョウメン（馬上免）で、「中世、荘園の騎馬検注使の立入りを免除された耕地」という。寺田などで免税となっている土地で、北隣にキョウデン小字があるのが傍証となるか。寺院は紅雲寺。

②バンジョウ←バンシヨ（番所）と転化した。三叉路になっており、番所が置かれていても不思議ではない。

③バンジョウ（番匠）は、中世の大工の呼称。「大工という職人を優遇するための免租地」も考えられる。

全国地図には一カ所、バンジョウメン地名が、中・大字として記載がある。

【樋ノ口】

トヨノクチ。

この小字は、主要地方道の東側に接しており、北はホッケザカ小字から南は清水沢川（清水入川）を越えて福沢小字にまで達する長い面積をもっている。

トヨノクチとは何か。二説を挙げる。

①トヨ←トイ（樋）の転で、「水路」をいう。クチ（口）はその「出入口」である。トヨノクチとは、「井水から取り入れる水口」を意味する。この小字を、清水沢川から取り入れた羽入田井が通っており、その水を利用する落とし口が、トヨノクチにあるはずである。

②トヨは動詞トヨム（響）の語幹で、「水音の響く所」（語源辞典）をいう。清水沢川の近くでは、増水時に川音が高まったのであろう。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、トヨノクチ地名が2カ所に挙げられている。

【羽入田】

ハニユウダ。

この小字は、トヨノクチ小字の東隣で、アオキガイト小字との間に挟まれた傾斜地にある。

ハニユウ（羽入）はハニウ（埴生）で、「埴のある土地」を意味する。埴とは、「きめが細かくねばりけのある黄赤色の土」（以上は国語大辞典）をいう。ダ（田）はダ（処）。傾斜地にあつて、現在でも水田にはなっていない。

ハニユウダ小字は、村誌のいう三段目の段丘（海拔410~430m）で、その段丘面は厚い赤土で覆われているという。

ハニユウダとは、「粘りけのある黄赤色の土のある土地」を意味するものと思われる。

国土地理院の全国地図には、ハニユウダ地名は、中・大字として5カ所に記載されている。

【八王子】

ハチオウジ。

この小字は、清水沢川右岸の崖の上の段丘にあり、トヨノクチ・ハニユウダ・アオキガイトの小字に囲まれている。

「八王寺」とするデータもあるが、広辞苑にも無い。元は「八王子」と思われるので、ここでは「八王子」としておきたい。

ハチオウジは時又と川路に小字がある。時又には素戔鳴尊を祭神とする八王子神社があり、時又の鎮守の森となっている。川路は小さなお宮であるが、そこには、お稲荷様が祀られている。

今田の八王子小字に祀られていた

神様については分からないが、八王子という八柱の御子神か眷属神が祀られていたものと思われる。

全国地図には、中・大字として、13件の記録がある。

【青木垣外】

アオキガイト。

この小字は、主要地方道と県道の間の段丘にあつて、清水沢川まで含む広大な小字になっている。

アオキガイトとは、「青木という人が住んでいた所」ということになる。偶然の一致かどうか。竜丘にもアオキガイト小字がある。それでも、青木は固有名詞と考えていくのがいいように思える。

国土地理院の全国地図には、なぜか、アオキガイト地名は載っていない。

【清水タレ】

シミズタレ。

この小字は、清水沢川の右岸の段丘と傾斜地にあり、アオキガイト・ヒエダ・サワヤナギ小字と清水沢川に囲まれている。

シミズタレとは何を意味しているのだろうか。

タレは動詞タル（垂）の連用形で、「傾斜地」を表すという（語源辞典）。シミズは①湧水の「清水」か、②清水沢川の「清水」か、判断がつかない。上流にはシミズハラ（清水原）小字やシミズイリ（清水入）小字があるので、清水沢川流域では「シミズ」が広い範囲で用いられる地名になっていたかもしれない。

以上のことから、シミズイリは二通りの解釈が可能となる。

- ①「清水が湧き出る傾斜地」である。
- ②「清水沢川に傾いている傾斜地」ではないか。

なお、全国地図には、シミズタレ地名は記載が無い。

【沢柳】

サワヤナギ。

この小字も、清水沢川右岸にあつて、清水沢川とシミズタレ・ヒエダ・トヤバの小字に囲まれている。

サワヤナギとは、「山間の比較的小さな溪谷で、柳の生えている所」となりそうだが、語順が気になる。ヤナギサワなら、良しとしたいのだが。

とういことで、別解を示したい。

下伊那地方では、方言で屋根のことをヤナギという（方言大辞典）。また、ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（場所を示す接尾語）とする解釈もある（語源辞典）。

以上から、サワヤナギとは、「山間の比較的小さな溪谷にある、屋根のような急傾斜地」としたい。

全国地図には、なぜか、サワヤナギ地名は一件もない。

【冷田】

ヒエダ。

この小字は、JA 龍江支所のある段丘のほぼ平坦な場所にあり、周辺には、アオキガイト・イエウラ・コセ・ムツタ、サワヤナギ・シミズタレなどの小字がある。

現在は水田は無いが、地名発生時には田んぼだったかもしれない。

ヒエダとは何か。二説を挙げる。

①ヒエダ（冷田）は、文字通りで、「湧水利用のために、水温の低い田んぼ」を意味する。現在は羽入田井が、この小字の周辺を流れているので、羽入田井導入以前に、ヒエダ地名が発生していることになる。

②ヒエダ（冷田）←ヒエダ（稗田）の転もありうる。「稗を栽培していた土

地」となる。平坦地だから焼畑ではないと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヒエダ地名は 34 ヲ所にある。うち、「冷田」の文字を宛ててあるのは 3 ヲ所。

【家ウラ】

イエウラ。

この小字は、アオキガイト段丘の北側斜面にある。

イエ（家）は「集落」をいい、ウラは「裏手または下の方」を意味する（以上は語源辞典）。

イエウラは、「集落の裏手に当たる北側の土地」をいうか。

全国地図には、イエウラ地名の記載は無い。

【林ノ腰】

ハヤシノコシ。

この小字も、アオキガイト段丘北側の傾斜地の中段にある現在は。水田と住宅になっている。

ハヤシノコシについては、既に『旧龍江村の小字 19』で採りあげているが、そこでは、「樹木が生えている部分の麓の所」としたが、ここには当てはまりそうにもない。

ハヤシはハヤ（逸。急）・シ（接尾語）で、「傾斜地」を意味する（語源辞典）。ハヤシノコシとは、「傾斜地の腰に相当する土地」で、山腹の緩傾斜地をいうのではないだろうか。

【法華堂・法華坂】

ホッケドウ・ホッケザカ。

ホッケドウ小字は、主要地方道が樋ヶ沢川を渡る点の南側の傾斜地とその上の段丘にある。ホッケザカ小字はホッケドウ小字の南側の小さな洞にある。

法華堂は法華三昧を修する堂をい

う。法華坂は法華堂へ登る坂道と思われる。

法華信仰は最澄が天台宗を始めて広め、日蓮がこれを継承発展させた。法華経に説く仏教の修行は、受持・読誦・解説・書写の五種法師で、法華経の信仰行為はこれにもとづいて行われる。法華信仰の特色は法華経を対象とする具象的な経典信仰であることと現世利益への志向が強いことにあるという（民俗大辞典）。

ここに法華堂があったことは確かであるが、どのような信仰が行われていたかは不明である。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ホッケザカ地名は無いが、ホッケドウ地名は 2 ヲ所に挙げられている。

【後ヶ沢】

アトガサワ。

この小字は、樋ヶ沢川左岸の傾斜地とその上の段丘にある。

アトには、「田の余り水を次の田へ流すために畦に設けた切り口」を意味する長野県の方言にもなっているというが、この小字には水田は現在でも無い。そこで、アトとは、「川岸の崩れる傾斜地」（語源辞典）としたい。アトはアタやアツなどと同じように崩壊地名を示すという。

アトガサワとは、「川岸が崩れている谷川」ということになる。

全国地図には、アトガサワ地名は記載されていない。

【和手】

ワデ。

この小字は、樋ヶ沢川左岸のアトガサワ小字の上流側の大きい小字と、御庵沢川にある小さな小字の二カ所にある。

ワデとは何か。上の方をワデということが多いが、ここでは何のことか分からなくなるので、採らない。

ワ(和)は、ワ(回。曲)で「山裾、川などの曲がりくねったあたり」(語源辞典)であろう。テ(手)は、場所を示す接尾語で、タ→テの転は、古くから見られるという(語源辞典)。

ワデとは、「山裾か川が曲がりくねった付近」を意味する。

御庵沢川のワデは山裾が曲がりくねっており、樋ヶ沢川のワデは樋ヶ沢川が大きく曲がっている。

国土地理院の25,000分の1全国地図には、ワデ地名は、中・大字として18カ所に挙げられている。

【六ツ田】

ムツダ。

この小字は、JA関係の施設があったり、近くには龍江地域センターや郵便局などがある。龍江の中心地にある。青木垣外段丘の北端に当たる。

ムツダの解釈も難しい。文字通りであれば、「六枚の田んぼがあった所」になるが、これではおかしい。地名にはなりにくいのではないか。三枚ぐらいいまでならありそうではあるが。

ムツ(六)←動詞ムツク(潰)の連用形が名詞化したもの。ムツクとは「衰弱する」を意味する。これを語源辞典は「湿地」としたが、ここでは、逆に「日照りで衰弱しやすい土地」と考えたい。現在は、公の施設や住宅が多いのであるが、地名発生時には、わずかな湧水をあてにした田作りが行われていたのではないだろうか。現在の羽入田井を引き込む以前のことである。

ムツダとは、「日照りで衰弱しやすい田んぼのある所」としたい。

【ビワ田】

ビワダ。

この小字は、現在の龍江の中心地にあり、ムツダ小字の南東側にある小さな小字で、一部は現在も水田になっている。

既に、今田のビワダ小字については触れている。そこでは二通りの解釈を提示したが、その解釈①がこのビワダには合っていると思われる。すなわち、ビワダとは、「縁辺に水路がある水田」ということになる。近くを羽入田井が流れているので、この井水が通るようになってから名付けられたものと思われる。

【サイノ神】

サイノカミ。

この小字も、現在の龍江の中心地にあつて、ビワダ小字の南東隣にある。清水沢溪谷右岸にある小さな小字である。

サイノカミ小字についても、前に触れている。サイノカミとは、「境界地にあつて、外部から侵入する疫病や悪霊を防ぐ神」で、それは、ここでも変わらない。この小字には、サイノカミが鎮座して、神事も行われてきたのではないだろうか。

この場合の境界になっているのは、清水沢川であろう。

【トヤバ】

この小字は、青木垣外段丘にあつて、JA龍江支所から清水沢川まで連なる細長い小字になっている。

トヤバは、栃木県と下伊那郡の方言になっていて、「網を張って小鳥をとる所」(国語大辞典)であるという。

鳥獣保護法が1947年に成立し、1991年からは、トヤバで使う霞網の販売・頒布・捕獲目的の所持も禁止に

なっている。

それまでは、ツグミ・スズメは食用に、ホオジロ・メジロなどは鑑賞用に捕獲され、現在もなお密猟が絶えないという。

霞網は、谷間や畑など小鳥の通路に設置したという。現在は、住宅地になっているが、トヤバ小字の発生時には、谷の畑か荒地になっていたものと思われる。

三穂のトヤ（鳥屋）もそうであったが、北向きの傾斜地にあつて、集落よりも上の方に霞網が張られたという。

国土地理院の全国地図には、トヤバ地名は、2カ所にしか無い。

【タナダ】

この小字は、県道米川・飯田線沿いにあり、オキ・ソトガイト小字に挟まれている。

タナダは方言かと思っていたが、共通語だという。タナダ（棚田）とは、「山腹などの傾斜地に作られた段丘をなす水田」（国語大辞典）という。膳田ともいう。

タナダ小字は、現在でも半分ほどは水田になっており、果樹園になっているところもある。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として11カ所が挙げられている。

【外垣外】

ソトガイト。

この小字も県道に沿っており、タナダ小字の南～東隣にある。

ソトガイトも分かりにくい地名の一つ。ソトガイトとは、字面で考えれば、「境界外にあった屋敷跡」となるが、「境界外」がはっきりしない。そこで、ソトガイトとは「中心部分から離れた方にある住居跡」としておきたい。もっとすっきりした解釈が出てく

ることに期待したい。

なお全国地図には、ソトガイト地名は載っていない。

【ドジョウ作】

ドジョウツクリ。

この小字は、龍江地域センターの南東側にあり、オキ・インデン・ソトガイト・イヌコハラ・ハンノキなどの小字に囲まれている。

現在は水田と桑畑になっている。

ドジョウツクリが何を意味しているのか、解釈は難しい。苦し紛れに語源辞典を参考にしながら、二説を挙げておきたい。

①ドジョウ←ドバ（土場）←ドブ（泥）と転じたもので、「湿地」をいう。ドジョウツクリとは、「湿地ながら耕作している所」をいう。現在でも田んぼのあることが傍証となるか。

②ドジョウ←ドバ（土場）の転で、「川を流し下す材木の受け渡しをする場所」である。長野県飯田ほかで使われている用語という。ツクリは動詞ツク（築）の連用形で名詞化したもので「埋め立て地」をいう。リは場所を示す接尾語。ドジョウツクリとは、「山から切り出した材木を川で流すために、一時、積んでおく埋め立て地」を意味する。果たして埋め立てた場所かどうかは不明であるが、清水沢川は遠くはない。管流しで材木を流したものと思われる。先に、カワカリ・キアゲバ小字をみてきたので、分かり易いと思っている。

ドジョウツクリ地名は、全国地図には一件も記載されていない。

【沖】

オキ。

この小字には龍江公民館があり、県道米川・飯田線が貫いている。

オキとは、一般的には「同じ平面で、遠く離れたほうをいう」(国語大辞典)らしいが、常識的には海辺で使われていることは知っている。しかし、山に囲まれたこの地では通用しない。

ここでは、オキとは、新潟・長野・伊勢・岡山・愛媛の方言だといわれているが、「田畑の広い所」を意味するものとしておきたい。やや曖昧なところもあるが、現在の所、これ以外には考えられない。

国土地理院の 25,000 分の 1 全国地図には、95 カ所ものオキ地名が、中・大字として記載されている。

【深田】

フカダ。

この小字は、県道の東側でオキ小字の東隣にある。龍江公民館の半分ぐらひは、この小字内にある。周辺には、ウメノキ・オキ・インデン・キヨシの小字がある。

フカダとは、「泥の深い田」(国語大辞典)である。湧水が多い場所で、地名発生時には沼田であったと思われる。埋め立てたり、排水工事などを施して、建物を建てることのできるようになったのだろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、フカダ地名が 15 カ所に記載されており、「深田」地名は 25 カ所にもなっている。フカタ・フケタなどの呼び名が入ってくるので多くなっている。

【梅ノ木】

ウメノキ。

この小字は、樋ヶ沢川左岸の川から少し離れたところにある。龍江郵便局や消防署龍江分署のある、ほぼ平坦な場所と緩傾斜地とからなっている。

塩田沢川付近にもウメノキ小字が

あり、ウメノキの由来について、二説を挙げた(『旧龍江村の小字 16』)。**①**梅の木説と**②**土石流説である。

ここは、犬子原の洞に土石流が発生しても、届かないのではないかと思うほど離れているので、**②**の土石流説ではないであろう。

とすると、ウメノキとは、梅の木に因む小字名とせざるをいないが、どうであろうか。

【イン田】

インデン。

この小字は、フカダ小字の東隣にあり、フカダ・キヨシ・ハンノキ・ドジョウツクリ・オキなどの小字に囲まれている。現在も水田になっており、羽入田井が中を流れている。

インデン=オンデン(隠田)で、「農民がその存在を隠して耕作し、年貢その他の租税を納めない田地」(国語大辞典)をいう。律令時代以降の各時代を通して存在していた隠し田である。

全国地図には、インデン地名が、中・大字として一カ所にしか記載がない。オンデン地名もない。これは意外で、中・大字になりにくい地名なのかもしれない。

【ハンノ木・半ノ木】

ハンノキ。

これらの小字は、県道米川・飯田線と県道天竜峡停車場下平線の間の中頃にある。キヨシ・インデン・ドジョウツクリ・イヌコハラ・ハニユウダハラの小字に囲まれている。「半ノ木」小字は、「ハンノ木」小字に抱えられるように位置している。

現在は、住宅や桑園・果樹園などがある。

ハンノキは、「ハンノキがあった所」の意か。ハンノキ=ハリノキ(榛木)

は落葉高木で、各地の山野の湿った所に生えていたという。稲掛け用にしたり護岸用に植えたというが、ここでは当てはまらない。

ナンオキは根粒菌と共生しているので、開墾地または開墾予定地にも植えられることもあったとういので、こちらのハンノキではないだろうか。この地に鍬が入る頃に発生した地名と思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ハンノキ地名は6件が挙げられている。

【喜代志】

キヨシ。

この小字は、羽入田農家組合の施設のある所で、二つの県道の間にある。周辺には、ウメノキ・フカダ・インデン・ハンノキ・ハニュウダハラの小字がある。

キ(喜)←キ(木)で、美称名に切り替えたものと思われる。キ(木)は樹木のこと。ヨシ(代志)には、語源辞典によれば、二つの解釈が可能である。

①ヨシ(代志)も美称名であるが、葎に関わってのことと思われるが、「湿地」を意味することが多いという。キヨシとは、「樹木が生えている湿地」をいうことになる。

②ヨシは動詞ヨス(寄)から転じた語で、「山寄りの地」をいう。キヨシとは、「樹木が生えている段丘の麓」を意味することになる。

国土地理院の全国地図には、キヨシという瑞祥地名は、一件も無い。

【狐洞】

キツネボラ。

この小字は、県道米川・飯田線の東側にあり、樋ヶ沢川右岸の南向きの傾

斜地になっている。

キツネボラとは何か。解釈は二つ。
①キツネボラとは、素直に解釈して、「狐が住んでいる小さな谷の斜面」ということになる。この斜面は樋ヶ沢川に面する傾斜地である。

②キツネ←キツレ←クズレ(崩)と転じた語で、崩壊地形を示す(語源辞典)。キツネボラとは、「崩壊面のある小さな谷の斜面」となる。

全国地図には、キツネボラ地名は無いが、キツネボラ地名は1カ所にある。

【小沢】

コザワ。

この小字は、龍江保育園のある傾斜地にあつて、ワデ・ラントウバ・ハマイバ・イッポンギハラなどの小字に囲まれている。現在は桑園、果樹園、畑地、一部に水田がある。

コザワとは何か。字面では「小さな谷」であるが、“小さい”の意味がよくわからないので、語源辞典によって二説を挙げる。

①コ(小)はコ(木)で、樹木を示す。コザワとは、「樹木の繁る小さな谷」をいう。

②コは字音コウ(高)の約で、高い所を意味する。コザワとは、「高い所にある小さな谷」か。洞がかなり高い所にまで食い込んでいて、保育園の敷地が段丘の突出部のような地形になっている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、コザワ地名は32カ所に、「小沢」地名は64カ所に記載されている。

【らんとうば】

ラントウバ。

この小字は二カ所にある。大きい方は、龍江保育園のある段丘の頂上付近

にあり、小さい方は保育園の下方の傾斜地にある。

辞典類によれば、ラントウバは卵頭場または蘭塔場・蘭塔場などの字を宛てて、「墓地、火葬場、石碑」などを示す、としている。元々は卵形の墓石をいうらしい。

しかし、今田のラントウバには、小字区域外の西側に墓地があり、石碑が一基あるだけ。

国土地理院の全国地図には、なぜかラントウバ地名の記載がない。

【ハマイバ・濱井場】

ハマイバ。

この小字は二カ所、今田に「ハマイバ」と、石林（尾林）に「濱井場」がある。

今田のハマイバは、市立龍江保育園のある丘陵地からその北側にある沢を含めた広い小字となっている。周辺には、サワ、オザワ、ナギジリ、ラントウバ、フタゴイリなどの小字がある。

尾林の濱井場は、小さな小字で、尾林南沢川の支流が合流し、道路の交差点にもなっている。ヲチ、モチダ、ケンチョウ、ナガドオリ、ハンノタなどの小字が取り巻いている。

ハマ（浜）につられて、海辺でもないこんな山中にあるのはどうしてだろうか。というのが最初の感想であった。

ハマイバとは何を意味しているのであろうか。辞書類を参考にして、二説を挙げる。

①ハマ（浜）は、「海または湖に沿った平地」（広辞苑）の意である。イはキ（井）で流水、つまり川のこと。バは場所。合わせると、ハマイバと「川に沿った平坦地」を意味する。尾林の濱井場小字にはぴったりだが、今田の

ハマイバ小字は広いので当てはまる部分と外れる部分があるが小字名としては成立する。なお、「海または湖」を「川。流水」に読み替えたが、許容範囲と考えている。

②ハマはハマ（岨）で、神奈川・山梨・岐阜などの方言にもあり、「土手。崖。河床の急に低くなっている所」をいう（国語大辞典）。イはキ（井）で川のこと。

以上から、ハマイバとは「川の傍で、土手や崖のある所」か。尾林のハマイバにはほぼ当てはまるが、今田のハマイバにはやや緩いか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ハマイバ地名は13カ所に記載されている。

【金治ヶ原】

地元では、キジガハラと呼んでいる。キンジガハラとはいわないようだ。

この小字は、御庵沢川上流の左岸で、池ノ平丘陵に登る道路の北側傾斜地にあって、コガネノホトケ・コガネ・ナギジリの小字に囲まれている。

キジガハラとは何か。素直に読めば、「雉が多いハラ」になるが、この小字がある所は急傾斜地だから、普通の原っぱではない。ハラ（腹）で、「中腹」を意味するものと思われる。キジガハラとは、「雉が多い斜面の中腹」ではないだろうか。

別の解釈も挙げておきたい。キジはキジシ（木地師）のことで、キジガハラとは、「木地師が住んでいた斜面の中腹」というのも考えられる。

全国地図には、キジガハラ地名は無い。

【ナギシリ】

この小字は、池ノ平丘陵の一部を含む、その傾斜地にある広い小字となっ

ている。

ナギ（薙）は、「山で、薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）。シリ（尻）は末端部をいう。

ナギシリとは、「崩壊地の麓の部分がある土地」とうことか。この小字を保育園から池ノ平丘陵に登る道路が通っており、その南側に崩壊した洞があって、西隣のラントウバ小字まで押し出している。

全国地図にはナギシリ地名は無い。

【後田】

ウシロダ。

この小字は御庵沢川の上流部にある洞の一部で、カキノ小字の丘陵地の北西側傾斜地になる。

ウシロ（後）は、「正面からは見えない部分。物の後ろ側、向こう側。かげ」（国語大辞典）であるが、どちらが正面なのかわからない。ただ、この御庵沢川の洞に入れば見えるが、この洞を出れば、どちらか見ても蔭になってウシロダは見えないだろう。ダ（田）は、現在は水田になっていないが、棚田の形跡もあるので、地名発生時には、田んぼがあったと考えることもできる。

ウシロダ（後田）とは、「周辺からは見えにくい洞の、日陰になりやすい北西側斜面にある水田あるいは土地」ということになる。

国土地理院の全国地図には、ウシロダ地名は、32件が中・大字として記載されている。

【柿の】

カキノ。

この小字は、御庵沢川左岸の丘陵地の一つの頂上付近にある。

カキには屋敷の敷地を意味することもあるが、ここにはその形跡はない

ので、カケ（欠）と同じく崖を意味するものと思われる。動詞カク（欠）の連用形で名詞化した語である。

以上から、カキノとは、「崩壊した場所があちこちにある野原」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カキノ地名は7カ所に記載されている。宛てられている漢字は、すべて「柿野」となっている。

【筏山】

イカダヤマ。

この小字は、県道天竜峡停車場下平線に接しており、清水沢川に合流する番入寺沢川の最上流部にある。

イカダヤマとは何か。語源辞典によれば、解釈は二通り。

①イカダは筏のことで、イカダヤマとは「筏に組む材木を伐採していた山」ということになる。番入寺沢川をせき止めて、適当な長さに切った材木を樽木に加工する場所にまで流したと思われる。下流には、ドジョウツクリ小字もある。

②イカダはイカ（巖）・ダ（処）で、イカダとは、「険しい山」をいう。崩壊地はあるが、険しいとまでいえるかどうか。

全国地図には、イカダヤマ地名は無い。

【上垣外】

カミカイト。

樋ヶ沢川上流部にある小字で、広い面積を持つ。樋ヶ沢川周辺には、一部に水田はあるし、かつては水田であったと思われる荒れ地はあるが、大部分は山地となっている傾斜地である。

この地方のカイトは、ほとんどが「住居跡」を表してきたが、このカイトは今までのとは異なっている。

このカイト（垣外）は「居住地の垣の外」であるのは当然としても、これだけでは小字名にはなりにくいのではないだろうか。

下伊那郡の方言で、カイトには「畑」の意味がある（国語大辞典）。畑を耕作地と置き換えて次のように解釈した。

カミカイトとは「上流部にある居住地を離れた耕作地」ではないだろうか。

【白樺】

シラカバ。

この小字は3カ所にある。一つは三林丘陵の北西側斜面にある小さな小字で、樋ヶ沢川の上流部左岸にあり、二つ目は樋ヶ沢川支流の最上流部にある。三つ目は、御庵沢川の最上流部となっている。

これらの小字は、現在は針葉樹林帯になっていて、白樺が目立ったことがあったとは思われない。

では、シラカバとは何を意味しているのか。主に語源辞典に依りながら仮説を三つ。

①シラ（白）はシル（汁）に通じ、湿地を意味する。カバ（樺）はカマの転で崩壊地をいう。シラカバとは、「川が流れ湧水もある崩壊地」という。

②シラは動詞シラケル（白）から「崩壊地形」をいう。シラケルには、「隠されていたものが露見する」意味があるからだという。カバはカブ（傾）の転で「傾斜地」を意味する。シラカバとは、「崩れのある傾斜地」を意味するか。

③シラ（白）は白色のこと。カバ←カブ（傾）で傾斜地をいう。シラカバとは、「白い色をした傾斜地」か。所々に領家帯花崗岩類の露頭もみえるためと思われる。

国土地理院の全国地図には、シラカバ地名は、中・大字として4カ所に記載がある。

【法白】

ハウノシロ。

この小字は、樋ヶ沢川支流の最上流部にある。棚田状の湿地と頂上部を持つ丘で構成されている。

ハウノシロも難し地名で、全国地図にも記載されていない地名である。

ハウノシロとは何を意味するのか。これも語源辞典に添って、二通りの解釈を挙げる。

①ハウ（法）は動詞ホホク（蓬）の語幹から転じた語で、「ほつれ乱れた様子」から崩壊地形をいう。ノは助詞。シロ（白）はシロ（代）で、田んぼのこと。ハウノシロとは、「崩れ地のある水田」を意味する。現在は荒地になっているが、棚田状の湿地帯があり、地名発生当時には、湧水を利用した水田耕作があったことを思わせる。

②ハウは動詞ホホム（含）の語幹から「山などに包み込まれたような地形」をいう。シロは赤石山地では「緩やかな傾斜地」をいう。ハウノシロとは、「山に囲まれた緩やかな傾斜地となっている湿地」を意味するか。

【子ノ神】

ネノカミ。

この小字は、樋ヶ沢川上流部の傾斜地を含む丘陵で、現在も洞は水田担っている所が多い。

ネノカミ（子ノ神）について、民俗大辞典は次のように説明している。

十二支の北方に当たる子を神格化したもの。子の権現ともいう。関東地方では子の神をまつる鎮守や小祠、子の神の神号を刻んだ石造物などが多い。子の権現は天台系修験道と深い関

係がある。火伏や足腰の病に効験があるとして、関東地方では、足腰の病に効く権現として信仰されている。

今田のネノカミ小字には、それらしい痕跡は見当たらないが、修験道の道場があった可能性はある。

国土地理院の 25,000 分の 1 全国地図には、5 ヲ所に中・大字として記載されている。

【二ツ沢】

フタツザワ。

この小字は、マムシノアラシ小字とナギシリ小字に囲まれていて、樋ヶ沢川の支流と御庵沢川の支流に繋がる場所にある。

フタツザワとは、素直に解釈すれば、「二つの沢に挟まれた傾斜地」となる。二つの沢というのは、樋ヶ沢川と御庵沢川ではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、二カ所にフタツザワ地名が、中・大字として記載されている。

【まむしあらし】

マムシアラシ。

この小字も、御庵沢川と樋ヶ沢川の間丘陵地にある広い小字である。

マムシとは、蛇の蝮のことで、これ以外には考えられない。つまり「蝮の多い所」をいう。

アラシには、三つの解釈がある。

①アラシとは「伐り出した材木を斜面から落とす」（国語大辞典）ことである。岩手県、静岡県庵原郡、長野県南部の方言であるという。マムシアラシとは、「蝮の多い材木落とし場」ということになるか。

②アラシとは「焼畑」のこと。そのまま放置しておく年もあり、そのことをアラシと呼んでいたらしい。マムシアラシとは、「蝮の多い焼畑」か。

③アラシとは、「風の強い所」をいう。マムシアラシとは、「蝮が多く風の強い所」を意味する。この小字には巽（南東）の風を受ける斜面もある。

全国地図には、マムシアラシ地名は載っていない。

【樋ヶ沢】

トヨガサワ。

この小字は、当然のことながら、樋ヶ沢川の両岸に広がる、大きな小字になっている。

トヨはトイのこと。伊那谷の方言であろう。トイ（樋）は、古くは人工のものに限らず、「水の流れる所」（語源辞典）を指していたらしい。

この小字で、樋ヶ沢川から井水を引いている様子はないので、ここのトイは樋ヶ沢川という川のことを指している。この小字で複数の支流が合流している、ということを表しているように思える。

トヨガサワとは、「複数の支流が合流する所」を意味しているものと思われる。

国土地理院の全国地図には、トヨガサワ地名は、中・大字として、一カ所に記載されている。

【白根ヶ沢】

シラネガサワ。

この小字は、北側の樋ヶ沢川から南側の清水沢川の間丘陵地、中を県道天竜峡停車場下平線が通っている。

シラネガサワとは何か。二説がある。①シラネ（白根）は、シラネ（白嶺）で、「白色の岩のある峯」（語源辞典）をいう。領家帯花崗岩がある所だから、白い岩がある。そのことを示しているのであろう。シラネガサワとは、「頂上部に白い岩のある丘陵にある沢」か。現在、白は岩は見えないが、地名発生

時にはあったのかもしれない。

②シラ←シロ←動詞シロム（窄）の語幹で、「水がしみ出る」を意味する。ネ（根）は麓とか裾のこと。シラネガサワとは、「傾斜地の裾の部分で、水がしみ出ている沢」をいう。

全国地図にはシラネガサワ地名は記載がない。

【間松】

アイダマツ。

この小字は、シラネガサワ小字の東側にあり、北はマムシノアラシ小字に、南はイヌコハラ小字に接している。

アイダは「何かの間」であるが、何かは、沢を指していると思われる。即ち、北側の樋ヶ沢川と南側の清水沢川である。

マツはマタ（俣、股）の転で、股状の地形になっていることをいう。あるいは、マツハル（纏）から、「巻いたような地形」（以上は語源辞典）を意味することも考えられる。

以上から、アイダマツとは、二通りの解釈を挙げる。

①アイダマツとは、「二つの沢に挟まれていて、尾根が二股になっている丘陵」をいう。地形はその通りになっているが、どこにでもある形ではある。

②アイダマツとは、「二つの沢に挟まれている、曲がりくねった丘陵」を意味する。等高線を見ると、確かに曲がりくねっていることがわかるが、これも一般的でありすぎるだろうか。

全国地図には、アイダマツ地名は一つも無い。

【三林】

サンバヤシ。

この小字は丘陵地で、北の樋ヶ沢川と南の清水沢川に挟まれている。また、イカダヤマ小字を取り込んでいる。

サンバヤシとは何を意味しているのか。これも語源辞典によって、三通りの解釈を示す。

①サンはサミの撥音便化した語で、サミ←スサミ（荒）の上略形で、「淋しい場所」を意味する。ハヤシは「樹木の生えている所」。サンバヤシとは、「樹木の生えている淋しい所」をいう。

②サン←サミ←ハサム（挟）の上略。「樋ヶ沢川と清水沢川の二つの沢に挟まれた丘陵」をいう。サンバヤシとは、「二つの沢に挟まれて、樹木の生えている丘陵地」をいうか。

③サン←サンミで、「三昧」の誤記によるか。サンバヤシとは、「樹木の生えている墓地あるいは火葬場」となる。村誌ではサンバヤシ小字は、「墳墓に関する地名」に分類されているのは、この解釈によるものと思われる。しかし、現在、この地に墓地は無い。

全国地図には、サンバヤシ地名は載っていない。しかし、ミバヤシ（三林）は一カ所にある。

【番入寺】

バンニュウジ。

この小字があるのは、番入寺インダストリアルパークのある所。

バンニュウジとは何か。ここでも、敢えて二説を挙げる。

①村誌によれば、バンニュウジ小字には、「もともと晩如露寺というお寺のあった所らしい」とある。北の方には谷を二つ越えてネノカミ小字があり、天台系修験道と深い関わりがあるといわれている。天台系の寺院か。

②バンはバリ（墾）の撥音便化した語で、ニュウはニ（丹）・ウ（生）で、「赤土」のこと（語源辞典）。ジはジ（地）で場所をいう。合わせると、バンニュウジとは、「赤土の開墾地」を

意味する。バンニュウジ（番入寺）小字のある所は、「面の上位は赤色風化した2m以上の厚さの堆積層」（村誌）になっているという。

国土地理院の全国地図には、バンニュウジ地名は、一つも記載されていない。

【足ヶ洞】

アシガホラ。

この小字は二カ所にある。一つは、バンニュウジ小字の西隣にあつて、清水沢川の支流が谷をつくっている。番入寺丘陵と沢からなる小字である。もう一つは、三林丘陵と樋ヶ沢川の谷よりなる小字である。双方が近いので、同じ意味であろうと思われる。

アシガホラとは何を意味するのか。解釈は二通り。

①アシはアシ（悪）で、歩いて入りにくい所をいい、アシガホラとは、「入っていくことの困難な小さな谷のある土地」か。谷には急傾斜地になっているところがある。

②アシ←アズが転じた語で、「がけの崩れた所」（広辞苑）をいう。アシガホラとは、「崩れた崖のある小さな谷」となる。

全国地図には、アシガホラ地名は載っていない。

【小手ヶ入】

コテガイリ。

この小字は、清水沢川の支流である番入寺沢川の上流部にあつて、イヤマ、ムジナイワ・サンバヤシ、アシガホラ、バンニュウジなどの小字に囲まれている。現在は、小手ヶ入堤があるが、水田は無い。

コテガイリとは何か。解釈は二通り。

①コテ←クテ（湫）で、愛知県の方言で、「低湿な土地。沼などのように水

草の生えた地」（広辞苑）をいう。コテガイリとは、「湿地の上流部」をいう。番入寺沢川の狭窄部の上流は、小手ヶ入堤もあり低湿部になっている。②コテ←コトで、信州と上州の方言で、「岩石累積して通過困難な谷」（語源辞典）をいう。コテガイリとは、「岩石累積して通行困難な狭窄部の上流部」を意味する。

全国地図には、コテガイリ地名は無いが、コテ地名は一件ある。

【貉岩】

ムジナイワ。

この小字は、三林丘陵の南西側の尾根と番入寺沢川の傾斜地にある。周辺には、イヌコハラ、イノヤマ、コテガイリ、サンバヤシなどの小字がある。

ムジナイワとは何か。素直に解釈すれば、「形が穴熊か狸に似た岩のある所」となるが、果たして、そんな岩があるかどうか。

念のために、語源辞典によって、別の解釈を二つ挙げておきたい。

①ムジは、動詞ムジルの語幹で「川などの曲流点」をいう。ナは場所を表す古語。イワは傾斜地をいう。ムジナイワとは、「番入寺沢川が曲流している傾斜地」をいう。難点は、東北地方を中心にした方言であること、曲流点がムジナイワ小字と少し離れていることか。

②ムジ←動詞ムシル（筆）の連用形が名詞化した語で、崩壊地を意味する。ナは場所を表す接尾語。イワはやはり「傾斜地」とする。ムジナイワとは、「崩壊地のある傾斜地」をいうか。

全国地図には、ムジナイワ地名も「貉岩」地名も記載されていない。

【川原沢】

カワラザワ。

この小字は、県道米川・飯田線の清水沢橋付近にある。北辺を清水沢川が流れ、斜面の中腹を中原井水が西に向かっていている。

カワラザワとは、「川が流れている小さな谷」をいう。

【犬子原】

イヌコハラ。

この小字は、県道米川・飯田線から清水沢川溪谷を遡行して、三林丘陵に達する、長い小字になっている。

イヌコハラは何を意味しているのか。

イヌコ（犬子）は、キ（井）・ヌ（ノの音交替）・コ（接尾語で「処」）で、「川のある所」を意味する（語源辞典）。ハラ（原）はハラ（腹）で、「物の中央部の広いところ。山の頂と麓の中間の部分など、人体の腹にあたる部分とみなしている語」（国語大辞典）である。イヌコハラとは、「川が流れており、山の中腹にあたる緩傾斜地のあるところ」であろう。

現在、この長い洞は居住地、果樹園、水田や荒れ地となっている。急傾斜地は山林である。

全国地図にはイヌコハラ地名は載っていない。

【清水原・清水入】

シミズハラ・シミズイリ。

これらの小字は、清水沢川（清水入川）に沿って長く延びる。特にシミズハラ小字は、県道米川・飯田線を跨ぐ広い小字になっている。

シミズと名付けられて川には、清水入川・清水沢川それに清水川があって、混乱しやすいが、飯田市の2,500分の1地図を基本にしている。

シミズハラ（清水原）とは、「清水沢川に添った平坦地もある溪谷」を意

味するものと思われる。清水沢川と清水原のどちらが先に名付けられていたのかは、わからない。

飯田市の2,500分の1地図を見ると、清水川が番入寺沢川と合流して清水沢川になる、その合流点が、シミズイリ小字にある。

イル（入）は「合流する」として、シミズイリとは、「番入寺沢川に清水川が合流して、清水沢川になる場所」と考えたい。

シミズイリとは、「清水沢川の上流部」を意味すると考えることもできるが、ここでは、先の解釈にしたい。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シミズハラ地名は6カ所に記載があるが、シミズイリ地名は無い。

【井山】

イノヤマ。

この小字は、清水沢川上流の清水川右岸の小溪谷にある。

イノヤマとは何か。これも語源辞典に依って、三通りの解釈を示す。

①イノヤマ（井山）とは、「湧水の多い小溪谷」を意味する。これらの水を集めた清水沢川からは、多くの井水が引かれている。イはキ（井）で、「流水」をいう。

②イ（井）←イ（斎）で、「神聖な所」を表す。イノヤマとは、「多くの神々が祀られている神聖な場所のあるところ」をいう。イノヤマ小字の中には四鬼峠があつて、大きな磐座の周辺に40数体の石碑が祀られている。あるいは、この小字は、バンニウジ（番入寺）小字に接しており、そのことが、神聖な場所に繋がっていることも考えられる。

③イ（井）←イ（猪）で、イノヤマとは、「猪の多い山」か。この解釈であ

る可能性は小さい。一般的でありすぎて、地名にはなりにくい。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、イノヤマ地名は5カ所に挙げられている。

【垣外田】

カイトダ。

この小字は、番入寺丘陵とその南側の小さな洞から成り立つ。現在は棚田状の荒地になっているが、かつては棚田であった可能性は高い。

カイトダとは「丘陵の上には住居跡があって、洞には水田のあった所」としておきたい。その住居は、番入寺関係の僧坊であった可能性もある。

全国地図には、カイトダ地名は載っていない。

【さるくら】

サルクラ。

清水沢川に沿った長く大きな小字である。

サルクラとは「サル・クラ（劔）と類義語を重ねた地」（語源辞典）であるという。

サルはサラ・サリ・サレなどと同じで、サル（去。曝）から、崖地をいう。クラは動詞クル（劔）の連用形が名詞化した語で「断崖とか山の岩の多いところ」をいう。

国土地理院の全国地図には、サルクラ地名は中・大字として5カ所に挙げられている。宛てられている漢字は、すべて「猿倉」となっている。

【中原】

ナカハラ。

この小字は、中原部落の東野外れにある。清水沢川が流れており、井水も通っている。墓地の多いところである。

ナカハラとは、一般的には中心部をいうが、ここでは縁辺になる。隣のク

ヌギダイラ小字に中心部があるが、かつては、そこまでがナカハラ小字であった可能性はある。

しかし、現在はもっと狭い谷の周辺部になるので、それに合うように解釈したい。

ナカハラとは、「丘陵の二つの尾根に挟まれた小さな谷の中腹部」ということになろうか。怪しげな解釈ではある。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ナカハラ地名は125カ所に記載され、「中原」地名になると、220カ所にものぼる。

【立ヶ洞】

テタガホラ。

この小字は県道米川・飯田線が通っており、尾根の高い所と清水沢川支流の谷からなる。周辺には、クヌギダイラ・ナカハラ・カワラザワ・サルクラ・ホリマワシ・アシノグチの小字に囲まれている。

タテガホラとは、「低地に臨んだ丘陵の高みにある洞」をいうか。テテは動詞タツ（立）の連用形で、台地などの高くなった所をいう（語源辞典）。

全国地図には、タテガホラ地名は無い。

【芦ノ口】

アシノクチ。

この小字は、県道米川・飯田線に接しており、クヌギダイラ・ホリマワシ・サルクラ・シマバラの小字に囲まれている。

アシ（芦）は、アス・アズ（坍）の転で、崩崖をいう（語源辞典）。クチ（口）は入口のこと。

アシノクチとは、「奥にある崖の崩れた所の手前の土地」を意味するか。崩崖は上流側の東隣のサルクラ小字

にある。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、アシノクチ地名は 10 件が中・大字として挙げられている。

【堀廻】

ホリマワシ。

この小字は、堀廻丘陵の北西端に当たるが、現在の堀廻生活改善センターの位置から判断して、堀廻中字はもう少し広い範囲になっているものと思われる。

ホリ（堀）は、「地を長く掘って水を通した所」（国語大辞典）をいう。この地域の方言ではないが、「池」もホリと呼んでいる所がある。

マワシ（廻）は、動詞マワス（廻）の連用形が名詞化した語で、「広く行き渡らせる。すみずみまで及ぼす」（国語大辞典）を意味する。

ホリマワシとは、「水田の用水路をすみずみまで行き渡らせている所」となる。この付近には、湧水を集めた堤や紅葉川から取り入れた井水が流れている。

全国地図にはホリマワシ地名は、中・大字として 1 件だけ記載がある。25,000 分の 1 の「時又」にある。

【一本松】

イッポンマツ。

この小字は、ホリマワシ小字に囲まれていて、堀廻丘陵の峯の一つに近いところにある。

イッポンマツとは、付近では目印になるような大きな松のあった所であろう。

松は瑞祥地名でもあるので、地名に使われることが多く、国土地理院の全国地図でも、中・大字として、67 カ所にも挙げられている。

【穴洞】

アナボラ。

この小字は、清水川上流部の南側傾斜地にあるが、同じ傾斜地にあるサルクラ小字の傾斜地上方に当たる。

アナ（穴）は、「三方を丘陵に囲まれた地」（語源辞典）をいう。

アナボラとは、「三方を丘陵で囲まれた、小さな溪谷」を意味する。アナボラには、谷が入り組んでいて、三方に尾根があり、穴所に囲まれた谷がある。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、3 カ所に記載がある。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は、堀廻丘陵と紅葉川を含む広い小字と紅葉川添いの小さな小字がある。

いずれも、紅葉川から引いた井水が流れており、その取り入れ口にも近い所に位置している。

イノクチとは、「井水の取り入れ口や井水に近いところ」を意味する。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として、35 カ所に記載されている。

【島原】

シマバラ。

この小字は、堀廻丘陵の一つ下の段丘にある、細長い小字である。ここに堀廻生活改善センターがある。

シマは、周囲を川などに囲まれた陸地をいうか。この小字の周りには、紅葉川から引いた井水や湧水などの川がある。このことを指していると思われる。

ハラは「平らで広いところ」（国語大辞典）をいう。ここには島原丘陵ともいべき広い平坦地がある。

シマバラとは、「周辺に井水や湧水が流れている、丘陵で広い平坦地のあ

るところ」ということになろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シマバラ地名が4カ所に。

【田ノ入】

タノイリ。

この小字は、大平沢川と紅葉川の間
の広大な地域に広がる。水田もあるが
果樹園も広い。また紅葉川溪谷は急斜
面になっている。

タノイリとは、「奥まった所に水田
がある地域」であろうか。大きな堤の
下流側や紅葉川流域の谷の広い所には、
今でも水田が作られている。

国土地理院の全国地図には、中・大字
として、9カ所に、タノイリ地名が
挙げられている。

【柵平】

クヌギダイラ。

この小字は、北は清水沢川から芦口
沢川と大平沢川を越えて、南は紅葉川
に到る広大な面積を有する小字である。
北側には、中原部落集会所がある。

クヌギダイラとは、何を意味している
のか。

クヌギ←クネ・キ(処)で、クネは
動詞クネル(曲)の語幹(語源辞典)。
「曲がりくねっている」状態を示す。
クヌギは、「尾根や谷が曲がりくねっ
ていること」を意味する。

ダイラ=タイラで、本来なら、高
低・凹凸のないさま、傾斜や起伏のない
さまをいうが、ここでは、「山中に
ある平らな所」(国語大辞典)をいう。

クヌギダイラとは、「尾根や谷が曲
がりくねった所で、その間に平らな所
もある地域」を意味するものと思われ
る。

国土地理院の25,000分の1全国地
図には、クヌギダイラ地名が、中・大
字として、8カ所に記載されている。

【畑中】

ハタナカ。

この小字は、丘陵の頂上部付近にあ
り、クヌギダイラ・ハラ・マルヤマの
小字に囲まれている。

ハタナカとは、文字通り、「周辺に
畑のある所で、畑地の中央部」を意味
するものと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大
字として、ハタナカ地名は17カ所に
あるが、「畑中」地名は69カ所と多
くなる。ハタケナカの呼び方が加わ
るためである。

【原】

ハラ。

この小字は、清水沢川左岸に丘陵の
最頂上部にあり、北には県道天竜峡停
車場・下平線を、西には主要地方道飯
田・富山・佐久間線を見下ろす。

ハラ(原)は、これも文字通り、「平
らで広い土地」(広辞苑)をいう。

国土地理院の25,000分の1全国地
図には、中・大字として、ハラ地名は
450カ所と非常に多い。「原」地名と
なると、519カ所にもなる。これは、
ハルの呼び方が加わるためである。

【福沢】

フクザワ。

この小字は、清水沢川右岸で県道天
竜峡停車場・下平線と、地方道飯田・
富山・佐久間線が交叉する所にある。

フクは動詞フクル(脹)の語幹で、
「河流、山裾などの脹らんだ所」(語
源辞典)を意味する。

フクザワとは何か。二説を挙げる。
①フクザワとは、「清水沢川が右岸側
へ脹らんでいる小さな谷のある所」を
いう。

②フクザワとは、「東側にある丘陵の
山裾が脹らんで張り出している沢」と

もいえる。

全国地図にはフクザワ地名は 15 件。

【大田・下大田】

オオタ・シモオオタ。

これらの小字は、天竜川沿いに並んでおり、オオタ小字は清水沢川左岸に長く伸びている。

オオタとは何か。二説を挙げる。

①オオタとは、「面積の大きな田んぼのある所」か。語源辞典には、「一説に、田制で太閤検地以前一反の 2/3 以上のものをいった」とある。ここには現在、一反歩以上はあると思われる水田はある。

②オオタ←アフ (アブ)・タ (処) と転じた語で、アバと同じ、崩壊地をいう (語源辞典)。オオタとは、「崩れた崖のある所」となる。天竜川岸にも、清水沢川の岸边にも崩壊地はある。

シモオオタは文字通り、「オオタ小字の天竜川の下流側にある土地」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、オオタ地名は 162 ヲ所が記録されているし、シモオオタ地名でも 8 ヲ所もある。

【常浪】

トコナミ。

この小字は、天竜川左岸の姑射橋から下流の部分から、東は地方道飯田・富山・佐久間線にまでかかる広い地域にわたる。

トコナミ=トコナメで、解釈を二つ。

①トコは、「高くなって平らな区域」 (語源辞典) をいう。ナメは動詞ナメル (滑) の連用形が名詞化した語で、「緩傾斜地」 (語源辞典) という。トコナメとは、「少し高くなっていて平らの区域もある、緩傾斜地」を意味する。

②トコ (常)・ナメ (滑) で、「いつも岩の上を天竜川が流れている所」となる。天竜川に接しているのは一部分なので、説得力はないかもしれない。

国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字として、16 ヲ所の記載がある。

【つるし】

ツルシ。

姑射橋から北東にのびる県道天竜峡停車場・下平線に沿った南東側の高地にある。

ツルシもまた、難解である。怪しげであるが、仮説を提示したい。

ツルシは動詞ツルス (吊) の連用形が名詞化した語で、「鐘などを吊したような地形になっている所」をいう。北側を竜頭に相当する部分と見なせば、鐘に見えないだろうか。

不安はあるが、残念ながら、この他には浮かんでこない。

国土地理院の全国地図には、ツルシ地名は 9 ヲ所にあるが、「都留市」が 6 ヲ所となっている。

【宮ノ平】

ミヤノダイラ。

この小字は、龍江 3 区公民館・宮の平集会所・大田上集会所を含む広い地域になっている。

ダイラは、「山中にある平らな所」 (国語大辞典) をいう。ミヤは神明神社のこと。村誌によれば、元禄三年 (1690) の文書があるから、それより古い創建ということになる。祭神は、天照大神・誉田別命・天児屋根命となっている。

ミヤノダイラとは、「神明神社を祀っている地で、山中の平らな部分のある地域」か。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、4カ所に記載がある。

【北ノ平】

キタノタイラ。

この小字は、北隣のトコナミ小字と南隣のオオダイラ小字に挟まれている。大平丘陵の北西側の傾斜地にある。

キタノタイラとは何か。「北の方にある山中の平坦地」をいう。では、北とは何か。南側のオオダイラ小字にある御堂と思われる。神明神社も近くになるが、神社からは西の方角に当たるので、神明神社ではないだろう。

オオダイラ小字の御堂には、地藏菩薩立像が二体あり、江戸時代の作とされており、薬師如来立像は平安時代のものとされている（村誌）。地名発生時と思われる中世末には、薬師堂と呼ばれていたと思われる。

ここで、補足の意味で、別の解釈を挙げておきたい。

キタ←キダの転で、「階段状の地形」を示す。キタノハラとは、「階段状の傾斜地の中にある平坦地」となる。現在は、この平坦地が住居になっている。

以上から、キタノダイラとは、「薬師堂の北の方にある傾斜地の中の平坦な所」を意味するものと考えたい。

なお、全国地図には、キタノタイラ地名は、記載が無い。

【大平】

オオダイラ。

この小字は天竜川左岸の天竜峡溪谷に添う面積の大きな小字で、丘陵の頂上部と溪谷の急傾斜地を含む地域で、大平沢川と天竜川の間にある丘陵地でもある。

オオダイラとは、文字通り、「山地にある広い平坦な場所」をいう。

ここには、先に述べたように御堂があり、北の方にあるタイザ小字が関係

していると思われる。

国土地理院の25,000分の1の全国地図には、オオダイラ地名は、中・大字として、103カ所に記載されている。「大平」地名になると、294カ所にもなる。オオヒラという名前が入ってくるからであろう。

【倒ヶ入】

サカガイリ。

この小字は、大平沢川が天竜川に合流する所の大平沢川の右岸にある。最高点付近に平坦地はあるが、ほとんどが急傾斜地となっている。

サカガイリとは何を意味するのか。サカ（倒）は、「逆立ったような険しい地形」（語源辞典）をいう。

イリ（入）が難しい。イリといえば、川の上流を意味することが多い。上流の方が谷が険しいからである。しかし、この場合は、谷が険しい所は下流側の天竜川との合流点にある。このイリとは、「大平沢川の下流側に引込んだ奥の所」を意味する。

以上から、サカガイリとは、「下流側の逆立ったような急傾斜地」をいう。

全国地図にはサカガイリ地名は記載が無い。

【牛首】

ウシクビ。

この小字は、大平沢川に囲まれた丘陵地にある。柵平集会所や大平農家生活改善センターのある広い地域になっている。

ウシクビとは、地形地名で、「牛の頭と首に見立てた地形の所」（語源辞典）をいう。空から見た地形は、牛の頭か鯨の頭を思わせるような形になっている。

ウシクビ小字は三穂にもあり、全国地図には中・大字として5カ所にある。

【榎ヶ平】

マキガタイラ。

この小字は、天竜川に接しており、大平沢川と紅葉川に挟まれている。

マキガタイラとは何か。二説を挙げる。

①マキは、植物のクヌギ（栲）・コナラ（小櫨）・ナラ（櫨）などの多い地をいう。マキガタイラとは、「ナラなどの樹木の多い、平坦な土地」をいう。

②マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「物や場所のまわりをぐるりと取り囲む」（国語大辞典）ことを意味する。マキガタイラとは、「川に周りを取り囲まれた山中の平坦地のある所」を意味する。ここは、天竜川・大平沢川・紅葉川の三つの川に取り囲まれている。

全国地図にはマキガタイラ地名もマキガダイラ地名も記載されていない。

【橋爪】

ハシヅメ。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の紅葉橋のすぐ東側で、紅葉川の右岸にある小字である。

ハシヅメとはハシヅメ（橋詰）で、「橋のもと」（国語大辞典）を意味する。中世の末頃であろうか、紅葉川を渡る場所がここにあった。紅葉川はその上流も下流も急傾斜地になっており、川面に近い所で渡るとすれば、ここしかなかったのだろう。立派な橋ではなく、何本かの材木を繋いだものであったと思われる。

ハシヅメについては、すでに 32 で御庵沢川の橋爪について触れている。

【商人原】

アキンドハラ。

この小字は、安戸の紅葉川の北

200m 付近にある尾根とその南側傾斜地にある。

アキンドハラとは何をいうのか。二説を挙げる。

①アキンドハラ（商人原）とは、「行商人の宿にしていた平らで広い所」を意味する。確かに、ここは、県道米川・飯田線の脇往還が通っていた所で、行商人の宿が無かったとはいえない。しかし、その通りとはいえない面がある。

②語源辞典による。アキはアキ、アゲ（上）の転で、「高い所」をいう。ヒトはヒトシ（均）の語幹で「緩傾斜地」の意。合わせて、アキンドハラとは、「高い所から山腹に広がる緩傾斜地」を意味する。

全国地図にはアキンドハラ地名は無い。

【清水下】

シミズシタ。

この小字は、紅葉川の支流が合流する所にある、小さな小字である。紅葉川の河原になっている。

シミズシタとは、文字通り、「清水が湧き出る所の下流側」を意味する。

国土地理院の全国地図には、シミズシタ地名が、中・大字として、二カ所に記載がある。

【山ノ神下】

ヤマノカミシタ。

この小字は、紅葉川支流の右岸にあって、アキンドハラ小字の南側にある側稜の南側傾斜地となっている。

ヤマノカミシタとは、「山の神を祀っている山の下方」を意味する。山の神を祀る祠があって、それが朽ちてしまったのかどうかは分からない。

全国地図には、ヤマノカミシタ地名は、中・大字として1カ所がある。

【ヨシガ洞】

ヨシガホラ。

この小字は、安戸の紅葉川支流が形成した細長い小溪谷にある。現在、下流部には水田と果樹園、上流部には桑園がある。

ヨシ＝アシで、ヨシとは「芦が生えているような湿地」をいう。アシ（悪シ）を連想するので、アシという語は、ヨシに置き換えられることが多かったと思われる。

ヨシガホラとは、「湿地帯のある広い小溪谷」を意味する。

全国地図には、なぜか、ヨシガホラ地名は載っていない。

【シンノ洞】

シンノホラ。

この小字も、安戸の紅葉川支流が形成した小溪谷で、水田や桑園が多く、洞の奥には堤もある。

シンノホラとは何を意味しているのか。全国的には、この地名は珍しいようで、全国地図には一カ所も載っていない。

シンはシン（新）で、「新しい開墾地」とも考えられるが、すぐ北側の洞と比べても、新開地とは思えないので、ここでは採りあげない。

考えられる解釈は二つ。

①シ←シン（肉）の転で、猪や鹿のことであるが、ここでは猪をいうか。シンノホラとは、「猪の出やすい小溪谷」ということになろうか。

②シンはシン（神）の字音によるものとする（語源辞典）。すると、シンノホラとは、「神社を祀ってある小溪谷」をいう。この小字のある側稜の尾根には、お宮がある。

【コシマイ】

この小字は、紅葉川に添っており、尾根の末端部にある。

コシマイとは何か。

コシ（腰）は、「山の麓に近い所。すそ」（国語大辞典）をいう。マイ（舞）は、「ぐるりと廻りこんだ、廻りめぐった地形」（語源辞典）のこと。

以上から、コシマイとは、「山の麓で、廻りこんだような地形の所」をいう。突き出した尾根が、廻りこんだような形になっている。

【ヒカゲ田・ヒカゲ洞】

ヒカゲダ・ヒカゲボラ。

ヒカゲダ小字は、紅葉川左岸の氾濫原にあって、南西側が急傾斜地になっており、日陰になるのは午後の一時期と思われる。

ヒカゲボラ小字は、側稜の尾根の頂上を含む高い所にある。

ヒカゲには、①日当たりのいい所②日当たりの悪い所、と相反する意味がある。どちらにすべきなのか迷う。

想像をたくましくすれば、あるいは、貢租の関係で、「日当たりが悪いので下にしてほしい」という願いがあって、検地などで調査が入った時には、「日当たりがいいんです」と開き直すこともあったのかどうか。

ヒカゲダは、「日当たりのいい田んぼ」か。紅葉川の西側氾濫原なので、日陰になる時間は長くは無いと思われる。

ヒカゲボラは、「日当たりの良くない洞」か。この小字は、周辺の尾根の部分の日当たりはいいが、北向きの谷になっているので、谷の部分の日当たりはよくないと思われる。

国土地理院の全国地図には、ヒカゲダ地名も、ヒカゲボラ地名も記載は無い。

【所田】

トコロダ。

この小字は、安戸紅葉川の北側の氾濫原にある。

トコロ（所）は、「住んでいる場所」（国語大辞典）をいう。

トコロダとは、「居住地に近い水田」をいうか。現在でも、居住地は最も高い所にあり、その下方に田んぼが紅葉川まで作られている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、トコロダ地名が1カ所ある。

【辻】

ツジ。

この小字は、旧安戸村の中心部に相当すると思われ、八王子神社や安戸集会所がある。

ツジ（辻）というのは、単に二本以上の道が交わった場所というだけでなく、「境界性と公共性という二つの特性がある。境界の場としての辻は、他界への出入口として認識され、祖霊や妖怪との出会いの場となった」（民俗大辞典）という。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ツジ地名が123カ所にも記載されている。

【一ノ瀬・市瀬】

イチノセ。

これらの小字は、紅葉川の南側の急傾斜地にある。「市瀬」小字は、「一ノ瀬」小字に囲まれており、土地を別ける必要が生じた時に、「市瀬」小字を独立させたものと思われる。

イチノセとは何か。語源辞典によって、二説を挙げる。

①イチ（一）←イツ（巖）の転で、「険しい地形」をいう。セ（瀬）は、「川の流れ」である。合わせると、イチノセとは、「険しい傾斜地のある川」を意味する。紅葉川の左岸は、この小字で急傾斜地になっている。

②イチはやはり、「険しい地形」のこと。セ（瀬）はセ（背）で、「山の側稜」をいう。イチノセとは、「険しい傾斜地のある山の側稜」をいう。

国土地理院の全国地図には、イチノセ地名は、中・大字として、91件の記載がある。

【青木田】

アオキダ。

この小字は、紅葉川を挟んだ両側に一つずつある。現在でも半分ぐらいは田んぼになっている。

アオキ（青木）は、語源辞典によれば、アブ（湿地）・キ（場所を表す接尾語）で、「湿地」をいう。アブは湿地を意味する地名用語であるし、アワ（沫。泡）の転と解釈しても「湿地」を意味することになる。

アオキダとは、「湿地帯にある田んぼ」をいう。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として、アオキダ地名は2件の記載がある。

【西ヶ洞】

ニシガホラ。

宮沢にある小字で、ヨシガホラ・シンノホラ・イドイリ・シモダ・ヲビラ・キララダ・ソトヤマ・トウゲハタ・イナバ・ヒラハタキタボラなどの小字に囲まれている。

ニシガホラとは、「西の方にある小溪谷」である。何の西か。それは、延徳二年（1489）の創建と伝えられている和世田神社であろう。宮沢村誕生の前の勧請という（村誌）。

尾林にも二カ所にニシガホラがあるが、いずれも中心地から西をいう。

【林ノコシ】

ハヤシノコシ。

安戸にある小字で、県道米川・飯田

線沿いにあり、紅葉川に接している。周辺には、イノグチ・クノギダイラ・アオキダ・イチノセの小字に囲まれている。

今田のハヤシノコシ小字については、「樹木の生えている所の麓の部分」としたが、ここでも、同様な解釈としておきたい。

【マムシ洞】

マムシボラ。

千栄との村境にある小字で、紅葉川の支流による洞と頂上部からなる。周辺には、イチノセ小字とテテボラ小字がある。

マムシボラとは、「毒蛇である蝮の多い小溪谷」をいう。

マムシ地名が多いのは、マムシに限らず、蛇そのものが古来より神聖視され、農耕神・山の神あるいは水神の化身であるとされてきていることと関わるのか、それとも、毒蛇であることを怖れる心情によるものか。

全国地図には、マムシボラ地名は一つも載っていない。

【促し】

ウナガシ。

安戸の小字で、側稜の尾根と紅葉川の間への傾斜地にある。紅葉川の対岸には、面積の広いシンノホラ小字がある。

ウナガシとは何を意味しているのか。全国地図にも、ウナガシ地名は記載が無い。

これも語源辞典によって、いずれもすっきりとはしないが、二説を挙げる。①ウナ(畝)は、「尾根筋などの高み」をいう。ガシは動詞カシグ(傾)の語幹で、傾斜地のこと。ウナガシとは、「側稜の尾根筋と川の間への傾斜地」をいうか。この傾斜地に、何か意味があるのかどうか。

②ガシ←カシ(川岸)で、ウナガシとは、「側稜の尾根筋と川岸がある場所」となる。この川岸で何があったのかは分からないが、管流しの材木を一時、ここで川から上げて、一気に流したかどうか。

全国地図では、このウナガシ地名も記載は無い。

【立洞】

タテボラ。

この小字は、千栄村境にある、細長い洞になっている。

タテボラとは、「両側が側稜の尾根になつとり、間を谷川が流れている、細長い洞」をいう。タテはタテ(縦)で、「立体や平面の一番長い方向、長さ」(国語大辞典)をいう。

全国地図には、タテボラ地名も載っていない。

【馬道】

ウマミチ。

この小字は二カ所があり、いずれも安戸の紅葉川右岸になる。この二カ所のウマミチは、洞の傾斜地になっていて繋がる。

ウマミチを横断する道路があり、これが馬が通る道であるとも考えることもできるが、道路の一部になるので、それを果たして地名にするのか、という疑問が残る。

ウマミチは、「木を切り出すために木馬を走らせる道」(国語大辞典)としたい。吉野・和歌山・徳島の方言で、三遠南信では未確認ではあるが、説得力はある。

全国地図には一件だけ記載がある。

【釜ノ口】

カマノクチ。

この小字は、紅葉川近くから千栄境の尾根にまで広がる。

カマノクチとは何か。二説を挙げる。
①カマノクチとは、「釜を伏せたような頂上部のある尾根に近い所」を意味するものと思われる。村境には、釜を伏せたような形状の山があり、ここを釜に見立てたのではないだろうか。
②カマ（釜）←カミ（嚙）・マ（間）で「えぐったような崖地」（語源辞典）をいう。クチ（口）は、動詞クチル（朽）の連用形が名詞化した語で、「湿地」をいう（語源辞典）。以上から、カマノクチとは、「えぐられたような崖があり、湿地もある所」か。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カマノクチ地名は、3カ所にある。

【京崎】

キョウザキ。

尾林の小字で、確認はできないが、安戸との境界近くにあるものと思われる。

キョウザキとは、何を意味しているのか。二説を挙げる。

①キョウ（京）は、キョウ（境）をいう。キョウザキとは、「境界近くにある側稜の尾根の末端部」を意味する。村境も紅葉川も近いので、惣堂のような役割をもつ建物があつたのかもしれない。

②キョウはキョウ（洶）で、「水がさかんにわきあがる」（国語大辞典）の意。キョウザキとは、「湧水のある側稜の尾根の末端部」をいうかもしれない。なお、キョウ（凶）には、「ある期間、飲食、外出などを避け、身心を清らかにたもっていること。物忌み」（国語大辞典）の意味もある。

国土地理院の全国地図には、キョウザキ地名が、中・大字として、2カ所に記載されている。

【八右衛門田・八右衛門田山】

ハチエモンダ・ハチエモンダヤマ。

これらの小字は、キョウザキ小字と紅葉川に挟まれている。

ハチエモンダは、「八右衛門所有の田んぼ」を意味すると思われる。現在でも、この小字の半分ほどは水田になっている。

ハチエモンダ小字の、南東の隣にあるのが、ハチエモンダヤマ小字である。急傾斜地の山地になっており、「八右衛門所有の草刈地」と思われる。有力者の柴山であつたのであろう。八右衛門さんについては不明。

ハチエモンダ地名は、もちろん、全国地図には記載がない。

【阿れ田】

アレタ。

この小字は、紅葉川右岸の氾濫原にあり、ウマミチ（馬道）小字の対岸に当たる。現在はこの小字全体が水田になっている。

アレタとは、「荒れ田」を意味する。それは、紅葉川が荒れて川欠けや土砂に埋もれたりして、収穫が壊滅または激減したことがあつたのであろう。

あるいは、対岸の馬道を下る木馬が対岸のアレタに損害を与えたこともあつたかもしれない。そのためにアレタ小字が生まれたことも考えられる。馬道小字とアレタ小字の幅が同じであることが、それを示唆する。

国土地理院の全国地図には、中・大字として1カ所に、アレタ地名が記載されている。

【下田】

シモダ。

この小字は、シンノホラ小字とオサダ小字に挟まれている。

シモダとは、「下の方にある田んぼ」

を意味する。

ただ、このシモが何に対してシモなのか、はっきりしない。尾林の中心地から見て、紅葉川の下流側になることをいうのか。それとも、お宮のあるシンノホラ小字より低い所にあることをいうのか。はっきりしない。

国土地理院の25,000分の1全国地図には、シモダ地名は77カ所にもあり、「下田」地名は84カ所にのぼる。

【をびら】

オビラ。

この小字は、尾林の県道米川・飯田線沿いにあり、オサダ小字とキララダ小字に挟まれている。

オビラとは何か。わかりにくい地名である。二説を挙げる。

①オビラはオ(小)・ビラ(平)で、「小さな平地」を意味するか。ここは、紅葉川氾濫原で、ほぼ平坦な場所といえる。

②オはオ(尾)で、オビラとは、「尾根の末端部分にある平坦地」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、オビラ地名は5カ所に挙げられており、全て「尾平」の字が宛てられている。

【をさ田】

オサダ。

県道米川・飯田線の両側に延びる小字で、紅葉川に接しており、尾林下集会所がある。

オサダとは、ヲサ(長)・ダ(田)で、「細長い田んぼのある所」をいう。小字そのものも細長いが、現在の一枚の田んぼも細長くなっている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、オサダ地名は11カ所にあるが、いずれも「長田」の字を宛てている。

【野池田】

ノイケダ。

尾林にある小字で、紅葉川の両岸に広がっている。

ノイケダ(野池田)は、ノ(野)・キ(川)・ケ(処)・ダ(田)で、「川が流れている野にある田んぼ」を意味するか。ケは場所を表す接尾語で、カヤコが転訛した語であるという(語源辞典)。この小字は、現在もほとんどが水田になっている。

全国地図にはノイケダ地名は記載が無い。

【ノウ作】

ノウヅクリ。

この小字は、紅葉川に接して、その左岸にある。ノイケダ小字の上流側になる。

これも分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ノウ←ナホ(直)の転で、「真っ直ぐな地名」という意味がある(語源辞典)。であれば、「ほぼ真っ直ぐに水路や土手をつくることができた所」ということになるが、どうであろうか。この小字内では、確かに紅葉川も直線になっているし、田んぼの土手もほぼ真っ直ぐになっている。

②ノウはノ(野)が長音化した語で、ヅクリは耕作のこと。ノウヅクリとは、「野に少し手を加えただけで、耕作している所」となるが、ややぎこちないかもしれない。

全国地図にノウヅクリ地名は無い。

【セカキ免】

セガキメン。

この小字は尾林にあり、県道米川・飯田線と紅葉川の間にある。200mほど南西にテラノウシロ小字があり、その南隣にモチダ小字があることから、

近くに寺院があったと思われる。近年まであったという十王堂に関連するかどうかは、はっきりしない。

セガキメンとは、「セガキ(施餓鬼)の法要を営むために、免租になっている土地」をいう。

施餓鬼は、「飢餓に苦しんで災いをなし鬼衆や無縁の亡者の霊に飲食を施す法会」(広辞苑)で、寺院で年に一度、盂蘭盆の時期に行われる。

全国地図には、セガキメン地名は記載されていない。

【又木田】

マタギダ。

この小字は、紅葉川に沿った北東側にあり、セガキメン小字の南東隣になる。

マタギダとは何か。はっきりしない地名であるが、これも語源辞典で見たい。

①マタは水流が二つに分かれていること。キダはキダハシで自然堤防をいう。マタギダとは、「水流がわかれている自然堤防のある所」か。

②キダは動詞キダム(刻)から、「細かく刻み分けられた土地」のこと。マタギダは、「水流が二筋になっていて、細かく分けられた土地」をいうか。

全国地図にはマタギダ地名は載っていない。

【雲母田】

キララダ。

この小字は、県道米川・飯田線にそって、その北東側にある。

キララダとは、キララ(雲母)・ダ(場所を表す接尾語)で、「キララ(雲母)が目立つ所」を意味するか。この小字の北東端を水が流れている。この水路にある雲母が目立つのかもしれない。

全国地図には、キララダ地名も載っていない。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

和世田神社の南西方向にある小字で、ミヤノマエとは、この「お宮の前の方の土地」を意味する。

どこにでもある地名である。

村誌によれば、明治維新までは、老樹森々とした境内であったという。祭神は、美穂須々美命・素戔鳴尊・誉田別尊の三神。

【槇坂】

マキサカ。

この小字は、県道米川・飯田線の南西側にあり、セガキメン小字とマンバダ小字の間にある。

マキサカとは何を意味するのか。これも語源辞典によって二説を挙げる。①マキ(槇)は動詞マク(巻)の連用形で名詞化した語。サカ(坂)は「勾配のある所」をいう。マキサカとは、「山に取り囲まれて勾配のある土地」をいう。

②マキはマク(巻)の転訛した語で、「川が巻くようにして流れている所」をいう。サカはサカヒ(境界)で、マキサカとは、「川が巻くように流れている村境」を意味する。宮沢川が合流するためか、紅葉川が半円形に巻くようにして流れている。

なお、全国地図には、なぜか、マキサカ地名は記載されていない。

【八丈免】

ハチジョウメン。

この小字は、千栄との境界付近にあり、尾林南集会所を含む広い小字になっているが、無小字地をなくす補正の過程で広がっているかもしれない。

ハチジョウが何を意味するのか。尾

張や美濃が産地であった八丈絹のことをいうのか、それとも、八丈の音読みでヤタケかもしれないと思ったりして迷った。

しかし、下伊那郡の方言にハチジョウがあることを知って落着。

ハチジョウとは、「元旦に神前のしめ縄へ付ける二つ折りの白紙」（方言大辞典）であるという。

ハチジョウメンとは、「しめ縄に付けるハチジョウを納めるのと引き替えに貢租を免ぜられている土地」ということになる。領内の神社のハチジョウ作りを一手に引き受けて紙漉から始めていたのであろう。

全国地図には、ハチジョウメン地名は記載が無い。

【オノ神】

サイノカミ。

この小字も、千栄の村境にある。

既に何回か触れたように、サイノカミとは、塞ノ神・道祖神・障ノ神ともいい、「邪霊の侵入を防ぐ神、行路の安全を守る神。村境などに置かれ、近世には、その形から良縁・出産・夫婦円満の神ともなった」（広辞苑）という。

【又六】

マタロク。

千栄の村境にある小字で、サイノカミ小字とフナクボ小字の間にある。二つの側稜の尾根に囲まれた洞である。

マタロクとは何を意味するのだろうか。これも難しい地名である。二説を示す。

①マタ（又）は、側稜の尾根が股を開いた状態になっていること。ロク（六）は、ロク（陸）で岐阜県の方言にある「斜めであること」（方言大辞典）の意か。マタロクとは、「股状の洞で、

緩く傾斜している土地」をいう。

②ロク（六）←ムツ（六）←動詞ムツク（潰）の語幹で、「衰弱する」意から、「湿地」を意味する（語源辞典）。マタロクとは、「股所になっている地形で、湿地の多い土地」をいう。洞の奥からも湧水があるらしく、今でも棚田が並んでいる。

全国地図には、マタロク地名は一つも載っていない。

【まつば沢】

マツバサワ。

この小字はハチジョウメン小字に接し、尾林南集会所の近くにある。南東側の半分は、現在、棚田が並んでいる。

マツバサワとは何か。これも難しい。「松の多い沢」ではないだろう。そこで二説を挙げる。

①マは接頭語で語調を調える。ツバは動詞ツバエルの語幹で、崖などの崩壊地形をいう（語源辞典）。マツバサワとは、「崩壊地のある洞」を意味する。この付近は崩壊地の無い所はないが、この解釈でいいのだろうか。

②マは接頭語。ツバ←トバ←ドブ（泥）の転訛した語で、「湿地」を意味する（語源辞典）。マツバサワとは、「湿地の多い洞」を意味する。現状はこの通りだが、廻しすぎか。

全国地図には、マツバサワ地名は記載がない。

【よこ前】

ヨコマエ。

この小字は、ハチジョウメン・ニシガホラ・ヤマナカダ・マキザカの小字に囲まれている。石林にあると思われるが、宮沢なのか尾林なのかは、わからない。ほぼ正方形で、側稜の尾根の末端になっている。

この小字は、テラノウシロ小字に関わる寺院に係る。この寺院というのは、村誌にある、石林山大法院であろうか。明治六年に廃寺となっている。

ヨコマエとは、「大法院と思われる寺院の前にある土地」で、紅葉川の対岸になるが、何らかの宗教行事が行われた場所と思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヨコマエ地名は5カ所に記載されている。

【山中田】

ヤマナカダ。

この小字は、紅葉川左岸の氾濫原にある。

ヤマナカダとは、文字通りに解せば、「山の中にある田んぼ」ということになるが、気になるのは、①現在でも水田にはなっていないこと、②果たして、この地を地元では山の中といつただろうか、という二点である。

ヤマナカダとは何をいうのか。いずれもはっきりとはしないが、二説を挙げる。

①ヤマは境内をいう（国語大辞典）。かつてはここも大法院の境内であった可能性はある。ナカダはナカ（中）・ダ（処）で、石林の中心だった所かもしれない。ヤマナカダとは、「石林の中心になっていて、寺院の境内であった所」か。紅葉川を挟んで境内が広がっていたのかどうか、という疑問はある。

②ヤマは火葬場のこと（語源辞典）。ヤマナカダとは、「石林の中心地ではあるが、火葬場だった所」か。ただ、中心地に火葬場があっただろうか、という疑問は残る。

全国地図に、ヤマナカダ地名は無い。

【日焼】

ヒヤケ。

この小字は、県道米川・飯田線と紅葉川に挟まれている。

ヒヤケ（日焼）は、文字通り、「水の便の悪い田」（語源辞典）をいう。紅葉川に接しているが、当然のことながら、そこから直接に水を引くことはできない。現在は、石林川から引いている井水で灌漑をしているが、その井水が来る前は、日焼田であったに違いない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、2カ所に記載されている。

【早苗田】

サナエダ。

この小字は、県道米川・飯田線の西の方にあり、周辺には、ハチジョウメン・マネハナ・ロクショウマキダ・フルヤガイトなどの小字がある。

サナエダ（早苗田）とは、「早苗が植えられた田。田植の終わった田」（国語大辞典）であるが、これでは地名にはならない。

そこで、サナエダとは、「早苗をつくる田んぼ。つまり苗代田」としたい。すべての田んぼに苗代のあった時があったというが、この地名発生時には、苗代田は本田とは別に準備されていたのであろう。

全国地図には、サナエダ地名は記載が無い。

【ま祢はな】

マネハナ。

この小字は、サナエダ小字の西隣にある。マツバサワ・ニシガホラ・ヨコマエとつながる尾根筋の西側斜面になる。

マネハナも難しい地名である。

これもすっきりはしないが、マネハナとは、マ（接頭語）、ネ（尾根）・ハ

ナ（端）で、「真っ直ぐに通っている側稜の尾根筋の縁辺にある傾斜地」か。ほぼ南北に直線的に走る尾根筋は明瞭で、それをマ（真）・ネ（尾根）と表現したのではないだろうか。

全国地図には、マネハナ地名は載っていない。

【六升マキ田】

ロクショウマキダ。

この小字は、マネハナ・サナエダ小字の南側のやや高い所にある。

マキタ（蒔田）は、「苗代を作らないで、じかに田に種籾をまいて稲を作ること。また、その田」（国語大辞典）である。

ロクショウマキダとは、直まきで六升を蒔くことができる田んぼのことであるが、この小字では、ずっと直播きでイネを作ってきたのかどうかは疑問である。隣には苗代であった可能性が高いサナエダ小字があるからである。

そこで、ロクショウマキダとは、「直播きであれば、六升の種籾を必要とするほどの面積のある田んぼ」としたい。

全国地図には、ロクショウマキダ地名は、一件も記載が無い。

【神田】

ジンデン。

この小字は、ニシ小字の南隣にあり、西側はフナクボ小字になっている。

ジンデンとは何か。二つの解釈を挙げる。

①ジンデンといえば、「神社に付属して、その収穫を神社の祭典や造営、また神職の給料などの諸費にあてるための田地。不輸租地」（国語大辞典）である。神社といえば、やや離れてはいるが、和世田神社になる。しかし、この小字は、大部分が急傾斜地になっ

ていて、水田は今もないことが気になる。

②ジンデン←ジンデの転で、シミ（浸）・デ（出）で湧水をいう（語源辞典）。ジンデンとは、「自然の湧水のある所」を意味する。この小字の傾斜地の西端には、自然の湧水も流れている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ジンデン地名は 15 ヲ所にあるが、「神田」地名になると、カンダやシンデンという呼び方が加わってか、94 ヲ所にもなる。

【西】

ニシ。

この小字は、ロクショウマキダ小字とジンデン小字の間にある。西隣はフナクボ小字である。

ニシに対する解釈は二つ。

①ニシは「西側にある土地」をいうか。近くには、ヒガシ小字があるので、東に対する西の意かと思われる。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で、「湿地」をいう（語源辞典）。ジンデン小字と並んでおり、湧水の多い所と思われるので、この解釈も納得はできる。

ニシ地名は国土地理院の 25,000 分の 1 全国地図には、中・大字として 162 ヲ所も記載されている。

【舟久保】

フナクボ。

この小字は、千栄との村境にあり、紅葉川の支流が形成した細長い谷になっている。谷の大部分が、現在は水田になっている。

フナクボは文字通り、「地形が舟に似た窪地」である。語源辞典には、「信濃越後地方で、小断層によって生じた窪地」とあるが、ここでは断層は未確

認であるが、紅葉川の支流が浸食堆積させた洞と思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、フナクボ地名が5カ所に記載されている。

【東入・東山】

ヒガシイリ・ヒガシヤマ。

これらの小字は、フナクボ小字の東側の山地にある。北西の方にニシ(西)小字があるので、お互いに対応してヒガシになっていると思われる。

ヒガシヤマは、「ニシ小字に対して東の方にある山地」であり、ヒガシイリは、ヒガシヤマの更に「奥に当たる標高の高い所にある土地」であろうか。

国土地理院の全国地図には、ヒガシヤマ地名は128カ所が、ヒガシイリ地名は1カ所のみ、中・大字として記録されている。

【寺屋敷・寺村】

テラヤシキ・テラムラ。

これらの小字は紅葉川左岸にある。いずれも寺院に関連のある地名で、寺院そのものは、やや南よりのカイト小字にあったと思われる。

村誌によれば、尾林に二寺があって、持泉寺と弘誓寺という。このどちらかが、この南の方のカイト小字にあり、他の一つに寺院が、北側にあるカイト小字にあったのではないだろうか。いずれも信玄の南信濃入の時の戦乱によって廃滅したと伝えられている。

テラヤシキとは、「寺院に係する屋敷があった所」であろう。僧坊か庫裏かは不明であるが。

テラムラとは、「寺院に係する集落のあった所」か。小さな門前町を形成していたのかもしれない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、テラヤシキ地名は10カ所、

テラムラ地名は37カ所に記載がある。テラムラが多いのは、中・大字の規模に合っているということだろうか。

【古屋垣外】

フルヤカイト。

この小字は、テラムラ小字の北隣にあり、やはり紅葉川左岸になっている。

フルヤカイトとは、「古い屋敷跡」ということになるが、これも尾林にあったといわれている南の寺院に係するものと思われる。

全国地図には、フルヤカイト地名は載っていない。

【井戸神】

イドガミ。

この小字は、紅葉川右岸の氾濫原にあり、県道米川・飯田線にも接している。

イドガミとは、「井戸神が祀られている井戸があった所」であろう。

井戸神とは、井戸にまつられる神。祠その他の祭祀施設はなく、年の暮れに正月を迎えるためのオヤスを進ぜ、場合によっては鏡餅などを供えることが多いようだ。他界とつながる神聖な境界領域であったともいう(民俗大辞典)。

全国地図には、中・大字として、イドガミ地名が4カ所、記載がある。

【家ノ前】

イエノマエ。

この小字は、紅葉川右岸で、県道米川・飯田線との間にある。

イエノマエは、文字通り「どこかの家の前になる土地」をいうことになるが、「どこかの家」とはどの家なのかははっきりしない。東隣のムカイダ小字にあった家に有力者がいたのか、それとも少し離れているが50mほど南のフルヤカイト小字であったのか。その

どちらかであろう。

全国地図には、9カ所の中・大字が挙げられている。曖昧な地名と思われるが、手っ取り早いためか、意外に多い。

【向田・向井田山】

ムカイダ・ムカイダヤマ。

これらの小字は、紅葉川右岸にある。

ムカイというのだから、反対側から見ていることになるが、川などの向かい側ということが多い。この川が紅葉川であるとすると、南の寺院から三手のムカイダと思われる。

ムカイダとは、「南の寺院からみて、紅葉川の向こうの田んぼ」ということになる。

ムカイダヤマも、「寺院から見て紅葉川の向こうの田んぼ」を意味する。

全国地図には、ムカイダヤマ地名は載っていないが、ムカイダ地名は中・大字として時又にもあり、全国では41カ所に記載がある。

【はんのう田】

ハンノウダ。

この小字は、尾林の南の寺の近くにあり、ハヤシノコシ小字トマンゲツヤマ小字に挟まれている、小さなこあぎである。

ハンノウダは駄科にもあって、①「災害その他により年貢が半減され、これが恒久化した田んぼ」（語源辞典）としている。

しかし、駄科の場合も、この小字は念通寺の近くにあり、ここ尾林でも南の寺に近い。そこで、次のような仮説も加えておきたい。②半納とは「貢租の半分は領主に納め、残りの半分は寺院の維持費に充てる費用にする」ことをいうのかもしれない。

全国地図にはハンノウダ地名は記

載が無い。

【万月山・満月山】

マンゲツヤマ。

万月山小字は、県道米川・飯田線と紅葉川を跨いでいる。満月山小字は南の方にあり、紅葉川左岸の小さな小字になっていて、かつては繋がっていたようだ。しずれも傾斜地になっている。

マンゲツヤマとは何か。語源辞典によってみていく。

マンはマ（真）・ノ（撥音便）で「程度がはなはだしい」ことを意味する。ゲツはクエ（崩）・ツ（場所を示す接尾語）で、「崩壊地」をいう。

マンゲツヤマとは「甚だしい崩壊地のある山」としておきたい。現状では、それほど酷い崩壊地とは思えないが、地名発生時には大崩壊があったのかもしれない。その後になって、瑞祥名として「満月」の文字が宛てられたものと思われる。

マンガツヤマについては、他の解釈は思いつかない。

全国的にはマンガツヤマ地名は無い。

【桜ヶ洞】

サクラガホラ。

この小字は、紅葉川と尾林南沢との間を走る尾根の側稜中腹にある。

サクラは語源辞典によれば、サ（接頭語）・クラ（刳）で、「崩れ地」をいう。ホラ（洞）は、「山などの崩れた所」の意。

合わせて、サクラガホラとは、「崩れ地のある山地」としたい。

これも、後に美称名として「桜」の字が宛てられたものと思われる。

全国地図には、なぜか、サクラガホラ地名は記載が無い。ホラ地名はこの地名でしきりに使われていた地名で

あるためか。

【高野作り】

コウヤヅクリ。

この小字は、紅葉川と尾林南沢川の間の丘陵地にある。

コウヤとは高野豆腐で凍み豆腐のこと。兵庫、奈良の方言というが、西日本と東日本の境界地域であるためか、この地域でも使っている。

民俗大辞典には、「木綿豆腐を適当な大きさに小切りし、凍結させ、解凍後脱水させたのが、凍豆腐（東日本では凍み豆腐・シバリ豆腐・ツルシ豆腐、西日本では高野豆腐という）が、保存食としても大いに利用された」とある。

コウヤヅクリとは、「凍み豆腐を作っている所」を意味する。冬の朝、気温の下がる所でないと、凍み豆腐は作れない。標高の高い所まで運び上げて豆腐を凍らせたのであろう。頂上に近いところと、それより少し低い中腹に緩傾斜地がある。

全国地図にはコウヤヅクリが地名となっている所は無い。

【腰前】

コシマエ。

この小字は、紅葉川右岸の傾斜地にあり、コウヤヅクリ小字の西隣になる。

コシ（腰）は、「山の麓に近い所」（国語大辞典）である。マエ（前）は、前面にことで、斜面の中腹に立てば、麓の方を正面に見るから、山裾のことをいう。

コシマエとは、「山の中腹から麓にかけての所」を意味するものと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、コシマエ地名は、3カ所に記載されている。

【日焼畑】

ヒヤケバタ。

この小字は、紅葉川左岸の洞にある。現在は、洞の中心部は水田になっていて、湧水を利用している。

ヒヤケバタ（日焼畑）とは、国語大辞典にあるように、字面では、「太陽の光に照りつけられて熱気のこもった畑。また降雨がなく乾ききった畑」となる。しかし、この洞には水田と荒地と森林しかないのので、現在では、この解釈は成り立たないが、地名発生時は、水田ではなくて畑であった可能性は否定できない。

しかし、別の解釈を挙げておく。

ヒヤケは動詞ヒヤク（冷）の連用形の名詞化した語。バタはハ（端）・タ（処）で、周辺を意味する。

ヒヤケダ（日焼田）とは、「湧水で冷えやすい場所の周辺部」と考えたい。現地は、この方が合っていると思われるが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、一件だけ、ヒヤケダ地名が、中・大字として記載されている。

【ミセマチ田】

ミセマチダ。

この小字は、紅葉川がほぼ直角に曲り、支流が合流する所にある、小さな小字である。

ミセマチダとは何か。

ミセは、ミ（水）・セ（瀬）で、「川の瀬になった所」（語源辞典）をいう。現在、この小字の中を紅葉川が流れている。

マチダは、「区画によって区分された田。また、区分された特別の田。神領の田」（国語大辞典）であるという。

ミセマチダとは、「かつて川の瀬であった所を区分して特別の田としたもの。それは神領である可能性が高い」

と解釈した。

全国地図にはミセマチダ地名は記載がない。

【佛具免】

ブツクメン。

マンドキヤマ小字の側稜の中腹付近にある小さな小字で、現在は荒地と山林になっている。

ブツクメンとは、「仏に供える物などの費用に宛てるために貢租が免ぜられている土地」ということになるが、現地は傾斜地で生産をあげることができそうもない所であることが気になる。

しかし、他の解釈は考えられない。

全国地図には、ブツクメン地名は載っていない。

【万時山】

マンドキヤマ。マンジヤマとルビをふるデータもあるが、ここは村誌に従いたい。

この小字は、千栄の村境の側稜尾根から、紅葉川に下る傾斜地の中腹までの広い小字となっている。

マンドキヤマとは何を意味するのだろうか。

ドキ(時)は、動詞トク(解)の連用形で名詞化した語。バラバラにほどけることから「崩壊地形」をいう(語源辞典)。マン(万)は数が多きことをいうか。

マンドキヤマとは、「たくさんの崩壊地がある山地」を意味する。

ジを寺院のする考えも可能であるが、この小字に寺院があったという記録は無い。

なお、マンドキヤマ地名は、全国地図にはない。

【悪沢・割ル沢】

ワルサワ。

この小字は、マドキヤマの東隣にあり、千栄との村境から紅葉川に近い麓まで広がる大きな小字である。大きな「割ル沢」小字に、小さな「悪沢」小字がくっついている。

ワルサワとは、「崩壊地の多い小さな溪谷」をいう。語源辞典を見ると、ワル(割)から転じたものという説明とワル(悪)から出たとする解釈などがあるが、結果は同じことを意味していることになる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ワルサワ地名は7カ所に。

【桜木田山】

サクラギダヤマ。

ワルサワの山地の麓にある小さな小字である。

サクラギダヤマとは、サ(接頭語)・クラ(割)・キダ(巖)・ヤマ(山)で、「崩壊地があり、巖のように見える山」か。現在は急傾斜地であるが、崩壊地は無い。

サクラギダヤマは、全国には無い。

【ぶっく入・ぶぐ入】

ブックイリ・ブグイリ。

ウバガフトコロ小字を挟んで、二つの小字が、紅葉川の兩岸にある。

ブック・ブグは「仏具」または「仏供」で、仏に供えたり仏事に用いる器具をいう。イリ(入)は、一般的には、「引っ込んだ奥の所」(国語大辞典)であるが、ここでは、意味不明になってしまう。このイリ(入)は、「あることをするのに必要な金銭。費用」(国語大辞典)を意味するものと思われる。「あること」とは、仏事をいう。

合わせると、ブックイリ・ブグイリとは、「仏事に必要なものを購うための土地で、寺院の所有地」としたい。気になるのは、この小字の耕地が少な

いこと。山林の樹木を伐採して仏事の費用に宛てたのであろう。

なお、これらの地名は、全国地図には無い。

【かに田】

カニダ。

この小字は、千代との村境に接する傾斜地にあり、一部は紅葉川にも達している。

カニはカナ（鉋の古語）が転じた語で、カキ（掻）・ナグ（糺）ことで、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。この傾斜地には水田は無いので、ダ（田）は、タ（処）ということになる。

カニダとは、「傾斜地で崩壊のある土地」ということになる。

全国地図には、なぜか、カニダ地名は一カ所も無い。

【乳母懐】

ウバフトコロ。

この小字は、千代との村境にあり、村境の側稜の尾根から下る傾斜地にある。

国語大辞典には、ウバガフトコロとは、「うばに抱かれているところ」の意から、「風のこない暖かい場所。とくに南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう」とある。

さらに、製陶に適した土地にこの地名が付けられたというが、尾林のウバフトコロ付近に陶土産地があったのかどうか。まだ確認はしていない。

全国地図には、中・大字として、ウバフトコロが2カ所、ウバガフトコロは4カ所に記載がある。

【よし洞】

ヨシボラ。

この小字も千代との村境に近い所に二カ所ある。南西向きの斜面と洞で構成されている。

安戸にも「ヨシガ洞」小字がある。この意味は「湿地帯のある広い小溪谷」としてある。この尾林のヨシボラは、二カ所とも湿地帯とはいえない。

ヨシは動詞ヨス（寄）の連用形の名詞化した語で、「山寄りの小さな谷」（語源辞典）としたい。あるいは、西隣にアシザワ小字があるので、それよりも高所にあるために、ヨシと命名したのかもしれない。

全国地図には、ヨシボラ地名は載っていない。

【足沢】

アシザワ。

千代との村境にある。村境は紅葉川の支流が解析した細長い谷となっている。

アシ（足）は、「山の裾。麓」を意味する（国語大辞典）。アシザワとは、「山の裾を水が流れている所」となる。

全国地図には、アシザワ地名は中・大字として39件の記載がある。

【さぶろ畑】

サブロボタ。

この小字は、尾林の側稜の尾根にある小さな小字である。

サブロボタの語源は何か。二説を挙げる。

①サブロボタとは、「三郎が耕作していた焼畑」とする。しかし、この尾根付近は、現在は山林になっていて、耕作はされていない。

②サブは形容詞サブシ（寒）の語幹で、気温が低いことをいう（語源辞典）。サブロボタとは、「気温が低い焼畑」を意味するか。近くには、高野豆腐を凍らせていたと思われるコウヤヅクリ小字がある。標高はほぼ同じ。

全国地図には、サブロボタ地名もサブロボウバタ地名も載っていない。

【三切田】

ミキリダ。

この小字の中を、県道米川・飯田線が通っており、河川も紅葉川や井水などが流れており、東の洞には堤もある。紅葉川の氾濫原である。

ミキリ（三切）は、動詞ミキル（見切）の連用形が名詞化した語で、「よく見て判断する。状況を見きわめる」（国語大辞典）を意味する。

ミキリダとは、「年ごとに様子を見て、貢租を決めた田んぼのある所」を意味するものと思われる。紅葉川の氾濫などで、収穫が定まらなかった土地であったのだろう。

川路には、ミトリダ（三通り田）小字があり、これは、「近世、一定の石高によるのではなく、年毎の収穫を検見して年貢を定めた田」とした。この川路の小字と同じことを意味しているものと思われる。

全国地図には、ミキリダ地名は記載が無い。

【万場田】

マンバダ。

この小字は、尾林の郵便局や尾林中集会所のある所。西端は紅葉川になっており、県道米川・飯田線が通っている。現在、水田は無い。

マンバ（万場）は、「ママ、ハバ、ババ、マブなどと同じく、崩崖や斜面を示す地名用語である」（語源辞典）という。「傾斜地、土手などの斜面、がけ」（国語大辞典）を意味するハバ（岨）から転じた語と思われる。群馬、長野、山梨、岐阜の方言であるという。ダ（田）はダ（処）か。

マンバダとは、「崩崖のある所（あるいは田）」を意味する。地名発生時には、水田であった可能性もあるから。

全国地図には、マンバダ地名は記載されていない。方言として限られているということであろうか。

【モチ田】

モチダ。

この小字は県道から少し東の方に外れてテラノウシロ小字の南隣にある。

モチダとは、「宮持田」のこと（語源辞典）、つまり、「神社か寺院が所有していた水田」をいう。宮は神社か仏閣、地名発生時は神仏習合の時代であったから、どちらでもあり得る。ここでは、尾林で最も近い所であったと思われるテラノウシロ小字にある神社）であろうか。あるいは、尾林の北にあったとされる北の寺院かもしれない。

国土地理院の全国地図には、モチダ地名は、中・大字として、23カ所に記載がある。時又にも長石寺のモチダ小字がある。

【をち・おち】

オチ。

宮沢と石林にあるらしい。この付近の境界がわからないので、あいまいな表現になる。宮沢川や紅葉川が解析した谷の中にあり、現在は、大部分が水田で、棚田になっている。

オチは、オチ（落）で「傾斜地。崖」をいう（語源辞典）。オチとは、「傾斜地にある棚田」か。水が上の田んぼから下の田んぼへと、流れ落ちてくる様子を表現しているのかもしれない。

国土地理院の全国地図にも、オチ地名は、10カ所に載っている。

【ケンチョウ】

この小字は、石林川の両岸に一カ所ずつある。間にイグチサンビヤクメ（井口三百目）小字を挟んでいるが、地名発生時には、ケンチョウ小字は繫

がっていたものと思われる。石林川とその井水に囲まれた低湿地は水田になっているが、その南側の急傾斜地も含まれている。

ケンチョウとは何を意味しているのか。見当もつかない地名の一つ。

ケンチョウ（見丁）という言葉がある。「御修法の時、花香・乳木を取り出す僧の役名」（国語大辞典）をいう。しかし、「見丁役の僧侶が住んでいた土地」では、見慣れない役名で、これが小字名になることは無いと思われる。

ケンチョウ←ケミチョウ（検見町）の撥音便化した語で、「毎年の作物のできを検見することになっている区画」を意味すると考えるのはどうであろうか。チョウ（町）は、「土地の区切り」（広辞苑）である。近くにはミキリダ小字もあって、同じような解釈になっている。この付近の河川はたびたび氾濫や崩壊を繰り返して、貢租を一定にしておくことができなかったのではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、35カ所もの記載があるが、宛てられている漢字は、すべて「県庁」になっている。

【半ノ田】

ハンノタ。

この小字には、現在、石林川から引いた井水が流れている。

ハンノタ（半ノ田）は、ハンノウタ（半納田）が転訛したものであろう。既に述べた半納田と同じように、解釈は二通りがある。

①「貢租の半分は領主に納め、残りの半分は寺院または神社の維持費に充てる費用とする水田」か。近くには、お寺もお宮もある。

②「災害その他により年貢が半減され、このことが恒久化した水田」か。近くには、ケンチョウ小字がある。

全国地図には、ハンノタ地名もハンノダ地名も載っていない。

【長通】

ナガドオリ。

この小字は、石林川から取った井水と道路に添った細長い小字である。

ナガドオリとは何か。二説を挙げる。

①ナガドオリ（長通）とは、字面通りで、「長い道のある土地」か。小字の形が細長いので、その中を通る道もまた、長くなっている。それがそのまま地名になるのか、という疑問もある。

②トオリには「新田」の意味があるという（語源辞典）。これが正しければ、ナガドオリとは、「長い新田ができた所」となる。現地には、細長い棚田が並んでいる。

【西をさ・中をさ】

ニシオサ・ナカオサ。

二つの小字は一部が繋がっており、中を石林川や井水が流れている、水田地帯である。

オサも聞き慣れない語であるが、オサ（長）で、「水田の一区画」（国語大辞典）を表すという。岐阜や静岡の方言であるという。近くのケンチョウ小字のチョウ（町）も同様な意味を宛がっている。

ニシオサは、「西の方にある水田の一区画」で、ナカオサの“中”に対応して“西”にしたものと思われる。正確には、北西側ということになるが。ナカオサは、「中心となる水田の一区画」で、地名発生時には、東側の水田にもオサ名がついていたと思われる。

国土地理院の全国地図には、オサ地名は、中・大字として、5カ所に記載

されている。

【ませ口・満世口】

マセグチ。

「ませ口」小字は二カ所、石林川と尾林南沢の合流点付近にあり、かつては繋がっていたものと思われる。「満世口」小字は、石林川上流部の側稜の尾根と谷を含む広い地域になっている。

マセグチとは、何か。語源辞典によって見ていきたい。

まずはマセグチ(ませ口)について。マセはマゼ(交)の転で、「谷筋の交わる所」をいう。クチ(口)は「川の合流点」のこと。合わせると、マセグチ(ませ口)とは、「谷筋が交わる所で、石林川と尾林南沢の合流点のある場所」となる。

マセグチ(満世口)は、マ(間)・セ(狭)・クチ(朽)で、「狭い谷で崩壊地、あるいは湿地のある所」をいう。クチは動詞クチル(朽)の連用形で名詞化した語で、崩壊地や湿地を意味する。

国土地理院の全国地図には、マセグチ地名は、中・大字として6件が挙げられている。

【外高とや・前高とや】

ソトタカトヤ・マエタカトヤ。

ソトタカトヤ小字は、石林川と尾林南沢川との合流点付近にあり、マエタカトヤは石林川の上流部にある、広い山地である。

トヤは、長野県飯田地方の方言で、「山地で狩をする時に獵師が隠れて待つ小屋」(国語大辞典)とあるが、ツグミなどの小鳥を捕らえるための霞網を近くの傾斜地に設置したのではないだろうか。二本の川の北西に開けた洞であることから、冬鳥のツグミ

が渡ってくるのを狙ったものと思われる。

今田のトヤバ小字も北～北西向き
の緩い傾斜地にあった。

タカトヤは、標高の高い所にあるトヤを意味するものと思われる。

ソトタカトヤは、はっきりはしなしが、「外にある高いところのトヤ」の意か。“外”というのは、部落から少し離れている所をいうのだろうか。

マエタカトヤは、もっと山の奥になるので、“マエ(前)”の意味がよく分からないが、時間的な“前”で、「以前に、トヤを設けたことのある所」と解釈した。ここでも石林川が北西に向かって流れ下っている。しかし、どうしてトヤを移したのかは、わからない。

国土地理院の全国地図には、タカトヤ地名は3件が挙げられている。

【下ぶめん】

シモブメン。

この小字は、尾林南沢川の両岸にワタリハヤシノコシ小字の東隣になる。

シモブメンは村誌にあるように、シモブクメンを写し間違えたものと思われる。すなわち、シモブクメン(下仏具免)で、前に触れている。「下の方にある、仏に供える物などの費用に宛てるために貢租が免ぜられている土地」である。カミブメンもあるが、ブルーマップには、地籍番号が欠けているため、位置を決めることができなかった。

寺というのは、尾林の南の寺が宛てられる。

全国地図には、当然のことながら、ブメン地名の記載はない。

【通り洞】

トオリボラ。

この小字は、千代の荻坪との境界に

ある。荻坪との境界が長い尾根になっており、そこに道路が通っている。

トオリボラとは、「尾根筋に添った道路のある小溪谷」を意味するのであろう。

全国地図にはトオリボラ地名は載っていない。

【南沢・南沢道下】

ミナミザワ・ミナミサワミチシタ。

これらの小字は、尾林南沢川の最上流部になる。

尾林の中心部から見ると、南の方にあるので、ミナミザワと名付けられた。すなわち、「南の方にある沢」ということになる。

ミチシタがよく分からないが、ミチ（道）は谷の田んぼの両側にある道のこと。シタ（下）は、下方では意味をなさないので、シタシタ←副詞シトシトの転で「湿地」をいう。

ミナミサワミチシタとは、「南沢小字の近くで、道路付近に添って湿地がある所」を意味するか。

国土地理院の 25,000 分の 1 全国地図には、ミナミザワ地名が 40 カ所、ミナミサワ地名も 28 カ所と多い。

【岩崩】

イワナギ。

この小字は、尾林南沢川最上流部の谷にある、小さな小字で、アカサカ小字に囲まれている。

イワナギとは、「崩壊地で岩が出ている所」をいうか。

全国地図には、イワナギ地名が、中・大字として、1 カ所に記載がある。

【赤坂】

アカサカ。

この小字は、千代の大郡と境を接している、大きな面積をもつ小字である。

アカサカとは何か。

アカ（赤）の解釈が二通りある。①土の色が赤いのではないか、ということ。村誌によれば、龍江の最高位の段丘上には赤色風化した 2m 以上の堆積層があるという。この土の色か。②アカ（垢）とか、アカ（闊伽）で、「湿地」をいう（語源辞典）。

サカ（坂）にも二つの解釈が可能である。①サ（狭）・コ（処）が転訛した語で、「谷間」を示す（語源辞典）。②サカ←サカヒと転じたもので、千代との境界にあることを意味する。

以上の組み合わせから、二説にしぼっておきたい。

①アカサカとは、「湧水の多い谷のある所」とする。

②アカサカとは、「赤色の土のある境界地」か。

【鍛冶田】

カジタ。

この小字は、尾林南沢川と石林川に懸かる、ほぼ北向きの傾斜地にある。一部は、尾林南沢川が開いた洞にある水田も含む。

カジは、鍛冶だから、鉄を鍛えていた場所である可能性は全くない、とはいえない。しかし、この小字は、北西斜面になっているので、風を利用することはなかったのではないか、と思われる。

カジは動詞カジル（搔。嚙）の語幹の転で、「引っ搔かれたような地形」をいう（語源辞典）。

カジタ（鍛冶田）とは、「崩壊地のある水田」または「崩壊地のある土地」ということになる。

国土地理院の全国地図には、カジタ地名が、中・大字として 4 件挙げられている。

【若林】

ワカバヤシ。

この小字は、石林川の最上流部の山地にある。

ワカは形容詞ワカイ(若)の語幹で、「みずみずしい」→「湿地」を示す(語源辞典)。

ワカバヤシ(若林)とは、「湧水が流れている樹木の茂った山地」であろう。

なお、ワカバヤシには、「新しい植林地」を指すこともあるが、この場合にはどうであろうか。

国土地理院の25,000分の1全国地図には、ワカバヤシ地名は、中・大字として、36カ所に記載されている。川路にもワカバヤシ小字はある。

【瘦松】

ヤセマツ。

この小字は、千代の田力との村境にある。二方を尾根を通る道に囲まれている。

赤松は痩せ地に生える。ヤセマツとは、「痩せ地に生える赤松」という解も無いではないが、しっくりこない。

ヤセマツ(瘦松)とは何か。語源辞典に依って、二つの解釈を挙げる。

①ヤ←イハ(岩)の約。セはセ(背)で山の峰をいう。マツ(松)はマタ(股)の転で、分かれていること。合わせて、ヤセマツとは、「岩肌の出ている側稜が、いくつかの股に分かれている所」をいうか。

②ヤ←ヤ(弥)で数の多いことをいう。セ(瀬)は水流をいう。マツはマタ(股)。ヤセマツとは、「多くの湧水を集めた小川があり、丘陵を巻くように流れている所」か。

全国地図には、ヤセマツ地名は無い。

【峠田山】

トウゲタヤマ。

宮沢の中心地から東の方の村境に近い山地にある、広い面積をもった小字である。これより少し西にも小さなトウゲタヤマ小字がある。

トウゲタヤマとは何を意味しているのか。これも二説を挙げる。

①トウゲタヤマ(峠田山)は、文字通りに解釈すれば、「峠のある所の付近の山地」か。トウゲ(峠)・タ(処)・ヤマ(山)である。

②トウはト(利。鋭)の長音化で、山頂をいう(語源辞典)。ゲタ←キダ←ヒダ(襞)で、「襞のようになって山が続いている所」をいうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、トウゲダ地名は4カ所にあるが、トウゲタヤマ地名は無い。

【宮沢入・宮澤入】

ミヤザワイリ。

これらの小字は、宮沢の中心部から北東の方、宮沢川上流部にある。「宮沢入」小字は二カ所にあり、小さな小字の方はさらに宮沢川上流部になる。

ミヤザワイリとは、字面の通りで、「宮沢川の上流部周辺の土地」をいう。

なお、全国地図には、ミヤザワイリ地名は記載が無い。

【鬼石】

オニイシ。

この小字は、尾林東方の山中にある。側稜の尾根と両側の谷を含む。

オニ(鬼)とは、「奇岩怪石などの露出した地形」をいう(語源辞典)。

鬼石は、「山中に、奇怪な形をしている岩石がある場所」であろう。その奇怪な形を鬼に見立てたものと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、5カ所に、オニイシ地名が載っている。

【烏帽子岩】

エボシイワ。

この小字は、オニイシ小字と石林川の間にある。これもかなり広い面積になっている。

エボシイワ（烏帽子岩）とは、字面の通りで、「烏帽子の形をした岩のある所」をいう。

この種の岩は多いらしく、国土地理院の全国地図にも、中・大字として、31カ所も挙げられている。

【東洞】

ヒガシボラ。

この小字は、尾林南沢川と石林川による谷とその北東側の傾斜地からなる。

ヒガシとは何を基準にしているのか。それは、尾林の北の寺院か、テラノウシロ小字にあるお宮のどちらかであろう。

ヒガシボラとは、「北の寺院か尾林東部にあるお宮の東の方にある溪谷のある所」をいう。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、ヒガシボラ地名が6カ所に記載されている。ホラが付いているのに、意外に多い。

【寺ノ後】

テラノウシロ。

この小字は、石林の中心部から東の山地に跨がる、長い小字である。マセグチ・オニイシの丘陵部の末端になっている。

テラノウシロ（寺ノ後）とは、文字通り、「尾林の北の寺院の後背地」を意味する。この小字の西側の石林川氾濫原に北の寺院はあったものと思われる。

全国地図には、テラノウシロ地名は載っていない。

【とふげん田】

トウゲンダ。

この小字は、二つのトウゲダヤマ小字の間にある。

トウゲンダ←トウゲダの転で、「峠田山」と同じような意味になる。

しかし、ここで別解を挙げておきたい。トウゲンダは、「陶元所」もありうる。尾林焼の原料をこの付近から採っていた可能性もあるのではないかと勝手な想像をしている。

とすると、先に述べているトウゲダヤマ（峠田山）の解釈も異なってくることもある。

トウゲンダは、全国地図には無い。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

この小字は、県道米川・飯田線沿いの、宮沢の和世田神社の南側にある。

ミヤノマエは、字面通りに「お宮の前の土地」であり、当然のことながら、お宮というのは、宮沢の和世田神社をいう。

ミヤノマエ地名は、どこにでもある地名で、全国地図でも、中・大字だけで、94カ所にも記載がある。

【外山】

ソトヤマ。

この小字は、宮沢の中心地で、和世田神社境内の西隣にある、小さな小字である。南隣にはミヤノマエ（宮ノ前）小字がある。

ソト（外）は、「囲みおおわれているものの外部」（国語大辞典）をいう。ここで“囲みおおわれているもの”というのは、和世田神社とその境内をいうものと思われる。

ソトヤマ（外山）とは、「神社境内の外にある林地」であろう。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、ソトヤマ地名は 12 ヲ所に記載があるが、「外山」地名は 42 ヲ所にもなる。トヤマなどの呼び方が混じるからである。

【峠畑】

トウゲハタ。

この小字は、ニシガホラ小字とヒラハタキタボラ小字という二つの洞に挟まれている。側稜の末端部になる高地にある。

この小字に道路は現在も無いので、トウゲ（峠）は、「山の坂道を登りつめた最も高い所」ではなくて、これが転じた、単なる「山」を意味する（以上は国語大辞典）ものと思われる。

トウゲハタとは、「山地にある畑」か。現在は近くに果樹園がある。地名発生当時には、宮沢の中心部に近いので、耕作されていたと思われる。

なお、全国地図には、トウゲハタ地名は記載が無い。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は、宮沢の側稜の尾根の、一つの頂上部（お宮がある）から下る洞にある。タテホラ・スゲノホラ・ヨシガホラ・ニシガホラの洞小字群とテンジン小字に囲まれている。

イドイリ小字は、井戸＝井＝水流で、湧水を下流に送り出している。

イドイリ（井戸入）とは、「自然水が湧き出ている所」をいうか。流水を遡った、水が湧き出ている場所を指しているものと思われる。

なぜか、全国地図には記載が無い。

【平畑北洞】

ヒラハタキタボラ。

この小字は、和世田神社の上流方向にある洞で、緩傾斜地は、現在棚田になっている。

ヒラ（平）は、「山の傾面」（国語大辞典）をいう。諏訪・静岡・岐阜・愛知など全国的な方言になっている。古事記のヨモツヒラサカのヒラから出ているらしい、という。

ヒラハタは、「傾斜地に造成された、水田も含めた耕作地」をいうか。

キタボラ（北洞）は、「北の方にある洞」で、基準になっているのは、和世田神社であろう。

ヒラハタキタボラは、「和世田神社の北の方にある、傾斜地に造られた耕作地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヒラハタは 12 ヲ所。

【屋敷添】

ヤシキゾイ。

この小字には、現在、宮沢生活改善施設がある。和世田神社に接している。

ヤシキ（屋敷）の所有者は、和世田神社に関わる神官か、あるいは宮沢の有力者であったに違いない。

ヤシキゾイとは、「お宮の神官など有力者の屋敷の周辺地」を意味する。

全国地図には、ヤシキゾイ地名もヤシキゾエ地名も記載が無い。

【トガ久保】

トガクボ。

この小字には、現在、龍江 4 区公民館があり、宮沢川に添っており紅葉川との合流点もあり、宮沢の中心部になっている。

トガには、「川沿いの野」の意がある（語源辞典）という。しかし、語源がはっきりしていない。国語大辞典には、トガル（尖）には、「磨カルの義」とあるので、動詞トガルの語幹とみていいのではないだろうか。

トガクボとは、「川沿いにある窪地」を意味するものと思われる。この小字は、宮沢川に添っており、紅葉川にも

接している。

なお、全国地図には、トガクボ地名は載っていない。

【たな】

タナ。

この小字は、イナバ・ヤシキゾイ・トガクボ・オチ・ヒラハタキタボラの小字に囲まれている。

タナとは、「棚状になっている段丘」をいう。現在は棚田と果樹園になっている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、6カ所に、タナ地名が記載されている。

【にんそ】

ニンソ。

この小字は、イドイリ・オチ・マエダなどの小字に囲まれており、平坦部と傾斜地がある。

ニンソとは何か。全国地図にも無い、珍しい地名のようである。二説を挙げたい。

①ニン←ニヒ←ニ（丹）・キ（川）の転で、「赤土のある川」をいう（語源辞典）。ソは場所を表す接尾語。ニンソとは、「赤い土があって川が流れている所」をいう。

②ニン←ニブ（鈍）と転訛した語で、「緩傾斜地」（語源辞典）を表す。ニンソとは、「緩い傾斜地になっている所」となる。

【ソ子】

ソネ。

この小字は、宮沢川の二本の支流に挟まれた尾根の末端部にある。

ソネとは、「山の峰の一段低い所で、また一丘を作っている所」（国語大辞典）という常陸の方言である語が、現地にはよく合っている。

ソネ地名は各地にあり、全国地図に

も、中・大字として44カ所で採り上げられている。

【天神】

テンジン。

この小字は、和世田神社の北の方にあり、イドイリ小字とスゲノホラ小字に挟まれている。

テンジン（天神）とは、菅原道真を祀った場所をいうことが多い。かつてはこの小字に天神様とか天満宮とか呼ばれていた祠があったと思われるが、未確認である。全国地図には、123カ所にテンジン地名がある。

【菅ノ洞】

スゲノホラ。

この小字は、テンジン小字とウバタ小字に挟まれている。

スゲノホラ（菅ノ洞）は、文字通りに解せば、「カヤツリグサ科のスゲが目立つ洞」となるが、別解も示しておきたい。

スゲは動詞スグ（嵌）の連用形が名詞化した語で、「はめ込むこと」（国語大辞典）を意味する。スゲノホラとは、「側稜にはめ込まれたような洞」となる。洞が傾斜地に食い込んでいるような地形を、このように表現したものと思われる。珍しい地名ではないだろうか。

そのためかどうか、全国地図に、スゲノホラ地名は記載されていない。

【ウバ田】

ウバタ。

この小字は、スゲノホラ小字の東隣にあり、宮沢川の上流側になる。

ウバタとは何か。語源辞典によってみていきたい。

ウバは動詞ウバフ（奪）の語幹で、「崖地」をいう。ウバタとは、「崖地のある所、または田んぼ」ということ

になる。現在は水田にはなっていないが、現地に棚田らしい痕跡をみることはできる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、一カ所が記載されている。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は、ウバタ小字の宮沢川上流側にある。現在は半分ぐらいの土地が水田になっている。

マルヤマは、「お椀を伏せたような円形の山」であるが、このような山は、マルヤマ小字の中には無い。北東隣のナガハタ小字に、円形頂部の丸山が見える。だから、マルヤマとは、「頂部が円形をした丸山が見える所」ということになる。

「丸山のある所ではなく、丸山の見える所」というのは、三穂にも、「藤山のある所ではなく、藤山が見える所」にフジヤマ小字があった。

そういう意味でも特異なマルヤマ地名といえるであろう。

【横畑】

ヨコハタ。

この小字は、マルヤマ小字の北隣にあり、宮沢川のさらに上流側になる。現在でも、道路の低地側は耕作地になっている。

ヨコハタとは何か。これも簡単なようで、なかなか難しい。

ヨコ(横)←ヨケで、動詞ヨケル(避除)の語幹が転じた語。下伊那地方では、「崖際の通路」をいう(語源辞典)。ハタ(畑)は、ハ(端)・タ(処)で、「周辺」を意味する(語源辞典)。

以上から、ヨコハタ(横畑)とは、「崖際の通路の周辺部」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヨコハタ小字は7カ所に記

載されている。

【長畑】

ナガハタ。

この小字は、ヨコハタ小字の上の方にある。丸山にふさわしい円頂部のある傾斜地で、現在は耕作地にはなっていない。

ナガ(長)は、動詞ナガル(流)の語幹で、「傾斜地」をいうか。あるいは、ナギ(薙)の転で「崩壊地」をいうか。ナガハタの解には二説となる。

全国地図にはナガハタは21カ所に。

【ぬかり洞・ぬかり洞北洞】

ヌカリボラ・ヌカリボラキタボラ。

これらの小字は、清水川と宮沢川の間、山神段丘の西側の側稜になっている。ナガハタ小字の南東側の隣になる。ヌカリボラキタボラ小字は、ヌカリボラの北側に二カ所ある。

ヌカリボラは、字面通りの解釈であれば、「湿地の多い洞」になるが、現地は側稜の頂部を含む傾斜地で、湿地であるとは言い切れない。

そこで別の解釈も挙げておきたい。ヌカリ←ヌキ(抜)・カリ(刈)の転で、「崩壊地形」をいう(語源辞典)。ヌカリボラとは、「崩壊地のある洞」ということになる。当たり前すぎるだろうか。

ヌカリボラキタボラは、「ヌカリボラ小字の北にある洞」であろう。

なお、全国地図にはヌカリボラ地名は記載されていない。

【柿北洞】

カキキタボラ。

この小字は二カ所にある。一つは、ヌカリボラ小字の南隣にある。山神段丘から宮沢川に下る斜面の中ほどにある。もう一つは、山神段丘の東端にある。

カキキタボラとは何か。二説。

①カキ(柿)はカキ(垣)で、屋敷のある区画。キタ(北)は、「山神」の北とする。以上から、カキキタボラは、「山神の北の方にあつて、屋敷あるいは屋敷あとのある洞」か。現在も屋敷があるが、東の小字には、住居跡は見えない。

②カキ=カケ(欠)と同じ「崖地」をいい(語源辞典)、キタ←キダ(段)で、「段丘」のこと。合わせて、カキキタボラとは、「崖地があり、段丘面をもった洞」か。二つのカキキタボラをみると、こちらの方を持ちたい。

カキキタボラ地名は、全国地図には記載が無い。

【山ノ神】

ヤマノカミ。

この小字は二カ所にあるが、山神段丘の西端にあり、その中を宮沢川が流れている。この付近には、「山神南峠」「山神南山峠下」「山神日南」「山の神日南」などの小字が集まっている、いわゆるヤマガミ小字群がある。

山の神は、山を支配する神であるが、農民の山神は、春には里に降りて田神に変わり、秋には山に戻って山神となる。しかし山が瀬木の人々の山神は田神とは関係がない。木地屋の祀る山神は夫婦神だという。(改訂総合日本民俗語彙)

この宮沢の山神が、田神か夫婦神かはわからない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヤマノカミ地名は70カ所にもなる。

【山ノ神日向】

ヤマノカミヒナタ。

『下伊那地名調査』では、ヤマノカミヒミナミ(山ノ神日南)となってい

るが、村誌に従うことにした。

この小字は二カ所にあるが、ヤマガミ小字群の一つで、いずれも南西方向に傾く斜面になっている。

ヤマノカミヒナタとは、「山の神を祀る場所で日当たりのいい所」を意味する。現に、これらの小字は、ヤマガミ小字群の中では日当たりのいい所にある。

全国地図では、ヒナに「日南」を宛てている所が33カ所もある。

【入】

イリ。

この小字は、山神段丘の東端の登り斜面にある。堤もある。

イリとは、「山神または山神段丘の奥の方」をいうか。

国土地理院の全国地図には、イリ地名は、中・大字として22カ所に挙げられている。

【流洞】

ナガレボラ。

この小字は、山神段丘の南端で、宮沢川上流部にあたる。

ナガレ(流)は、動詞ナガル(流)の連用形が名詞化した語で、「なだらかな傾斜の長く続く地形」のこと(語源辞典)。あるいは、「水路」のこともいう。

ナガレボラとは何か。二つの解釈を挙げておきたい。

①「長い緩傾斜地になっている洞」をいう。

②「水路のある洞」のこと。水流のない洞も無いだろうとは思いつながら、挙げておく。

なお、ナガレボラ地名は、全国地図には記載が無い。

【山神南峠・山神南峠下】

ヤマノカミミナミトウゲ・ヤマノカ

ミミナミトウゲシタ。

これらの小字は、ヤマノカミ小字の南西側にある。なお、ナガレダ(流田)地名が北隣にある。

ヤマノカミミナミトウゲ(山神南峠)とは、「ヤマノカミ小字の南の方にある山」を意味する。トウゲには「山」の意がある(国語大辞典)。

ヤマノカミミナミトウゲシタ(山神南峠下)とは、「山神南峠の下の所」か。山神南峠より少し低くなっている。

【山神西】

ヤマノカミニシ。

この小字は、南側にある方のヤマノカミ小字の西隣にある。

ヤマノカミニシとは、文字通り、「ヤマノカミ小字の西側にある土地」を意味する。

【宮澤入】

ミヤザワイリ。

この小字は、宮沢の中心部から北東方向に入った道路沿いにある。周辺には、ショウブガホラ・マツガホラ・ヨコハタ・ナガハタなどの小字がある。

ミヤザワは、「お宮のある沢」で、お宮とは和世田神社であろう。そこから宮沢川を遡行した所に、ミヤザワイリ小字がある。

ミヤザワイリとは、「宮沢川を遡行した奥の土地」をいう。

全国地図には、ミヤザワイリ地名は無い。

【松ヶ洞】

マツガホラ。

この小字は、ミヤザワイリ小字の下流側の隣になっている、大きな小字である。

マツガホラとは、字面から解釈すれば、「赤松の多い洞」ということになる。しかし、これだけではもの足りな

いので、もう一つ、解釈を付け加えたい。

マツ(松)←マタ(股)の転じた語で、「谷が二股状に分かれた分岐点のある所」(語源辞典)も考えられるが、どこにでもありそうな地名になってしまう。

不思議なことに、全国地図には、マツガホラ地名は一つも記載されていない。

【タル下】

タルシタ。

清水川に沿った長い小字で、上流側にはナギタ小字が、下流側にはホッタ小字がある。

タルシタとは何か。

タルはタル(垂)で、下伊那地方の方言で、「谷川の滝となっている所」をいう(語源辞典)。

シタ(下)は、そのままでは、理解できないので、シ(石。岩)・タ(処)としたい(語源辞典)。

以上から、タルシタとは、「清水川が滝のようになっている所もある、石や岩の多い場所」としたい。

全国地図には、タルシタ地名は、一つも載っていない。

【興右衛門堀田・与右衛門堀田クロ石】

ヨエモンホッタ・ヨエモンホッタクロイシ。

ヨエモンは固有名詞であろう。

宮沢中心部の西方にある。ホッタがホッタクロイシを挟んで、南北の両側にある。東西に長い小字である。ほとんどが側稜の尾根から北側の清水川に下る斜面の山地にある。

ホッタ(堀田)は、「新たに開かれた土地」(国語大辞典)であろうが、現在、耕作地が全くないのが気になるが、地名発生当時には、焼畑として利

用されていたのではないだろうか。

これを嫌って「川が掘った所」とするのは、より通じにくい感じがする。

クロイシは、開墾によって出てきた石を耕作地のクロ（端）に積み上げた物ではないだろうか。

以上から、次のように結論した。

ヨエモンホッタは、「与右衛門が焼畑にした土地のある所」であり、ヨエモンホッタクロイシは、「与右衛門が焼畑にした土地で、周囲に耕作の邪魔になる石を積み上げた所のある土地」と考えたい。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ホッタ地名が 18 ヲ所、クロイシ地名が 33 ヲ所、記載されている。

【ホツ田・空久保堀田・中ノ堀田】

ホッタ・ソラクボホッタ・ナカノホッタ。

これらの小字は、宮沢～雲母の山地で清水川の上流部にあり、ヨエモンホッタに繋がっている。

ホッタは、既に触れたように、新たに開墾された土地であるが、それが、後で焼畑として耕作されるようになったのではないだろうか。ホッタという語が即焼畑とつながる道筋は見てこないのであるが、現地をみるとそう考えざるをえない。ここのホッタも同様であろう。

ソラクボのソラ（空）←ソリで焼畑をいう（語源辞典）。クボ（久保）は谷のことか。ソラクボホッタとは、「焼畑が行われていた谷間」としておきたい。

ナカノホッタは、「焼畑地帯の中ほどにある土地」か。

【清水入宮山】

シミズイリミヤマ。

この小字は、ホッタ小字群の近くにある。地籍は雲母か。

ミヤマ（宮山）は「神社の所領である山」（国語大辞典）。シミズイリ（清水入）とは「清水川の最上流部」か。

シミズイリミヤマとは、「清水川最上流部にある、雲母浅間神社の所領である山」をいう。この小字と浅間神社の直線距離は 400m ほど。

【下ノつぼ】

シモノツボ。

この小字は雲母にあり、ニシガホラワカボラ小字に囲まれた小さな小字である。現在は棚田状にはなっているが、荒地である。

シモ（下）は、動詞シモル（滲）の語幹で「湿地」のこと（語源辞典）。シモはシモ（霜）も考えられるが、付近には、桑園も果樹園もないので、控えることにした。ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「坪穴状の谷」か。

以上から、シモノツボとは、「湿地となっている坪穴状の谷」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シモノツボ地名は 3 ヲ所に記載がある。なお、シタノツボ地名は載っていない。

【三年田】

サンネンダ。

雲母の清水川に沿った小字で、側稜の尾根のいくつかの最頂部と谷からなる広い小字である。谷には水田もあり、尾根の中腹には墓地もある。

サンネンダ（三年田）とは何をいうのだろうか。はっきりはしないが、次のように想像した。

この山地の中の洞にも、湧水に頼らざるを得ないような水田でもつくるのが奨励されていた。そこで、三年は免租されることを条件に申し出た。

あるいは、すでに隠田として耕作されていた田について、三年免租を条件に租税対象とすることを認めた、ということがあったかもしれない。

以上のことから、サンネンダとは、「三年間、免租になっていた水田」ではないかと考えたが、どうであろうか。

しかし、全国地図には、サンネンダ地名が、一件もないということが気になる。

【なぎ田】

ナギタ。

この小字は、雲母の清水川沿岸の氾濫原が広がった場所にある、小さな小字である。現在は、堤や水田がある。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語で、崩壊地をいう。

ナギタとは、「崩壊地にある水田」をいう。

国土地理院の全国地図には、ナギタ地名が、中・大字として2カ所に記載がある。

【セウブヶ洞】

ショウブガホラ。

この小字も、雲母の清水川沿岸にあり、ナギタ・サンネンダ・ミツサワ・ミツサワショウブガホラなどの小字に囲まれている。小字内を県道天竜峡停車場・下平線が通っている。

ショウブハ、シミズが転訛した語で細流をいう（語源辞典）。

ショウブガホラとは、「湧水の細流が、清水川に流れ出る所」か。

全国地図にはショウブガホラ地名は無い。

【三沢】

ミツザワ。

この小字の中を、県道天竜峡停車場・下平線が通り、清水川が流れている。現在は水田が主で、桑園もあるが、

大部分は傾斜地と荒地地になっている。

ミツザワとは、「三つの谷が合流している所」を意味するものと思われる。三つの洞は、清水川の本流と支流が開析したもの。

全国地図には、中・大字として、ミツザワ地名は7カ所にある。

【トヨガ洞】

トヨガホラ。

この小字も雲母で、清水川支流の最上流部に、二カ所ある。

トイ（樋）のことをこの地方ではトヨという。トヨガホラとは、「小川が流れている所」を意味する。

トヨガホラとは、「小川が流れている小さな谷」ということになる。

全国地図に、トヨガホラ地名は載っていないが、トヨもホラも伊那谷南部に多い地名であるためであろう。

【水口・水ノ口】

ミズクチ・ミズノクチ。

ミズクチ小字は、県道天竜峡停車場・下平線に添う、洞の平坦部と傾斜地の境地にある。雲母中心部より南の方になる。

ミズノクチ小字は、ミズクチ小字の東の方にあり、トヨガホラ小字の中に含まれている。

ミズクチとは、「湧水が出る所」をいう。斜面の麓にあり、現在でも住居と水田になっている。

ミズノクチ小字は、トヨガホラ小字にある堤のすぐ下流側にある。ミズクチとは、「堤からの水の取り入れ口」をいう。ここから取り入れた水は、下流側の水田に引かれたに違いないが、現在は棚田状の荒地地になっている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ミズノクチ地名は5カ所に、

ミズクチ地名は6カ所、「水口」地名は37カ所に記載されている。

【ウロ】

この小字は、ミズノクチ小字の東隣にあり、広さも同じくらいの、小さな小字である。

ウロはウロ（虚）で、「内部がからになっている所。ほらあな」（国語大辞典）をいう。現地には、その洞穴はないが、地名発生時の中世末～近世初頭には、実在したのではないだろうか。現在は、崩れてふさがってしまったか、あるいは、崩れる心配があるから、埋められてしまったか。

国土地理院の全国地図には、ウロ地名が一カ所、中・大字として記録されている。

【ヒカゲバタ家下】

ヒカゲバタイエシタ。

この小字も、雲母の中心部から離れた南の方にある。

ヒカゲバタは、「日当たりのよくない所の周辺部で、居住地にもなっているが、湧水もある所」か。シタ（下）がはっきりしないが、「下の方」では現場に合わないので、「湧水のある所」とした。副詞シタシタはシトシトに通じ、「しっとりとして湿っている様子」をいう（語源辞典）。

当然のことながら、ヒカゲバタイエシタ地名は、全国地図には載っていない。

【トウノ下】

トウノシタ。

この小字は、ヒカゲバタイエシタ小字の北側にある。側稜の最頂部と西側の傾斜地からなる。

トウノシタとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①トウはト（鋭）の長音化した語で、

「山頂」をいう（語源辞典）。トウノシタとは、「側稜の高い頂部とその麓までの傾斜地」をいうか。

②トウは動詞タフス（倒）の語幹タフで傾斜地をいう。トウノシタは、「傾斜地の麓で湧水のある所」か。

全国地図には、3カ所に記載がある。

【ウラ】

この小字は、竜東中学校の東の方で、フカダ・トウノシタ・キタボラなどの小字に囲まれていて、鼬ヶ沢川支流の最上流部にあたる、小さな小字である。

ウラとは、「川の上流部」をいう。まさに鼬ヶ沢川の最も奥の地になっており、現地には合っている。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として、51カ所にも記載がある。

【いな口】

イナクチ。

この小字は二カ所にある。一つは竜東中学の南隣にある大きな小字で、もう一つは、もっと南の方にある小さな小字である。これらの二つは、間に入ったミツザワ小字に分断されている。

イナクチとは何か。

イナは井（井）・ナ（場所を示す接尾語）で、「水路とか川に沿った地」（語源辞典）であるという。

イナクチとは、「湧水を集めて、鼬ヶ沢川の支流が流れ始める所」を意味するのであろう。

全国地図には、イナクチ地名は記載されていない。

【ふか田】

フカダ。

この小字は、雲母浅間神社の東隣にある、小さな小字で、ウラ小字が南側に接している。

今田にも、フカダ小字があり、「泥の深い田」とした。この雲母のフカダ

も同じ解釈が成り立つと思われるが、現地の状況から、ほぼ似たような、もう一つの解釈を挙げておきたい。

フカ（深）←動詞フケル（更）の連用形が名詞化した語で、「低い湿地」をいう（国語大辞典）。さらに、フカ田はフケ田の略であるとしている。

国土地理院の全国地図には、フカダ地名が、中・大字として、15カ所に記載されている。

【北洞】

キタノホラ。

雲母の浅間神社の東方にある広い小字である。トウノシタ・トヨガホラ・タルシタ・ネコマタシヒヤクメなどの小字が、周辺にある。

段丘上は果樹園、谷には棚田が並んでいる。

キタボラを一般的に解釈すれば、「北の方にある洞」となるが、方角に基準になる、南の方に、神社か寺院があれば、それでいい。しかし、南の方には寺社は無い。

そこで、次のように考えてみた。

キタ（北）＝キダ（段）で、キタノホラとは、「棚田のある谷」を意味する。現在は果樹園となっている段丘上の広い緩傾斜地があるが、地名発生時には、コメ作りが重視されていたのであろうか。

国土地理院の全国地図には、キタノホラ地名は無いが、キタボラ地名は3カ所、キタホラ地名は1カ所に記載がある。

【ソデ】

この小字の中を県道天竜峡停車場・下平線が通っている。雲母浅間神社の北東の方にある。ハラ小字に囲まれているが、このハラ小字にも神社がある。

ソデとは、ソデ（袖）で、上伊那では方言で「山の峰続き」（語源辞典）をいう。この付近には長円形の山があり、その西側の峯にはお宮があり、その東側の峯がソデ小字になっている。

全国地図にもソデ地名は8カ所に。

【雲母沢・きら沢】

キララサワ・キラサワ。

キララサワ小字は、雲母沢川の上流部にあり、県道天竜峡停車場・下平線の東側にあり、小字内には、米川簡易水道尾科配水池がある。

キララサワとは、文字通り、「雲母のある沢」のこと。

キラサワ小字は、キララサワ小字の200mほど北にあり、これも雲母沢川に接しており、同じように、「雲母のある沢」と解することができる。

全国地図には、キララサワ地名もキラサワ地名も載っていない。

【樽下】

タルシタ。

この小字は、県道天竜峡停車場・下平線の東側にあり、雲母沢川に右岸で接する。キタボラ・ユウサナリイワ・ソデ・タルドなどの小字に囲まれている。

清水川にもタルシタ（タル下）小字があって、「清水川が滝のようになっている所もある、石や岩の多い場所」とした。

ここのタルシタは、ほぼ似たような意味になるが、「雨の時には、小さな谷が、滝のようになる所で、石や岩の多い所」としておきたい。

【樽戸】

タルド。

この小字は、タルシタ小字の北側、傾斜地の上の方になる。周辺には、ユウサナリイワ・キタボラ・タルシタ小

字がある。

ド(戸)は、「水流の入り口」をいう。タルド(樽戸)とは、「雨の時には滝のように流れる水の入り口のある所」か。

全国地図には、タルド地名も記載は無い。

【いうさ成岩】

ユウサナリイワ。

この小字は、県道天竜峡停車場・下平線と雲母沢川に添う、長い小字である。周辺には、シチジュウメ小字群・キララサワ・キララ・コガイトなどの小字がある。

わかりにくい地名であるが、次のように考えた。

ユウはユ(溝。泉)の長音化した語で、「川から水を引くために築いた堤」をいう(語源辞典)。サは場所を示す接尾語。ナリイワ(成岩)はナリイワ(鳴岩)の転で、「雨の時など川音が高くなって反射音が大きくなる岩」としたい。

ユウサナリイワとは、「水田に水を引く堤が並んでいる所で、雨の時など沢の音が反射して大きく聞こえる岩のある所」と解釈する。

これだけ複雑な地名は、さすがに全国地図には、記載されていない。

【雲母】

キララ。

この小字は、雲母沢川の支流の最上流部にある小さな小字。現在は水をたたえた堤がある。シチジュウメ・ユウサナリイワ・ツメガホラ・シモバタなどの小字に囲まれている。

この小字から、キララ中字の地名が生まれている。

キララは、雲母のこと。この付近は花崗岩帯だから、雲母がどこにでもあ

るが、ここの雲母は特に目立っているのであろう。

全国地図には、キララ地名は、中・大字として、「時又」を含む二カ所が挙げられている。

【下畑】

シモバタ。

この小字は、県道天竜峡停車場・下平線の西側にあり、キララ小字とヤマフジヅカ小字に挟まれている。

シモバタを「下の方にある畑」と考えると、何に対して下の方なのか、はっきりしない。

そこで、シモ(下)はシモ(霜)としたい。シモバタとは、「霜が降りやすい焼畑」となる。冷気が流れてくる地形になっている。現在は山林で耕作地となっていないのが、この説の欠点であるが、「下の方」とするよりは分かり易いと思っている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、6カ所にシモバタ地名が記載されている。

【瓜ヶ洞・七十目うりが洞】

ウリガホラ。『下伊那地名調査』には、ツメガホラ(瓜ヶ洞)となっているが、村誌に従った。後はシチジュウメウリガホラ。

ウリガホラとは、何を意味するのか。二つの仮説を挙げる。

①ウリ(瓜)←動詞ウルム(潤)の語幹が転訛したもので、「しめりけを帯びる」(国語大辞典)の意。ウリガホラとは、「湿地のある小溪谷」をうい。

②ウリ←ウレ(末)の転訛した語で、「峯」の意(語源辞典)。ウリガホラとは、「尾根の頂上部がある小溪谷」を意味する。

シチジュウメウリガホラとは、シチジュウメ(七十目)小字の近くにある

ウリガホラを意味するものと思われる。

全国地図には、ウリガホラ地名は記載されていない。

【佐々木が洞】

ササキガホラ。

この小字は、雲母の北部にあり、尾科との境にあると思われる。周辺には、ナカヤ・イカダヤマ・ウリガホラ・シチジュウメなどの小字がある。

ササキとは、「小高い丘」(語源辞典)をいう。

ササキガホラとは、「小高い丘の近くにある谷」を意味する。この小字の南の方には小高い丘があり、北の方は堤のある洞となっている。

全国地図には、ササキガホラ地名は載っていない。

【筏山】

イカダヤマ。

この小字は、樋ヶ沢川の最上流部にあり、雲母の雲母沢川との分水嶺に近い広大な地域になっている。

今田のイカダヤマ(筏山)小字は、西の方になるが、川は清水川の方が近い。

今田のイカダヤマについては、

- ①「筏に組む材木を伐採していた山」
- ②「険しい山」の二通りの解釈を示したが、ここ雲母のイカダヤマは、①の解釈を採りたい。材木は樋ヶ沢川を流したものである。

【猴倉】

サルクラ。

この小字は、雲母のイカダヤマ小字の南西側にあり、米川簡易水道雲母配水池がある、広い洞になっている。

今田にもサルクラ小字があり、「断崖とか山の多い所」とした。この雲母のサルクラは、同じような解釈ができ

るが、「崩壊地の多い、谷のある所」としたい。サル←サリ(去。曝)の転で崩壊地をいい、クラは谷を意味する古語(語源辞典)であるという。

【梅ヶ坪】

ウメガツボ。

この小字は、清水川支流の上流部にあり、ウメガダイラ小字とソラクボホッタ小字に挟まれている。

ウメガツボとは何を意味しているのだろうか。

ウメ(梅)はウメル(埋)の連用形が名詞化した語。ガは助詞、ツボ(壺)で、「壺のように土石が押し出していること」をいう。

以上から、ウメガツボは、「土石が壺形に押し出して埋められた谷のある所」ではないだろうか。ここには、押し出した土石の痕跡が残っている。

なお、全国地図には、ウメガツボ地名の記載は無い。

【砂田門ノ洞】

スナダカドノホラ。

この小字は、雲母南部で、清水川最上流部に位置する、広大な小字である。あちこちに堤があり、棚田状の地形にはなっているが、水田はごくわずかしかない。

スナダ(砂田)はスナ(砂)・ダ(処)で、「砂地」をいう。カド(門)は、カハ(川)・ド(処)で、「川が流れている所」をいう。

合わせて、スナダカドノホラとは、「砂地が多い所で、川が流れている谷」を意味するものと思われる。場所を示す接尾語が続くのが気になるが、他の解釈は浮かんでこない。

全国地図には、スナダカドノホラ地名が無いことは当然としても、カドノホラ地名も記載が無いのは、意外であ

る。

【堤洞】

ツツミボラ。

この小字は、スナダカドノホラ小字に包まれて、三カ所にある、小さな小字である。

ツツミボラとは、「灌漑用の貯水池のある谷間」を意味する。三カ所の内、二カ所は現在でも、水田になっており、残りの一カ所も、小字名発生時には田んぼがあったと思われる。

ツツミボラは、当然のことながら、この伊那谷南部には各地にある。しかし、全国地図には一カ所もないのは、面積が小さい小字で、中・大字にはなりにくいためか。あるいは、伊那谷特有のホラが付いているためか。

【小志ろばた】

コシロバタ。

雲母の真ん中のツツミボラ小字の上流側南隣にある小さな小字である。上流側には、貯水池がある。

コシロバタとは、何を意味しているのか。難しい地名である。仮説を二つ。
①コシ（小志）は、動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で、「水が湧き出る地」をいう（語源辞典）。ロはラなどと同じく接尾語で、漠然と「場所」を示す。ド（処）の転も考えられる（語源辞典）。以上から、コシロバタとは、「水が湧き出ている焼畑あるいは耕作地」を意味する。池もあり、清水川の水源にもなっている。水田の可能性もあるので、このような表現にした。
②コシロバタ←コシロウバタ（小四郎畑）と、転訛したと考える。コシロウは固有名詞である。コシロバタとは、「小四郎が所有していた耕作地」をいう。この名前は雲母に相応しい固有名詞かどうかは不明である。

むろん、全国地図には、コシロバタ地名の記載はないが、コシロ地名は一カ所だけ、中・大字として載っている。

【越窪後】

コエクボウシロ。

この小字は、雲母浅間神社の西にあり、中を県道天竜峡停車場・下平線が通っている。洞には水田が多い。

コエ（越）は動詞コユの連用形が名詞化した語、クボ（窪）は「凹んだ所」で谷のこと。ウシロ（後）は、裏手。

以上から、コエクボウシロは、「峠を越えて入った谷で、浅間神社の裏手になる」を意味する。

全国地図には、コエクボウシロは勿論のこと、コエクボも記載されていない。

【ほじと】

ホジト。

この小字は、峠の頂部付近にあって、雲母の浅間神社を祀っている。

ホはホ（穂）で、「小高い所」をいう。ジト←シト（湿）と清音化した語で、「湿地」をいう（語源辞典）。

合わせて、ホジトとは、「小高い所とその麓の湧水地のある土地」を意味する。

ホジ・トとする解釈もあり得るが、隣にツキジト小字があるので、上記のように解釈した。

全国地図には、ホジト地名は、記載が無い。

【月じと】

ツキジト。

この小字の中に、竜東中学校がある。

ツキジトとは、何を意味しているのか。語源辞典に依って考えていきたい。

ツキ（月）は、動詞ツク（突）の連用形で、突出した所、すなわち「台地」をいう。ジトはホジトのジトと同じで、

「湿地」をいう。

以上から、ツキジトとは、「台地とその周辺部の湧水のある土地」を意味するものと思われる。

ツキジト地名も、全国地図に記載されていない。

【原】

ハラ。

この小字の中を県道天竜峡停車場・下平線が通っている。雲母沢川の最上流部でもあり、周辺には、ソデ・ソトハタ・スナダカドノホラ・ホジト・キタバラなどの小字がある。

ハラ地名は全国的にも多く、国土地理院の 25,000 分の 1 地図には、中・大字として、450 ヲ所にも記載されており、「原」の文字を宛てた地名は、519 ヲ所にもものぼる。

ハラとは何か。仮説を二つ。

①ハラはハラ（開）で、「開墾地」をいう。この小字の東半分には、貯水池もあり、水田が多い。

②ハラとは「神聖な土地」をいう（語源辞典）。南西隣には浅間神社があり、ハラ小字にも若宮社がある。この小字の西半分は小高い丘と麓の湿地帯からなる。

【外畑】

ソトハタ。

この小字は、ハラ小字の北隣で、雲母沢川の左岸下流側にある。

ソトハタとは何か。これも二説を挙げたい。

①ソト（外）は、「神域の外になる所」で、ソトハタとは、「神域の外側にある畑」をいう。現在でも、畑や果樹園になっている。

②ソトはソ=セ（背）で、トは場所を示す接尾語（語源辞典）である。とすると、ソトハタとは、「尾根が伸びて

いる所にある畑」を意味する。

全国地図にはソトハタ地名は無い。

【山ふじづか】

ヤマフジヅカ。

この小字は、県道天竜峡停車場・下平線に添い、ソトハタ小字の雲母沢川左岸の下流側になる。側稜の細長い尾根が西側にある。

ヤマフジヅカとは何を意味するのか。二つの考え方を挙げる。

①ヤマフジ（山藤）は、山地に自生するマメ科の蔓性落葉木本をいう。ヅカ←ツカ（塚）の転で、「土が盛り上がって小高くなった所」（国語大辞典）を表す。合わせて、ヤマフジヅカとは、

「山藤がある小高い場所」を意味する。

②フジヅカとは、「近世の民間信仰遺跡の一つ。富士信仰の講中により造営された富士山の形を模した塚。特に文化・文政期以降に盛行した」（国語大辞典）であるが、この場合は、自然の小高い丘を富士山とみなして祀ったものと思われる。ヤマフジヅカとは、「小高い山を富士に見立てて祀った所」となるか。

ヤマフジヅカ地名は、全国地図には記載されていない。

【赤土】

アカツチ。

この小字は、竜東中学校の南側の丘陵地にある。

アカツチ（赤土）は、「鉄分を含み、赤く黄ばんだ粘土」（広辞苑）とあるが、村誌にいう最高位の段丘面にある赤色風化した堆積層であろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、9 ヲ所に記載がある。「赤土」地名は、11 ヲ所になるが、これは、アカツチ・アカトなどの呼び名が加わるためである。

【小垣外】

コガイト。

この小字は、県道天竜峡停車場・下平線に沿っており、ヤマフジヅカ・ソトハタ・イウサナリイワ・キララサワの小字に囲まれている。傾斜地にある小さな小字である。

コガイトとは何か。二説を挙げる。

①「小さな住居跡」とする。傾斜地であるが、緩い傾斜の所もあり、地名発生時に住宅があったとしても不思議ではない。

②コ（小）はほとんど意味を持たない接頭語であるとする。ガイト（垣外）は、カヒ（峽）・ト（処）で、「狭い谷」をいう。コガイトとは、「狭い谷のある所」を意味する。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、コガイト地名は、3カ所に載っている。

【西ヶ洞】

ニシガホラ。

雲母の「西ヶ洞」小字は、雲母の中心地と思われる浅間神社から見て、西の方にある。

ニシガホラとは、「中心地から見て西の方にある小溪谷」を意味する。

ニシガホラは宮沢にも尾林にもあるが、同じ意味に解釈している。

因みに、ニシガホラ地名は、全国地図には、なぜか記載が無い。

【西ヶ洞わか洞】

ニシガホラワカホラ。

この小字は、雲母の西部にあり、ニシガホラ小字を挟んで北側と南側にある。

解釈は二通り。①ワカ（分）は「分かれた地」をいう。「西ヶ洞によって分けられた谷」か、②ワカイ（若）から「湿地」をいうとすれば、「西ヶ洞

の近くにある水の多い谷」となる。

【ほうしば】

ハウシボであるが、別に「月ヶくぼ」というデータもあり、混乱している。

小字のある場所は、ニシガホラワカボラ小字とシミズイリミヤヤマ小字に挟まれた細長い小字である。

ハウシボとは、何を意味するのであろうか。

ホウ←ホホケル（「ほぐれ乱れる」の意）の語幹で、崩壊地形を示す。シボはシボ（皺）で、「縮んだような地形」（語源辞典）をいう。

以上から、ハウシボとは、「崩壊地があり、縦に縮んだような狭い谷」を意味する。

『下伊那地名調査』では、「月がくぼ」と読めるので、ツキガクボであればどういう意味になるのか、付け加えておきたい。

ツキはツク（突）の連用形が名詞化した語で、「突出した所」（語源辞典）をいう。とすれば、ツキガクボとは、「台地の中に突出したように入り込んでいる谷」となりそうだ。

現在のところ、『下伊那地名調査』の読み違いと考えている。

【けった洞】

ケッタボラ。

清水川最上流部にある、広大な小字で、ミツザワショウブガホラ・ミツザワ・トヨガホラなどの小字に囲まれている。現在は、山林と荒地で、水田は無い。水田地帯の洞は袋状に一括されて隣の小字になっている。

ケッタボラとは何か。語源辞典によって、二説を挙げたい。

①ケツは、ケチの促音便化した語で、「立ち入ると祟りがある、などとタブーのある地のこと」らしい。ケッタボ

ラとは、「耕作したりすると祟りがあるといわれている谷」であろうか。立ち入ると祟りがあるとするのは、厳しすぎる。現に、道路も通っている。袋所に入り込んでいる、隣の小字となる水田は、祟りを怖れて、小字の境界を変更していることも考えられる。なお、下伊那地方の方言としてケチダが挙げられているが、それは「耕作者に凶事があるという田」だという。

②ケツは動詞ケツル（削）の語幹で、「崩壊地」を意味する。ケッタボラとは、「崩壊地がある谷」ということになる。こちらの方が理解はしやすい。

全国地図には、ケッタボラ地名は記載されていない。

【三ツ沢・三ツ沢せうぶが洞】

ミツザワ・ミツザワショウブガホラ。

先に雲母のミツザワ（三沢）については触れているが、その「三沢」小字に接して、その南東側に連なっているのが、「三ツ沢」小字群である。

「三沢」については、「三つの谷が合流している所」と解釈した。この南東部の「三ツ沢」小字群については、この解釈が通じないので、別項とした。

こちらの「三ツ沢」小字は、痩せた小さな尾根にあり、これだけで独自の解釈をすることは難しい。この小字は、北西方向にある大きな「三沢」小字の飛び地と考えたい。かつてはひと繋ぎのミツザワ小字であったと思われる。

「三ツ沢」小字と「三沢」小字の間にあるのは、ミツザワショウブガホラ小字である。後に挿入された小字と思われる。

ショウブガホラについても、先に触れた。合わせると「湧水の細流がミサワ小字の清水川に流れ出る所」となる。

【かじや林】

カジヤバヤシ。

この小字は、雲母沢川と県道天竜峡停車場・下平線に接して、その東側にある。側稜の尾根の末端部にあたる。

カジヤバヤシについては、二通りの解釈が可能である。

①カジヤバヤシとは、「鍛冶を職業とする人の住居があった山林」をいう。尾根の麓は急傾斜地になっているが、頂上部付近は傾斜が緩く、南西よりの風を受けやすい斜面になっている。鍛冶屋があっても不思議ではない地形となっている。

②カジヤはカジ（嚙）・ヤ（谷）で、カジヤバヤシとは、「引っ掻かれたような崩壊地をもつ谷のある山林」ではどうであろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カジヤバヤシ地名は1カ所に記載がある。

【山田】

ヤマダ。

この小字を県道天竜峡停車場・下平線が通り、雲母沢川が流れている。カジヤバヤシ小字やシチジュウメ小字の下流側になる。

ヤマダ（山田）は、ヤマ（山）・ダ（処）で、「高い頂上部のある側稜の尾根の部分」をいう。ダは接尾語。水田は現在でも、ほんの一部分にしかない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヤマダ地名は、296カ所にもある。ありふれた地名である。

【ナキノ前】

ナギノマエ。

この小字の中を、イタチ川が流れている。下流側にアレタ小字やナカヤ小字があり、上流側には、ヤマダ・コシ

ンマエ小字がある。

ナギノマエとは、文字通り、「崩壊地のある前の方」ということになる。ナギは上流側にあることになる。

全国地図には、ナギノマエ地名は記載が無い。

【アレ田】

アレタ。

この小字は二カ所に、ほぼ並んでいる。ナキノマエ小字のイタチ川の下流側にある小さな小字である。現在は、ほとんどが水田になっている。棚田である。

アレタは、文字通り、「押し出し等で崩壊・堆積地にある水田」を意味する。雲母沢川とイタチ川の間にある湿地帯となっている。

アレタ地名は、国土地理院の全国地図には、1カ所だけ、中・大字として記録されている。

【中切尻】

ナカギリジリ。

イタチ川に添う小字で、県道天竜峡停車場・下平線がイタチ川を越える尾科橋が北側の隅に架かっている。

ナカギリ（中切）は、ナカが「川と川に挟まれた間の土地」で、ギリはギリ（切）は「谷間」をいう（語源辞典）。問題はジリで、二通りの解釈ができる。①シリ（尻）で「末端部」のこと。②形容詞シルシが転訛した語で、「泥が深い」ことをいう（国語大辞典）。

以上の組み合わせから、仮説は二つ。

①ナカギリジリとは、「雲母沢川とイタチ川の間土地の末端部」をいう。
②ナカギリジリとは、「泥深い雲母沢川とイタチ川の間土地」を意味する。

なお、ナカギリジリ地名は、全国地図には記載が無い。

【中ノ切】

ナカノキリ。

この小字は、ナカギリジリ（中切尻）小字の上流側にある。

先に、ナカギリジリでは、ナカは「川と川との間の土地」をいい、キリは動詞キル（切）の連用形で「谷間」を意味していた。

ナカノキリとは、「雲母沢川とイタチ川の間谷間」を意味する。

国土地理院の全国地図には、ナカノキリ地名は、中・大字として、2カ所に記載がある。

【日焼田】

ヒヤケダ。

この小字は、雲母沢川とイタチ川の間湿地帯にある。県道天竜峡停車場・下平線とナカギリジリ小字とナカノキリ小字に囲まれている。

一般に、ヒヤケダといえば、「水の便が悪くて枯渴した田」（国語大辞典）であるが、現地には全く合わない。

そこで次のように考えたい。ヒヤケ（日焼）は動詞ヒヤク（冷）の連用形が名詞化した語で、「水温の低い田」を意味する。ヒヤケダとは、「水温が低く稲の育ちにくい水田」をいうのではないだろうか。ここは雲母沢川が接しており、そこから水を取り入れることができるが、自然の湧水の方が多くで、水温が下がりやすい水田であった可能性が高い。

全国地図には、ヒヤケダ地名は1カ所にあるが、地名の意味は異なっているに違いない。

【細田入】

ホソダイリ。

この小字は、尾科の中心部から西の方にある大きな小字である。ヤマダ・ナカヤ・イドイリ・サカリ・モリノマエなどの小字に囲まれている。この小

字の東部を雲母沢川の支流が流れている。傾斜地の山地で水田は無い。

ホソダイリとは分かりにくい地名の一つ。

これも語源辞典を見ながら考えていきたい。解釈は二通り。

①ホ（秀）・ソ（背）・タ（処）・イリ（入）で、ホソダイリとは、「側稜の尾根の頂部が走っている谷の上流部」をいう。ソ＝セ（背）であるという。

②ホは美称の接頭語。ソダはサハ（沢）・タ（処）の転で、「湿地帯の上流部」をいう。

なお、全国地図にはホソダイリ地名の記載は無い。

【家ノ上中田入】

イエノウエナカタイリ。

県道天竜峡停車場・下平線がこの小字の中を通り、雲母沢川がここを流れている。ここから北側一帯は小さな小字がひしめいており、尾科の中心部があった場所と思われる。

この小字の近くに、ナカタイリ（中田入）小字があるはずであるが、ブルーマップには、その地番が無いので、その位置を確定できないでいる。

イエノウエとは、そうした尾科の中心部にある「有力者の家の上流部」をいう。ナカタイリは、「雲母沢川とイタチ川の間の上の方」を指すものと思われる。

イエノウエナカタイリとは、やや複雑になるが、「有力者の家の上の方になるが、雲母沢川とイタチ川の間の上流部に当たる地域」をいうか。

イエノウエナカタイリ地名は勿論のこと、ナカタイリ地名も、国土地理院の全国地図には、一件の記載も無い。

【森ノ前】

モリノマエ。

小さな小字が密集する尾科の中心地の近くにある小字で、南隣には、大きなホソダイリ（細田入）小字がある。

モリ（森）とは、単に樹木が茂った所ではなく、「神社などのある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立った所」（国語大辞典）であろう。

モリノマエとは、「神域の樹木が茂った森の前に方にある土地」を意味する。

では、このモリがどこにあるのだろうか。400mほど西の方にある高森山がモリなのだろうか。少し離れすぎているように思える。近くのホソダイリ小字に、モリがあれば問題はないのだが、ここに寺社はなかったのかどうか。

国土地理院の全国地図には、モリノマエ地名は、中・大字として、4カ所に挙げられている。

【前畑】

マエバタ。

この小字は、尾科中心部にあり、イタチ川に添っている。

マエ（前）は、その基準は、すぐ西側にあるナカヤ（中屋）小字にあったと思われる有力者の居住地であろう。

バタは、畑をいうのか、あるいは縁辺をいうのか。どちらにも可能性はあるので、二通りの解釈を挙げる。

①マエバタとは、「有力者の居住地前方にある畑」をいうか。

②マエバタとは、「有力者の居住地の前方にある、縁辺の地」か。イタチ川に添っているため、中心地から見れば縁辺になるのであろうか。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、2カ所に、マエバタ地名が記載されている。

【サカリ】

この小字も尾科の中心部に3カ所

もある。いずれもナカヤ小字を包むように位置している。

サカリとは何か。二説を挙げる。

①サカリ←動詞サガル（下）の連用形が名詞化した語から転じたとみる。サガリ（下）には、「ある部分が他より低くなっていること」（国語大辞典）という意味がある。サカリとは、「有力者や寺社などより低くなっている所」をいう。三つのサカリ小字の内、北側の二つは、ナカヤ小字に対して下がっており、南側の一つはホソダイリ小字よりも下がっていることをいうか。

②サカ（坂）・リ（場所を示す接尾語）とする。サカリとは、「傾斜して勾配のある所」（語源辞典）である。傾斜地はどこにでもあるので、躊躇するところ。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、サカリ地名が5カ所に載っている。

【中屋】

ナカヤ。

尾科の小さい小字が密集している所にある。西隣には、広大なオシナ小字がある。

ナカヤ（中屋）とは、「尾科の中心地にある有力者の住居ないし住居跡」であろう。

ナカヤ小字は、この地域では、集落に中心部にはある場合が多い。今までに調査した旧4ヶ村の中では、今田・桐林・伊豆木でナカヤ小字を確認している。

国土地理院の全国地図にも、ナカヤ地名は64カ所に記録されている。

【茶園畑】

チャエンハタ。

この小字も、尾科の小さな小字の密

集地にある。

チャエンハタ（茶園畑）とは、字面通り、「お茶の木を栽培している畑」を意味するものと思われる。

有力者だけが用いたのであれば抹茶であろうが、この茶畑で採れたお茶は、庶民が利用した番茶であったと思われる。茶が生糸に次ぐ輸出品になる前に生まれた小字と思われる。

チェエンバタ地名は、全国地図に、中・大字として、1カ所だけ記載されている。

【シャジ畑】

シャジハタ。

この小字も、尾科の小字密集地にある。西隣には広いオシナ小字がある。

①シャジハタとは、シャチ（社地）・ハタ（畑）で、「神社が所有している畑」と思われる。

②あるいは、シャシ（社祠）・ハタ（畑）で、「社か祠を維持するための畑」であったかもしれない。

③神仏習合の時代だったから、シャジ（社寺）・ハタ（畑）で、「収穫物をお寺やお宮の祭祀費用に宛てた畑」とすることも可能であろう。尾科にあったという、太子堂の維持費用に使われたのかもしれない。

なお、シャジハタ地名は、全国地図には載っていない。

【蔵本】

クラモト。

この小字も、尾科の小字密集地の中にある、やや大きな小字。

クラモト（蔵本）とは、「倉庫のある所、あるいはあった所」をいう。

貢租としての米などを一時的に貯えたり、飢饉用の穀物を貯蔵した蔵で、集落の中心地にある。

国土地理院の全国地図には、中・大

字として、クラモト地名は、26カ所に記載されている。

【川原田】

カワラダ。

この小字も尾科の小字密集地で、イタチ川に沿った低地にある。現在は畑になっている。

ダ(田)は、「耕作地」のことか。

カワラ(川原)は、字面の通りで、川沿いの平坦地のこと。

カワラダとは、文字通り、「イタチ川の氾濫原にある耕作地」となる。

カワラダ地名はどこにでもあり、全国地図にも、18カ所が、中・大字として記録されている。

【尾科】

オシナ。

この小字は、オシナ小字密集地の西側にある大きな小字である。この小字が、旧尾科村の村名にまで出世している。

オシナとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、解釈を二通り。

①オ(尾)はヲ(尾)で、「山裾の末端」をいう。シナ(科)はシナ(階)で、「段丘」を意味する。オシナとは、「段丘状になっている尾根の末端部」を表している。

②シナは動詞シナフ(撓)の語幹で、「傾斜地」をいう。ヲは「高み。連峰」のこと。オシナとは、「尾根続きの側稜にある傾斜地」をいう。

国土地理院の25,000分の1地図には、中・大字として、オシナ地名は1カ所にある。その記載があるのは、『時又』の地図だけ。

【一ツ瀬】

ヒトツセ。

この小字は、イタチ川右岸に2カ所ある。南側にあるヒトツセ小字は小さ

な小字で急傾斜地になっている。かつては、北の方の広いヒトツセ小字に繋がっていた可能性が高い。

ヒトツセはヒト(均)・ツ(助詞)・セ(瀬)で、「傾斜の緩い平坦な地で、浅瀬のある所」を意味するものと思われる。大きい方の北のヒトツセ小字は、イタチ川に沿っている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヒトツセ地名が5カ所に記載され、いずれも「一ツ瀬」の字が宛てられている。

【中洞沢】

ナカボラサワ。

この小字は、卯月川左岸に沿った小字で、東方のナカヤ小字の東隣になる。ここも尾科の小さな小字密集地の縁辺になる。

ナカボラサワとは、「尾科の中心地であるナカヤ小字の近くにある小さな谷を流れる川」をいうか。「小さな谷を流れる川」とは、卯月川のこと。

全国地図には、ナカボラサワ地名は載っていない。

【高橋中切沢】

タカハシナカノキリザワ。

この小字は、上久堅との村境にあり、卯月川右岸にそって、ナカボラサワ小字の対岸にある。この小字を卯月川の支流がほぼ直線状に流れている。

タカハシは、カタ(高)・ハシ(端)で、「台地の端」のこと。ナカノキリは、「尾根と尾根の間で崩壊地のある所」をいう。

以上から、タカハシナカノキリザワとは、「側稜の尾根の高台の端にあり、もう一本の尾根との間にあって、崩壊地もある沢」を意味する。

もちろん、全国地図には、この地名は載っていない。

【田入・田ノ入】

タノイリ。

これらの小字の北側にある「田ノ入」小字は、イタチ川に架かる尾科橋の近くにある小さな小字で、南側の「田入」小字は卯月川に沿っており、側稜の尾根の高台も含んでいる。かつては、南側のタノイリ小字が北の方まで範囲が広がっていたのであろう。

タノイリとは、タナ(棚)・イリ(入)で、「棚状の土地のある所」と解したい。この小字には、現在でも水田は無い。タナは尾根の頂上部をいうのか、それとも洞の棚所の階段をいうのかは、どちらともいえない。あるいは、双方を重ねてタノイリと名付けたのかもしれない。

国土地理院の全国地図の全国地図には、中・大字として、タノイリ地名が9カ所に記載がある。

【平畑】

ヒラハタ。

この小字は、上久堅との村境にある。側稜の尾根部分と中腹までの傾斜地を含む小字である。

ヒラハタとは何か。

ヒラ(平)は「山の一部が平らになっている所」や「台地」(語源辞典)をいう。ハタ(畑)は、「焼畑」としたい。

ヒラハタ(平畑)とは、「一部が平らになっている山地で、焼畑が行われた所」としたい。ここは現在も畑にはなっていない。

全国地図にヒラハタ地名は12カ所。

【皿田】

サラダ。

この小字は、イタチ川の両岸にかかる小さな小字である。右岸は低湿地、左岸は急傾斜地となっている。

サラタ(皿田)は、下伊那地方の方言で、「排水のできる田。乾田」(国語大辞典)とある。しかし、小字図をみると、現在でも水田にはなっていない。湿地もあるが、乾田というには遠い。

そこで次のように考えた。

サラは動詞サラフ(掠)の語幹で、「奪い去られたよう土地」をいう(語源辞典)。ダ←タ(接尾語で「処」)。

合わせると、サラダとは、「崩壊した場所がある所」となるだろうか。

国土地理院の全国地図には、サラダ地名は、中・大字として、2カ所に記載されている。

【古新前】

コシンマエ。

この小字は、雲母沢川とイタチ川の間、側稜の尾根の末端部にある。住宅があり、周辺は果樹園になっている。

コシンマエとは何を意味するのだろうか。解釈を二つ挙げる。

①コシンはコシン(古神)で「従来からの神」をいうか。コシンマエとは、「従来からある神を祀る神社の前」を意味する。すぐ南隣のミヤノマエ小字には、諏訪神社がある。

②コシンはコ(子)・シン(新)で、「親村から出て新たに開墾した新開地」をいう。マエは「以前、～だった所」を表す。時間的なマエ(前)も考えられる。コシンマエとは、「かつて新開地であった所」か。

全国地図には、コシンマエ地名は載っていない。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

尾科の諏訪神社が鎮座する小字。周辺には、コシンマエ・ヤマダ・カジヤバヤシ・ネコマタシヒヤクメ・ゴンゲンドウなどの小字がある。

ミヤノマエとは、文字通り、「神社の前にある土地」であるが、この諏訪神社は、ミヤノマエ小字の中にある。やや変形的なミヤノマエか。

ミヤノマエ小字はどこにでもあり、旧村の産土神社には必ずとっていいほどある。全国地図にも、中・大字として、94カ所にもある。

【大井上】

オオイウエ。

この小字は、雲母沢川とイタチ川に挟まれた、狭い尾根の末端部にある。

オオイ（大井）とは、「大きな井水」とするのが、一般的であるが、ここ尾科のオオイ付近には、井水はない。

ここでいう大井とは、雲母沢川かイタチ川であるが、この小字を流れているのは、雲母沢川なので、オオイは雲母沢川のことを示している。

オオイもどこにでもあって、国土地理院の全国地図には、中・大字として、36カ所に記録されている。

【除ヶ道上】

ヨケミチウエ。

この小字は、イタチ川右岸にあって、上久堅村境とゴンゲンドウ・ムジナボラ・オオボラウエなどの小字に囲まれている。

ヨケミチ（除ヶ道）は、一般には、「本道からわきへそれた道」（国語大辞典）であるが、ここでは、下伊那の方言になっているという、「崖際の通路」としたい。ヨケミチウエは「崖際の通路の上の側稜の尾根付近」をいう。

【虫歯】

ムシバ。

ムシバ小字は、イタチ川右岸に沿った小さな小字と上久堅村境にやや大きな小字がある。

ムシ（虫）は、動詞ムシル（塗）の

語幹で、「ちぎられた、もぎとられたような地形」（語源辞典）をいう。バ（歯）はバ（場）で、「場所」のこと。

以上から、ムシバとは、「崩壊地のある土地」をいうか。

全国地図にはムシバ地名は無い。

【権現堂】

ゴンゲンドウ。

この小字は、イタチ川右岸にあり、ミヤノウエ小字の対岸で上久堅との村境に接している。

権現堂は「仏菩薩の仮の姿である神をまつた堂」（国語大辞典）というが、これだけでは、はっきりしない。権現とは、「平安時代中期ころよりみられ、八幡大権現・熊野大権現・蔵王大権現・白山大権現という呼称が普及した。権現号は、強力な靈験を発揮する神霊と考えられ、山岳の靈場において多く使われた。明治元年の神仏分離令において、社での権現号の使用は禁止された」（民俗大辞典）という。この付近では、秋葉大権現・金比羅大権現などが加わる。

この権現堂小字の地が、中世末より山岳靈場になっていたことは十分に考えられる。あるいは、神仏分離令により、西隣の諏訪神社から権現様に移された可能性もある。

国土地理院の全国地図には、ゴンゲンドウ地名が、中・大字として、21カ所に残されている。

【入道田】

ニュードウダ。

大屋敷の小字で、イタチガサワ右岸にある。この小字内のイタチ川と一般道米川・駄科停車場線との間は、ほとんどが水田になっている。

ニュードウダとは、何を意味するのだろうか。語源辞典によって三説を挙

げたい。

①側稜の尾根が突き出した頂部を入道頭に見立てた語で、ニュウドウダとは、「入道頭のように見える尾根の麓に水田もある所」となる。

②ニュウドウ←ニフ(丹生)・ト(処)とすると、ニュウドウダとは、「赤土のある水田地帯」か。

③ニュウドウ←ニブ(鈍)・ト(処)で、「湿地」をいう。ニュウドウダとは、「湿地にある水田地帯」を意味するか。

全国地図には、ニュウドウダ地名は記載が無いが、ニュウドウは7カ所に。

【猫又・猫俣】

ネコマタ。

この小字は、イタチ川の右岸の左岸に一カ所ずつある。左岸のネコマタ(猫又)小字は小さいが、これを包んでいるネコマタシヒヤクメ(猫又四百目)小字は、広大な小字になっている。

ネコマタとは何か。これも語源辞典に依拠しながら、二説を挙げたい。

①ネ(嶺)・コ(処)・マタ(股)で、「側稜の尾根が、二股に分かれている所がある土地」をいう。広い面積であれば、必ずどこかに二股の尾根はあるものだが、どうであろうか。

②ネ(根)・コマ(コロマで川の曲流点)・タ(処)で、「川の曲流点のある所」となる。

全国地図には、中・大字として、ネコマタ地名は1カ所にある。

【大洞上】

オオボラウエ。

この小字は、上久堅村境にあり、ヨケミチウエ・ムジナホラ・ムシバの小字に囲まれている。二つの側稜とその間の比較的大きな谷で構成されている。

オオボラウエとは何か。二通りの解釈を示す。

①オオボラウエを自然に解釈すれば、「大きな谷の上の方」になる。「上の方」とは、側稜の尾根とその両側の傾斜地のことになる。

②オオ←アハの転とすると、アハク(暴)はアバクの古語で、「崩壊した所」をいう(語源辞典)。オオボラウエとは、「崩壊した谷の上の方」を意味する。谷の底は、棚田状の荒地になっており、過去に崩壊・堆積した様子が見える。

全国地図には、オオボラウエ地名は載っていないが、オオボラ地名は20カ所に記載がある。

【貉洞】

ムジナボラ。

この小字は、上久堅村境からイタチ川に至る長い小字になっている。

ムジナボラとは何か。ムジナとは、アナグマかタヌキのことをいう。

①字面でみれば、ムジナボラとは、「狸か貉が目立つ谷」ということになる。これもあり得るが、別解も示しておきたい。

②ムジ←ムシル(峯)の語幹で、崩壊地形をいう(語源辞典)。ナは場所を示す接尾語。ムジナボラとは、「崩れがある小さな谷間」をいう。

なお、全国地図には、ムジナボラ地名は、一件も記録されていない。

【坂森】

サカモリ。

この小字は上久堅村境に近い山中にあり、ムジナボラの南隣になる。複数の居住地があり、水田・桑園や果樹園もある。

サカモリとは何か。簡単なようで難しい。小字内に寺社などがあれば、モ

りも生きてくるが、現在のところ、その痕跡はない。

サカ（坂）は、傾斜地のこと。モリ（森）←モル（漏）の関連から「水の湧く所」（語源辞典）という。

合わせて、サカモリとは、「自然湧水の多い傾斜地」を意味するか。この小字の中を、イタチ川の支流が流れており、洞には水田の多いことが傍証になろうか。

国土地理院の25,000分の1全国地図には、中・大字として、3カ所に記載がある。

【黒石】

クロイシ。

側稜の尾根が上久堅との村境になっており、この小字はその村境に接している。

クロイシとは何か。字面通りの「色の黒い石」では、意味が分からない。

クロイシについては、宮沢の「与右衛門クロ石」小字のところで、一度触れている。

そこでは、クロイシとは、「耕作地のクロ（端）に積み上げた石」とした。この大屋敷のクロイシも同じ解釈にしておきたい。耕作地があったとすれが、この山地である、焼畑による耕作としか考えられない。

国土地理院の全国地図には、クロイシ地名は、中・大字として33カ所にも記載がある。

【かうちう田】

コウチュウダ。

この小字は、東はイタチ川左岸から西は千代との村境にわたる広大な地域になっている。大部分は村境の山地であるが、棚田状の荒れ地もあるし、イタチ川河畔の低地は水田地帯になっている。

コウチュウダが、コウチュウ（蝗虫）・ダ（田）であれば、「イナゴがはびこる田んぼ」ということになるが、この地域で、イナゴといわずにコウチュウというのだろうか、という疑問がある。

では、コウチュウダとは何を意味しているのか。二説、挙げておく。

①コウチ（耕地）・イフ（井のある）・タ（処）で、「新しい開墾地で、川がある所」をいうか。あるいは、焼畑が広く行われていたかもしれない。

②コウチ（河内）・ウダ（宇田）で、「川の近くで湿田のある所」となるか。ウダはムタ、ニタと同系で、「泥田。湿地」をいう（語源辞典）。

因みに、コウチュウダ地名は、全国地図にはない。

【トヨ下・とよ上】

トヨシタ・トヨウエ。

イタチ川右岸にあり、30mほど離れて並んでいる。

トヨは一般的には、井水のことをいうが、イタチ川から井水を引いている形跡はない。また、トヨには「水音の響く所」の意もある（語源辞典）が、トヨウエとトヨシタの距離から、解釈の一つにすることは難しい。

トヨ←ドヨで、下伊那では「流の堰」をいう（語源辞典）。規模の大きな井水ではなく、イタチ川を一時堰き止めて、近くの田んぼに水を入れていたのではないかと推測している。その場所は、現在、ヨツケタ橋が架かっている付近ではないかと思われる。

全国地図には、トヨシタ地名はないが、トヨ地名は、中・大字として、2カ所に記載されている。

【猿田】

サルダ。

この小字は、清水川流域とイタチ川流域の間の尾根の連なりを西端として、東はイタチ川に達する、広い地域になっていて、大屋敷の富士浅間神社もある。主には山地であるが、広い水田地帯もある。

サル（猿）は、サラ・サリ・サレなどの転じた語で、「崩壊地」をいう（語源辞典）。動詞サル（去。曝）に関連して転じた語ともいう。

サルダとは、「崩壊地のある水田地帯」としておきたい。

なお、サルダは猿田彦に因む地名という見方もあり、庚申信仰とも関わるので、関係ないと切るのは難しいか。

国土地理院の全国地図には、サルダ地名は、中・大字として、7件が挙げられている。

【マセ場】

マセバ。

この小字は、ヨソヘイダ・サルダ・ナカジマなどの小字に囲まれた細長い小字で、一つの洞となっている。この小字には耕作をした形跡はない。

マセはマ（間）・セ（狭）で「狭い谷」をいう（語源辞典）。

マセバとは、「狭い谷になっている所」を意味する。狭すぎて耕作はできなかったのかもしれない。

全国地図には、なぜかマセバ地名は記載が無い。

【輿曾平田】

ヨソヘイダ。

この小字は、イタチ川左岸にあり、サルダ・マセバ・ツブテイシ・ホンボラなどの小字に囲まれている。

ヨソヘイダとは何を意味するのか。ヨソヘイを固有名詞と考えると、ヨソヘイダとは、「輿曾平の耕作している水田または土地」ということになる。

現在でも山地は山林であるが、洞の低地は水田になっている。

ヨソヘイを固有名詞としない解釈は、今のところ思いつかない。

当然のことながら、全国地図にはヨソヘイダ地名は無い。

【升口】

マスクチ。

この小字は、イタチ川がほぼ直角に屈曲する点の左岸の小さな小字である。イタチ川の氾濫原で、現在は荒地になっている。カツラボラトウゲ・ツブテイシ小字と千代との村境に囲まれている。

マスクチとは何か。語源辞典によって三通りの解釈を挙げる。

①マス（升）はマス（枘）で「四角形の形」をいう。クチ（口）は「川の合流点」の意である。マスクチとは、「川の合流点で四角形のかたちをした所」を意味する。ここで支流がイタチ川に合流している。

②クチ（口）は、動詞クチル（朽）の連用形が名詞化した語で、「湿地」をいう。マスクチとは、「四角形のかたちをした湿地」をいう。

③マスはマ（接頭語）・ス（砂）で「砂地」のこと。マスクチとは、「川の合流点になっている砂地の所」をいう。

マスクチ地名も、なぜか、全国地図には載っていない。

【カツラ洞・葛洞峠】

カツラボラ・カツラボラトウゲ。

これらの小字は、千代との村境にある。か「カツラ洞」小字を挟んで、三カ所に「葛洞峠」小字がある。

カツラボラとは何か。これも語源辞典によりながら、二通りの考え方を挙げる。

①カツラはカハ（川）・ツラ（面）で、

「川の近くの土地」をいう。カツラボラとは、「川がながれている谷」をいう。イタチ川の支流が流れており、大きな洞になっている。

②カツラ←カズラ（葛。蔓）の転で、蔓草のこと。カツラボラとは、「蔓草の多い谷」となるが、この解釈では無条件パスとはならない。

カツラボラトウゲは、「カツラホラの谷の両側にある側稜を越える峠道のある所」か。

全国地図には、カツラボラ地名は1件も記載が無い。

【中島】

ナカジマ。

この小字は、カツラボラ小字群の間にある。

大きな川とか海によくある地名であるが、この山中ではどんないわれがあるのだろうか。

語源辞典によれば、ナカ（中）には、「山などの間」という意味もある。山地の中のことというらしい。そうなる意味もはっきりしてくる。ジマ＝シマで、「川端の低地などにできた耕地」（語源辞典）をいう。愛知県北設楽郡で使われていた方言でもある。

以上から、ナカジマとは、「イタチ川支流が開析した谷にできた水田」としたい。

【樽ヶ入】

タルガイリ。

この小字は、千代との村境にあり、側稜の尾根につながる。ナカジマ小字の南側にある。

タル（樽）は、タル（垂）で、下伊那では「谷川の滝となっている所」をいう（語源辞典）。イリ（入）は、「山と山との間の沢」（語源辞典）のこと。

以上から、タルガイリとは、「滝と

なっている所がある谷川」を意味する。イタチ川の支流の支流が、この小字にはあり、勾配の急なところもあるので、それをタルと呼んでいたのかもしれない。

全国地図には、タルガイリ地名も記載が無い。中・大字にはなりにくい地名か。

【與助田】

ヨスケダ。イタチ川に架かる橋を「ヨッケダ橋」と呼んでいるので、地元では、ヨッケダといっているかもしれない。促音便化しているのだろう。

この小字は、イタチ川右岸の氾濫原にあり、現在は荒地になっている。小さな小字である。

ヨスケは固有名詞としか考えられない。ヨスケダとは、「與助の所有地」を意味すると思われるが、なぜ所有権を主張するほど大事な土地なのか、はっきりしないが、ヨッケダ橋との関わりがあるのかもしれない。

全国地図には、むろんのこと、ヨスケダ地名は無い。

【本洞】

モトホラ。

この小字は、イタチ川右岸にある、大きな小字である。コウチュウダ小字とツブテイシ小字に挟まれており、大屋敷部落集会所がある。

ホンボラとは、「大屋敷の中心地である谷間」を意味するか。

全国地図には、モトホラ地名は載っていないが、ホンボラ地名は2カ所に記載があり、いずれも「本洞」の字を宛てている。

【つぶて石】

ツブテイシ。

この小字は、千代との村境で、イタチ川右岸にあり、小字内を地方道米

川・駄科停車場線が通っている。

ツブテイシとは何か。仮説を二つ。

①ツブテイシ（飛礫石）とは、「神か
大力の者が投げたという伝説をもつ
巨岩」（国語大辞典）という。尾科の
文吾が登場するような伝説があれば
面白いがどうであろうか。確認はして
いない。

②ツブテイシとは、「石合戦をした場
所」かもしれない。村境であり、イタ
チ川も流れている。豊凶を占う印字打
ちが行われた可能性がある。たびたび
事件が起きて、時の江戸幕府が寛永
11年（1634）に禁令を発したが、そ
の後も各地で行われたという。

全国地図には、ツブテイシ地名が
中・大字として、1カ所に記録されて
いる。